
REV

神宮寺飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

REV

【Nコード】

N9775E

【作者名】

神宮寺飛鳥

【あらすじ】

どこか遠く、いつかの未来。滅んだ地球の中で生きて行く為、人類はドーム型の人工都市の中で暮らしていた。長い年月が過ぎ去り、滅びの理由も世界への疑問も薄れ、誰もがその世界を当たり前だと考えるようになったある日、スラム街で暮らす少年、ウラの身に劇的な変化が起こる。空から降ってきた棺から現れたのは、美しい少女だった。少女の言葉は少年の世界を、大きく変える切欠となる。「あなたが、私を『人間』にしてくれるのですか——？」秋SF企画、空想科学祭参加作品です。企画共々宜しくお願い致します。9

／ 17 ・ 完結です。ありがとうございました。

REV・0（前書き）

やっちまったんだZE！ としか言えない。

企画参加作品として、小説家になろう様の隅っこの方で細々とやって行きたいです……。

この世界には、三つの種類の人間がいる。

全部の人間の数を十人だとすると、そのうちの三人くらいはまともな仕事に就いている人間だ。

まともな仕事、なんて言ってもピンキリで、結局本当にきちんと働いているやつは本当にごく僅か……0・1人くらいではないだろうか。

みんなきちんと働いているように見えて、裏では何をしているのかわかったものではない。別に誰かがそうなのではなく、みんなそうなのだ。とりわけ今更騒ぐほどの事じゃない。

最も割合の多い……十人のうち、五人程だろうか？ この五人——まあ要するにこの世界の半分くらい——は、まともではない職業に就いている。

例えばボクもそう。犯罪行為を繰り返して生計を立てているような人間だ。でもそれはなんというか……ほら、生きるために仕方がないっていうか。

本当にちゃんとした仕事に就ける奴なんてめったにいない。それこそ、その会社とコネがあるとか、生まれ育ちがいいだとか、そうした特別な環境が必要だ。でもボクにそういうものはなかったし、そういうものが無い人の方が圧倒的にこの世界には多いのだ。

仕事がないのだから、手に職をつけてなんとかするしかない。勿論、裏通りでひっそりと暮らしているホームレスのようになる事も出来る。ただボクはそういう生き方は嫌だったというのもあり、そして何よりそうせずとも生きていけるだけの力があつた。

部屋そのものは、元々相当な広さがあつた。ただ、毎日毎日ガラクタを持ち込んでいるうちに、気づけば生活可能なスペースは2畳

半くらいになつてしまった。

起きて半畳寝て一畳……。まあ確かにそれで困っていないのも確かだけど、狭いという事実だけは変えようも無い。

部屋の中央にどっかりと居座っている大型のディスプレイが三基。

それにそれぞれ繋がれたPCが二つずつ。その他にも色々仕事に必要なもので部屋は埋め尽くされている。

ケーブル類が作り出す密林のような空間の中、一つだけ清潔なところでもなく高級なリクライニングチェアだけがボクに唯一許された居場所だと言えるだろう。

埃っぽい匂いと放熱フィンが猛回転する凄まじい騒音の中、ボクは仕事に勤しんでいた。ディスプレイ上で処理される膨大な数の情報の羅列を十本の指をフル活用してやりとりしていく。

今の世界にパーソナルコンピュータを操作する方法はいくつかある。そのうちボクは従来のキーボードによるタイピング方式が一番のお気に入りだった。

ちなみにきちんとした情報処理のやり方としては余りにも古く旧時代的だ。でも間違いが起こりにくいし、慣れれば呼吸をするように操作が可能なのがいいところ。

何より、自分がちゃんと操作しているって気がするから楽しい。

今回はそんな事を言っている場合ではなく、急ぎの仕事だったため、視線によって操作を補助するデバイスを併用しているわけだけれど、やっている事はとても単純だった。クライアントに依頼されたデータを盗み出し、クライアントに売り渡す仕事である。早いところハッキング。仲間内ではトレジャーとも言われているが、これは別にどちらでもかまわないだろう。

問題はこの行為がどう考えても違法であり、犯罪行為であるという事。 たった今侵入し、データを漁っているサーバーはFRESという大手の兵器開発会社で、もしバレたりしたら自家製の暗殺用ロボットが送り込まれてくることうけあいだ。

そんな危険な仕事だからこそ、そんな危険な場所だからこそ、当然

報酬はいい。　ハイリスク & amp ; ハイリターンな仕事のほうが、ボクとしてはやりがいがある。

自分の周りをぐるりと取り囲むほどの大きさのモニターに囲まれ、それらを高速で飛び交う情報たちを眺めていると、だんだんとわけのわからない気分になる。

頭の中が真っ白になっていき、ただ操作する事だけしか考えられない。

その瞬間ボクの世界は少しだけ変化する。　世界の中心に自分がいるような錯覚を覚える。　失敗した場合の事、報酬の事などその時には完全に頭がない。

それは膨大な情報の海を自由自在に泳ぎまわるような不思議な感覚。光りの羅列の中、息を切らし、リズムを取りながら操作を繰り返す。

今までも何度も何度もそうしてきた。　だからきつと生まれてから死ぬまでそうして生きていくのだと思う。　これはもう、自分で言うのもあれだけど、病気だ。

倫理的に言えば当然悪い事をしているのだから、申し訳ないと思うのが人間なのだろう。　でも、この世界でそんなことを気にしていたら生きていけない。

何よりボクはそれが楽しかった。　一人きりの人生ならば、誰かに咎められることも無い。　このボクを特定する事など出来るものならばやってみると言いたい程で、とてもじゃないが捕まる気はしなかった。

ただそれでも、時々ぎりぎりのラインを行かねばならないことがある。　綱渡りのようなものだ。　そんな場面に遭遇すると、身体の内から冷え切っていくような、凄まじい焦燥感を覚える。

心臓がどくどく脈打ち、何とか乗り切れと。　自分ならやれると。　でも、もし見つかったらどうしよう。　複雑な思いがあふれ出し、叫びだしたいような気分になる。

それを抑えて心を白く塗りつぶし、自分の腕を信じてやり通した時

。それは、筆舌に尽くしがたい充実した瞬間になる。

「――ふうっ」

まさに今がそれ。

F R E S社から盗み出した最新兵器に使用されるはずの試作A I。
こいつをクライアントであるO S社に引き渡せばお仕事は完了。

二つの会社はライバル企業なので、こんなやりとりも多いのだろう。
正攻法での潰しあいも結構だが、金を使って色々な戦略を立てねば今の世界では生き残る事も出来ない。

そんな腹黒い企業の本心があるからこそ、ボクみたいなのも生きていける。じつとりと全身を伝う汗に気づき、シャツを仰いだ。

回収したデータはすぐには引き渡さない。納期があるのだ。まだ数日あるその猶予の間に、このA Iデータを解析し、出来ればコピーをとっておく。

そうすればまたどこかの誰かに高く売れるだろう。O Z社は怒るかもしれないが、そこまでは契約に入っていないし、入っていたとしてもボクを特定できないのなら意味のないこと。

ボクが仕事を引き受けるのは常にネット上。直接面識がある人は居ないし、逆探知しようにもボクはいくつもの会社を足がかりにしてネットにアクセスしているから、捕まえるのは至難の業だ。

なにせ大手企業のブロックをいくつも同時に潜り抜けるような神業をやったのけねばならないのだ。勿論その中にはO Z社もF R E S社も含まれている。両社ともに以前仕事を請けたことがあり、その時こちらに送られてきたダミーの連絡先からこっそりメインサーバーまで手繰り寄せ、ショートカット……ボクだけが即座にアクセスできる窓口を勝手に作っておいたのだ。

ばれそうになったら自滅するプログラムを組んであるから向こうは絶対に気づかない。そんな調子でいくつもの企業を経由しているのだから、危ない目にあつたことが一度もないのも当然と言える。

部屋に窓はない。壁につけた巨大な換気扇を回す。いくつもの機械が放熱ファンをガンガン回しているせいで、室温はとんでもない事になっていた。

仕事も終えたし、長居は無用。部屋を出るとすぐに冷たい朝方の空気が吹きつけ、汗の滲んだ頬がひんやりと涼しく、思わずため息をつく。

が、寒い。外は肌寒いくらいだった。えらい気温の差だ。あわてて部屋に戻り、ジャケットを椅子から引ったくり外に出る。

上着を羽織りながら歩く細い通路は錆だらけ。床は金網のようになっていて、朝露に少しだけ湿っていた。

ボクの部屋は巨大な密集住宅地域にあった。何が密集かと言うと、元々はただの住宅地区だったところにどんどん次から次へと不法増築が行われ、部外者にはどこがどこに繋がっているのかもわからないような巨大迷宮になってしまっているのである。

ひどいところにあると床に出入り口があったりする。天井もそうだ。はしごを使って上ったりする。四方八方が住居なので、どこに誰が住んでいるのか、正確に何人住んでいるのかなど、なんにもさっぱりわからない。

電気は自家発電しているやつと、他人の電力を勝手に引いているやつがいる。ボクは自家発電派。以前は隣に住んでいる夜の仕事をしている女の人から勝手に拝借していたけど、その人が何らかの理由で死んだらしく電力が急にストップし、仕事の手が止まってしまったことがある。

そんなこんなでやはり自分の力で何とかするのが一番だと考え今に至る。今歩いている金網通路は増設された連絡通路で、本来の通路は2メートルくらい下にある。

ふと、足を止めて町を見下ろす。夜明けの町はとても暗い。けれどとても明るい。あほみたいに町中を照らし上げるネオンとサイクリイトと、それこそ本当にあほな一晩中遊びまわっているような連中の笑い声に包まれている。

自分の部屋を出て十分近く歩くと、ようやく地上に降りる事が出来る。三階建てビルに相当する高さに自室があるとは言え、とんでもなく遠回りをして迷宮を迂回しないと町に出られないのはとても不便だ。

お陰で何かあっても自分の部屋まで辿り着けるやつはそうそういないだろうと思う。

何故か開きっぱなしになっているマンホールから噴出す白い水蒸気を避けて進み、自動販売機で飲み物を購入する。

「もうすぐだなあ」

腕につけた立体映像式時計の秒針がゆつくりと刻まれる。

この町に夜はなく、昼はなく朝もない。本当ならば見えるはずの空を被い尽くすドーム上の天板がボクらの空を被っていた。

昼と夜の区別は既に天体がつけるものではなく、人の手で下される物となった。そしてそれはゆつくりと行われるのではなく、唐突に。そう、決まった時間に正確に迎えられる。

朝を告げるサイレンが鳴り響き、照明が一斉に強まった。

夜の闇を吹き消していく銀色のスチームを照らし出す無数の照明。

朝を告げるサイレン。耳障りなそれも、生活のサイクルを支える大切なファクターの一つだった。

胸いっぱい冷たい空気を吸い込み、空を見上げる。ドームの天井に映し出された青空の映像は、ところどころ映像装置が壊れていて欠けている。その暗闇からならば、外の世界にさえ出て行けそうながした。

歩き出す。スチームは町を湿らせる。じめじめとした裏通りを抜け大通りに出ても、排水溝からあふれ出した汚水で路肩には水溜りが出来ていた。

作業用のブーツで歩くボクは何も気にしない。通りを行きかう人々の波にそつと溶け込み、まるで何もなかったかのように何食わぬ顔で朝を迎えるのだ。

そつ、この町を当たり前のように歩く人々はみんな嘘をついている。ボクも変わらない。ただ、大人はもつと嘘をつく。

この世界でバカみたいに真つ直ぐに何かを信じているやつなんていない。生きていくには狡賢くなければいけない。その世界の真実の姿を、ボクは嫌と言うほど知っている。

すでに朝なのに道端でいちやついているカップル。会社帰りのやつれた顔の男。厚化粧のドレス姿の女。ぼろを着て歩く手癖の悪そうな少年。

物騒？ ああ、物騒だろう。でもボクはそんな空気が嫌いではなかった。力さえあれば、頭さえ良ければ、生きていく事が出来る世界のありのままの姿。

ボク個人という存在を認識している人はきつといないだろう。行き交う人々全てを個人として認識しないのはボクも同じ。ボクらは同じ空間に生命を共有しているだけの、共同体のような錯覚さえ覚える。

だからボクらは町であり、世界とイコールで結ばれる――。そんなことを、昔知り合いから聞いた事がある。

案外的外れとも思わないボクだけど、秘匿性の海の中にいつまでも沈んでいるわけには行かない。やるべきことは色々と耐えないのだから。

ボクの仕事はトレジャー。でも、それだけで生きていくのは流石に退屈だ。

何よりトレジャー中は部屋の中に何日も籠りきりになり、下手をするとか何日も飲まず食わずになる。仕事をしている最中は夢中になつていられるけれど、現実に戻って食うと自分が突かれきっている事を思い知らされるのだ。

今がまさにそう。足取りもおぼつかないけれど、自室で休むわけにはいかない。あそこは自分の部屋であると同時に仕事場であり――同時にダミーの住所でもある。

巨大な町の片隅には工房と呼ばれる場所がいくつかある。例えばそれは、残骸から新しい機械を生み出したり、壊れた古いシステムを再構築したりする技術屋の仕事場だ。

この世界には無造作に壊れたものが捨てられていく。拾って直せばまだ使えることもあるし、売り物にもなる。そういうリサイクルみたいなことを生業にしている人の住処が、工房なのだ。

ボクはこの町外れの小さな工房で寝泊りしていた。住み込みで働いている、といったほうが早いかもしれない。勿論、本業はトレジャーなので、こちらに顔を出す確率はまちまちだったが。

「じいさん、ただいまー！」

立て付けの悪い扉を開くと、鉄と埃の匂いが一気にあふれ出してくる。顔をしかめながら大声を出したのは、ここの主の耳が遠いからに他ならない。

工房の中はガラクタの山だった。ゴミ捨て場だつてもう少し片付いているだろう。ごろごろと転がったロボットの手足やらなにやら、わけのわからないし考えたくも無い残骸の山を乗り越えようと、照明の下機械いじりを続けている物好きなじいさんを発見した。

彼の名前は工房長。じいさん。いや、名前じゃない。とか名前知らない。色々ある。この町で本名を名乗るやつは少ないし、本名があるやつもそう多くない。

だからみんな『自称』だ。彼は自称工房長で、じいさんというのはボクが勝手に呼んでいるアダ名だった。

「じいさん……。もう若くないんだからちゃんと寝ないとコロっと死ぬよ」

「おうっ！！　ウラがあっ！！　久しぶりだなあっ！！　二年ぶり
があっ！！」

「三日ぶりだよ。　耄碌にも程があるって」

ガラクタの山を適当に蹴散らして腰掛ける。　髭面のじじい。　しかしその肉体は筋骨隆々で、どう考えても『マッチョ』の一言しか似合わない。

分厚い作業用のツナギを着て、繊細な作業を行うための望遠装置の付いたフェイスカバーを装備しているじいさんは首だけ振り返り、にっこりと笑う。

ウラというのは、ボクの『自称』だ。　本名を名乗るつもりはないし、そもそもボクには本名がない。

だから、ただのウラ。　今の世の中、ファミリーネームを持っているのは余程いい暮らしをしているやつくらいだ。

「のたれ死んでねえみてえで何よりだなっ！！　まあ、今は仕事からだっ！！　ちいっとばかり待ってるっ！！」

いちいち声がでかい。

どちらにせよ丸三日間仕事をしっぱなしで寝ていないから、とんでもなく眠い。　あくびをしながらじいさんに軽く手を振ると、工房の二階へ続く梯子を上る。

二階はじいさんの家であり、ボクの家でもある。　部屋の隅にあるソファがボクの寝床で、勝手に寝転んで毛布に包まれた。

今はとにかく眠い。　工房から聞こえてくるハンマーが鉄を打つ音も、作業用のロボットアームがういういがんがん鳴り響くわけのわからない騒音も気にならないほど、ボクは睡眠に飢えていた。

だんだんそれが子守唄みたいに聞こえてくるんだから慣れとは恐ろ

しい。口元からよだれが出ているのを感じ、拭かねばと思いつつ、結局何もしないまま意識は眠りに落ちていく。

——その街に、名前はなかった。

聳え立つ数え切れない高層ビルは、世界を覆いつくす天井にさえ届きそう。

数多の星も太陽も月も、チープな映像に取って代わった。

二十四時間管理され、外れる事のない天気予報。人工的に生み出されたかつての様相。全て無くなってしまえば楽になるのに、人はかつての姿を捨てきれずに居た。

まだ世界が『地球』と呼ばれていた頃。世界は緑に溢れていた。水の星、地球。そんな風にさえ世界は呼ばれていたのに、今はただ小さな一つの街に成り下がってしまった。

世界という事場が指し示す定義がどんどん狭まり、やがて一個の街でしかなくなったのはいつの事か。既にその場所で暮らす人々の記憶にはない。

緑の星の様子も、流れる水も、月と太陽が織り成す光りと闇も。

そして世界という一つの巨大な命が齎すありとあらゆる愛しき不確定要素も。

ただ、失った。誰のせいでもない。理由を語る事に意味はない。

だから人々はそれを忘れた。自分たちの世界を閉じ、その扉の内側に世界を築いた。

故にその街に名前は無く。故にその世界に無限は無く。故にそ

の世界に希望は無い。

人によつてはその世界を『楽園』と呼び、他の誰かは『地獄』と称した。ただそれは一定の存在であり、揺ぎ無いもの。見る者に

よって様変わりするその暗い街の中、人は必至に生きていた。

環境破壊によって人が暮らせなくなった地球。そこに作られた巨大なドーム。人は、その境界線から足を踏み出す事が出来ずに居た。

繰り返される誰かの絶望が誰かの希望を生み、閉鎖された空間の中で繰り返される途切れないサイクルが、世界を運営する原動力になる。

人工的に生み出される夜の闇の中、聳え立つ巨大なビルが二つ。対になるように、世界を見下ろしていた。

共に兵器開発産業を営むトップ企業である二つの会社、F R E S と O Z。競い合うように年々増築を重ね、もうじき二つのビルは空へと辿り着くだろう。

互いに牽制しあうように大空を照らし出すサーチライト。飛び交うヘリコプターは巨大な銃器をぶら下げて、グルグルとビルの周りを旋回する。

にらみ合う巨大な力が二つ。何度もぶつかり合い、成長を促してきた。良くも悪くも世界をリードしてきた二つの力。ビルの増築的な意味で言えば、一歩リードしているF R E S 社にこの夜、大きな動きがあった。

飛び交うヘリコプターの数が、いくつも多いのである。本社ビルの地下にはF R E S の兵器工場があり、そこから重要な物資を移動する事が決まっていた。

その情報を当然O Z 社も掴んでいる。二社の間では壮絶な情報のやり取りが行われているからだ。それは勿論表沙汰に出来ないようなものだったが。

F R E S が何を移動しようとしているのか。中身がわからなくてもO Z は警戒する必要があった。にらみ合いの為に空に飛び立った戦闘用のヘリコプターたちは、まるで空に決まった道があるかのように、同じルートをぐるぐると巡る。

そう、まるで大空の芸のよう。ネオンとサーチライトがぎらぎら

と輝く中、無数の翼が轟音と共にステップを踏んでいる。

無数の戦闘ヘリに護衛されながら移動する一機の大型輸送ヘリ。高度を保ちながら、ゆっくりと前進するそのコックピットの中、二人のパイロットが話しこんでいた。

話題はこのわけのわからない一大事に自分たちが抜擢されてしまった理由はなにか、というもの。元々ただの輸送機パイロットである二人の男は確かに腕は立つものの、重要物資の移動などを任せられるような人物ではない。

今回の積荷が何であるのかもわからないまま、ただ目的地まで移動しろとの指示が下されただけ。報酬としては破格にも程がある金額に、首を傾げながらも思わず承してしまった。しかしいざ了承してみると、積荷の事が気になって仕方が無かった。

「戦車でも、ヘリでもない。組み立て途中の資材でもないし、武器でもない。なんにせよ、余りに軽すぎる。こんなにふわふわしてるんじゃないぞ、逆に落ち着かないぜ」

「まるで何も乗っていないかのような重量だな。でも俺、出発前に少しだけ積荷を覗いたといえば、覗いたんだよ」

「だったら何があったのかわかるんだろ？ もったいぶらずに教えてくれよ」

「いや、それがな……。何て言えばいいのか、よくわからなくてな」

歯切れの悪い返事だった。確かに余り口に出したくないような積荷を運ばされるケースも、決して少なくはない。

巨大な破壊兵器や爆弾、細菌兵器や毒ガス。何でもかんでも好きないように作っては誰にでも販売するFRES社の輸送機の中身は、

あまり覗かないほうが『身のためだ』という事を彼らは知っている。相棒である男が口にしたくないような代物ならば、深入りすべきではない。そう判断しようとした時、男は既に続きを語り始めていた。

「俺にはそれが、棺のように見えたんだ」

「棺？」

「ただ、広々とした格納スペースの中央に、ぽつんと棺が固定されててな。後は何にもなかったように思う」

「それが重要物資なのか？」

「見た目で判断するのはやめたほうがいい。中身が毒ガスなら、あのサイズでも十分凶悪だ」

「違いねえな。何はともあれ、見なかった事にしたほうがいい」

二人の会話はそこで中断した。

沈黙が場を支配するのだが、それは一瞬で破られる事になった。

けたたましく鳴り響く警報。窓の向こうが明るくなり、左右を護衛していた戦闘ヘリが撃墜された事を示していた。

墜落したヘリコプターが落下した地点から巨大な火の手と共に人々の悲鳴があがる。巨大な繁華街にヘリコプターが次々に墜落する様相を惨劇と言わずになんと表現するのか。

パイロットは予定コースとは大きく反れた空路に向かう。敵は空ではなく、地上から攻撃を仕掛けていた。

地上のハイウェイを駆け抜けるいくつかのオープンカー。そこから身を乗り出した何人かの集団が、巨大なランチャー砲を空に向か

って構えているのだ。

「OZ社の奴らか!？」

「いや……。レジスタンスだろう。装備がしょぼい。とにかくルートを変更して、本社に応援を求めよう」

「何でレジスタンスが積荷を狙ってるんだ……？」

「それは……。本社の連中に聞いてくれっ」

まるで花火みたいに、大空に紅い光りが飛び散った。

「うわー……。何だろう？」

寝ぼけ眼を擦り、欠伸をしながら歩く夜の街。

結局ぶっ続けで十二時間以上寝てしまったボクは起きるなりじいさに買出しを頼まれ、ふらつく足取りで工房を後にしていた。

普段の繁華街でも、結構事件は多発する。人の死体が転がってるのを目撃した事もある。治安維持局の装甲車が飛び交ってる事もよくある話だ。

ただ今回はちよと様子が違っていた。街のいたるところから火の手が上がっているのだ。ビルの壁に立て付けられた巨大なスクリーンに突撃したヘリコプターだったらしきものが黒煙を巻き上げながら未だに何度か小さな爆発を繰り返している。

人の流れが普段の数倍速かった。若者は笑いながら野次馬根性で現場へ向かっている。会社員は迷惑そうに愚痴を零し帰路を急ぐ。こんな街だから、トラブルは珍しくない。空からヘリが落ちてく

るのは……そりゃ、頻繁にはないさ。でも、驚くほどのことじゃない。

そう、冷静に考えながらも胸がわくわくして、結局若者たちにまぎれて現場に向かって走っているボクはなんなのだろうか。

ああ、確かこつちにじいさんがほしがっていた部品を取り扱っている知り合いの工房があった。うん。そこで分けてもらえば、わざわざ購入するより早い。

工房の在庫は一定じゃないから、今もあるかどうかわからない。

確実に入手したいから市販品をボクに頼んだのだろうけど、そんなのはどうでもいい。

楽しそうだから首を突っ込む。その何がいけないのか。それにきつとこういうのは本能なのだ。抗う事の出来ない運命なのだからそう。きつとボクは運命に導かれるようにして、人波の中を泳いでいた。

「うわ……ひどいな」

墜落地点は地獄絵図だった。巻き込まれた人たちの死体がごろごろ転がっていて、悲鳴と助けを求める声で阿鼻叫喚状態になっている。

でも、ボクはそれを他人事のように眺めていた。実際他人事だ。

ボクの身体は五体満足で、痛いところはないし悲しいこともない。

「FRES社のヘリ……」

空を見上げると戦闘はまだ続いているようだった。ロケット砲やガトリング砲の弾丸が飛び交い、轟音と爆発が鳴り響き、夜の街を何度も紅く照らし上げる。

飛び交うヘリもやはりFRESのものらしい。ヘリの横に描かれているFRESの青いカラーリングのロゴをぼんやりと眺め続ける。

それが、急に火を噴いて。
だんだんと、近づいてきて。
目前まで、FRESのロゴが――落ちてきた。

「ええ……？」

そんな、他人事のような声が。
自分のものである事に。

ボクはしばらくしてから、ようやく気づいて。

「……………うわあああああつ!？」

生まれて初めて、全力で逃げ出した。

そのヘリコプターは貨物用だった。巨大な荷物を運ぶのに使われる輸送ヘリだ。

ヘリがどんどん落下してくる。というよりはまるで滑空だ。地上にある色々なものをなぎ払い、轟音と共にどんどん追いかけてくる。

「なんで!？ どうして!？」

まるでボクを狙っているみたいに。馬鹿笑いしていた若者たちを次々とボウリングのようにぶつとばしながら。一直線に、迫る――。

死にたくない。死ぬ? 何で? 急に? 何の覚悟もないのに?
死にたくない。死にたくない。死にたくない――っ!!

無我夢中だった。

何がどうなったのかさっぱりわからなかった。

唐突過ぎて思考が追いつかない。ただ死にたくないということ。

死んだらどうなってしまうのだろう、なんてこと。

そんな馬鹿馬鹿しいことだけがじんわりと脳の奥底からにじみ出て、目からは涙がこぼれそうになっていた。

上下左右がわからない。しばらく嘔然と炎を眺めていたボクは、ようやく自分がヘリの爆発に吹き飛ばされ、残骸と共に近くにあった自動販売機にたたきつけられた事を思い出した。

途端、全身を引き裂くような痛み。痛い事になったとわかった途端に痛くなる自分自身の身体が本当に嫌になる。

ズキズキ痛む背骨。頭が下に、靴が上になっていた無様な格好から何とか立ち直り、ふらつく足取りで立ち上がった。

そこは本当に地獄のようだった。つい先ほどまでこんな風になるなんてボクは考えていなかったから。

墜落したヘリはあらゆる人をなぎ払い、爆発で飛び散った破片は次々と面白いように密集していた人々の身体を貫き、あたりは炎と血の赤で一色に染め上げられていた。

鼻をつく刺激が焦げ付く肉の匂いなのか、はたまた燃え尽きる鉄の匂いなのか、それとも人の血の匂いなのか。ボクには判断できない。

ただ呼吸さえ出来ないほど、熱い空気の中、口をぱくぱく開け閉めしてまるで無様な魚みたいに。ボクは逃げる場所を探す事も出来ないまま、その場にへなへなとしりもちをついていた。

「なんだ、これ……」

再び、視線を空に向ける。

それはただ、なんとなくだった。遠い空の向こう側、ハイウェイの上を何かが走ってくる。

巨大な何かは路上にあった車を破壊しながら真っ直ぐボク目掛けて直進し――。ハイウェイから飛び降り、目の前に落ちてきた。

その衝撃で身体が僅かに浮く。鉄板の大地が大きく拉げ、巻き上げられた残骸がゆっくりと降り注ぐスローモーションのような映像をボクは目を丸くして眺めていた。状況を、ゆっくり、整理して、みよう。

ボクの名前はウラ。本業はトレジャー。副業は工房の手伝いで、その物好きなじいさんに頼まれた買い物を済ませるために町に出た。眠くて。だって三日も寝てなかったんだしうがないだろ——そのせいで、たまたまこんな遅くになった。

そしてたまたま事件が起きて——これ事件なのか？ ああ、わからない——そのせいで巻き込まれた。あのまま真っすぐ買い物だけして帰ればよかったのに、面白半分で首を突っ込んでしまったから、今はこうして死に掛ける。目の前に落ちてきた巨大な鉄の塊は、四本足の多脚戦車——しかも対人戦闘用——。確か名前はFRES社製の——、

「……マンイーター？」

大きさは明らかにボクの何倍もある。

四つの足にはそれぞれ火器が搭載されているっぽい。

そもそもそれそのものが高速移動して、踏み潰されたらたぶんぺっちゃんこになる。

そんな、人殺し専用の機械。AI制御の、無人戦闘マシンが。

『現場に目撃者を一名発見。優先事項二番により、目撃者を消去します』

と、物騒な事をおっしやった時。

ああ、ボクの人生はこんなわけのわからないところで終わってしまふんだな——なんて、馬鹿げた事を考えていた。

逃げなきゃいけないのに。あまりにわけがわからなすぎて、涙が

出てくる。身体が震えて動かない。両足がすくんで立てないのだ。

悲鳴を上げる事も出来ない。心臓が破裂しそうなくらい高鳴っている。目の前で紅く光っているマンイーターの瞳を見つめたまま、固まってしまう。

—— ああ、死ぬ。絶対死ぬ。死んだ。

そう、思った時——、

開戦のゴングはきつと爆発する輸送機の音だった。

大空に巻き上げられた山のような残骸の中、くると回転する鉄の塊の姿があった。

それはボクには棺のようにみえたし、そしてきつとやはり、棺だったのだと思う。

棺はボクの目の前に落下すると、まるでそこに落ちる事を最初から知っていたかのようにぴったりと静止し、場が静まり返る。

次の瞬間。ボクの頭は完全に焼ききれる——。

「あなたが、ウラですか——？」

棺桶の蓋が吹っ飛んだ。いや、爆発的な力で内側からこじ開けられたのだ。

大空を舞う鉄板。ああ、かわいそうに。何度も何度も空中に舞い上がる残骸。それを片手で受け取り、『彼女』はマンイーター

に全く怖気ず振り返った。

「もう一度、問います」

そう、『彼女』。

棺の中から飛び出してきたのは、蒼い蒼い女の子だった。

「あなたがウラ——」

蒼い髪と、蒼いドレスが熱い風に靡いて、蒼い瞳には火を点して、
莊嚴とした。それでいて涼やかで、力強い。とにかく、見る者を魅了するような圧倒的な存在感。

「あなたが、私を『人間』にしてくれるのですか——？」

そう、だからボクには彼女が人間であるようには思えなかった。

人というものは、必ずしもどこか不完全なものだ。

だというのに彼女は余りにも美しすぎた。

それはもう、『生き物』ではなく、

だからきつとそう。それは生きた『人形』だった。

見下ろす瞳は真っ直ぐにボクを見つめている。

REV

作り物の星空の下、現実の地獄の中、瓦礫の山の上で。

ボクは出会ってしまった。蒼い瞳の、生きた人形に――。

燃え盛る炎を背に、彼女はマンイーターをにらみつけ、空から落ちてきた棺桶の蓋を手にとった。

振り上げた棺桶の蓋が。ただの鉄板が。振り下ろされる瞬間、風を切る甲高い音と共にイーターの足に突き刺さり、轟音と共に巨大なその身体を地に這い蹲らせていた……。

REV・1

悲鳴って、どうやってあげるんだっけ——？

言葉にならない思いが全身を駆け巡った時、ボクは間抜けにもそんな事を考えていた。

蒼いボブカットが揺れる。膨大な質量を持つ巨大な鉄の棺を片手で振り下ろし、袈裟に叩き付けた女の子。

轟音と衝撃の中、ぎらぎらと光っているのはきっと彼女の瞳だったのだと思う。写りこんだ炎がゆらゆら揺れて、真つ青な瞳がきらきら光る。

とても長いスカートの裾がはらはらとはためき、叩き折られたマンイーターの前足がぐるぐるぐるぐる、宙を舞う——。

それはとても幻想的な風景だったと思う。

人を殺すために生み出された殺戮兵器を、平然と片腕で捻じ伏せた少女。

それは爆発で吹き飛ばされてきた棺から飛び出して、ボクを助けてくれた。

わけのわからない状況である事がどうでもよくなってしまうくらい、彼女は美しかった。

まるで、作り物みたいに……。

「下がってください、ウラ。まだ危険が去ったわけではありませんせん」

「……え？　ちょ、うわあっ！？」

彼女は振り返る事もせず、空いている手でボクの胸倉を掴み上げると、片手でひょいと空に向かって放り投げたではないか。

それがまた非現実的すぎて、ボクは目を丸くするしかない。意識がはつきりとしたのは、残骸の向こう側に投げ飛ばされて転がされた衝撃が全身に走ってからだ。

何で女の子に投げ飛ばされなきゃいけないんだ？ いや、投げ飛ばされたというよりは本当に『放られた』というか……っていうかなんだ、これ……。

再び、先ほどのヘリの爆発と同等の衝撃が走った。それが瓦礫の山の向こう側で起きている事に気づき、ボクはこっそり顔を覗かせ様子を伺う。

マンイーターは全自動の戦闘機械だ。そして四本足の多脚移動式。つまり前足が一本折れても、一応行動続行は可能なのである。

ボクが放られた次の瞬間、マンイーターの反撃があつたのだらう。真正面から突撃してきた鉄の塊が衝突する威力は計り知れない。

だというのに、彼女は平然とそこに立っていた。

悲鳴を上げているのは大地の方だった。彼女の鋼鉄のブーツがめり込んでいるアスファルトは次々と亀裂が走り、受け止めきれない衝撃は広範囲に拡散する。

我目を疑うとか。目から鱗とか。そんな言葉がある。

ボクはまさに今それだった。落とせるもんなら落としてみせよう鱗。ああ、あんなに華奢な女の子でも——多脚機動兵器を、

片手で受け止められるんだなあ、って。ただ呆然とその景色を眺めていた。

車だってやすやすと踏み潰せるような質量と出力の足が一本欠けても三つ。その重量を、ただ彼女は片腕で受け止めている。

何の区もなく易々と。易々とだ。何度でも言おう。易々となるのだ。まるで息が上がる様子もなければ、怪我をする様子もない。普通なら死んでいる。ああ、死んでいる。だからボクは啞然と

するしかない。だってあれはもう、『普通』なんかじゃないのだから。

急激に後退するマンイーター。足の裏側にはホイールが装着されており、歩く行動をとらなくてもあれは移動出来る。何はともあれ兵器が少女に対して後退を強いられるという状況がもうどうなっているのか。

脚部のあらゆる場所から機関銃が顔を覗かせた。ああ、こんなに。ボクは顔を引つ込めようか迷った。あの手の駆逐兵器が装備している武装は、一発でもかすれば五体満足ではられない火力を持っていて当然だと知っているからだ。

でもボクがそうしなかったのは、きっと彼女はその程度では死なないのだろうな――と、根拠も無い確信を抱いていたからだろう。

そう、根拠は無い。それでも確信。確かに信じるに値する物――。

一斉に火器が火を噴き、鼓膜が破れそうな轟音と共に弾薬が馬鹿みにたいにばら撒かれた。人間なら死んでいる。でも彼女は違った。自らが手にしていた棺の蓋を大地に深々と突き刺し、盾にする。

弾丸が直撃するたびに毎秒拉げていく鉄の壁。しかし、時間稼ぎが目的ではなかった。

直後、少女は跳躍する。空に向かってジャンプしたのだ。蓋に向かつて発砲していたマンイーターは反応が一瞬遅れる。

重火器を空に向けようとした時には、もう勝負が付いていた。空から落ちてきた少女はきゆるきゆると回転し、落下と同時にイーターの頭部を蹴り飛ばしたのだ。

人工知能を搭載する頭部は最も頑丈に作られている箇所であるにもかかわらず、少女の細い足が命中した瞬間、まるで隕石でも当たったみたいに拉げ、あられもない姿となって高層ビルの間の中にすっ飛んで消えた。

「えいつ」

なんてかわいらしい掛け声だろう。

えいっ……。それが、巨大な殺戮兵器に止めを刺す掛け声としての確なのだろうか……。

問いかける間もなく、彼女は振り上げた拳を真上からイーターに浴びせる。

アスファルトが陥没し、イーターが火を噴く。動かなくなった鉄の塊の上から跳躍し、彼女が瓦礫の山の上に着地した。

つまりそこは、ボクの目の前。轟沈するイーターと誘発される爆発の炎に照らされながら、何の表情もなくそれを見下ろしている彼女にきつとボクは見惚れていた。

明らかに非現実的。ああ、そうさ。機械に人間が勝てるなんてあっちゃいけないんだ。なのにこいつは、それをあっさりと……まるで『朝飯前』みたいになやってのけた。

ふつつつと湧き上がってきたのは恐怖の感情だった。こいつがボクにとって友好的な存在である保証なんて何もない。ただ、さっきは偶然『守った』ような状況になってしまっただけという事も十分在り得る。

そう考えたら、急に背筋が寒くなった。今すぐこの場を離れなければとんでもないことになる……。そんな確信めいた予感があった。

「ウラ？」

こっそりとその場を離れようとするボクのシャツを掴み、彼女は目を丸くする。

「どこに行くのですか？ 早く私を人間にしてください」

「……………はあ？」

さっきも同じような事を言っていた。

でも、ボクはこんな危ないやつ知らないし、知っていたとしても係わり合いになりたくない。何よりこいつ、今なんて言った？

足を止める。遠くで治安維持局の装甲車が鳴らすサイレンの音が聞こえてきた。

「お前……何なんだ？」

ボクの質問に、彼女は凜とした表情で返答する。

胸に手を当て、少し戸惑いながら。不安そうに瞳を揺らしながら。だからボクは、その言葉をきっと一生忘れない。

「私は、『REV』の一つ。名をと言うのであれば、レヴィ——。レヴィアंक로우、それが私の名前です」

——それが、彼女との出会いだった。

REV・1

「ウラ！ ただの買い物にどれだけ時間をかけてんだっ！ ！ こっちはそのパーツがないと、手が止まったまんまで………っ！？」

じいさんのあごがはずれそうになっていた。

「ただいま……」

「ウラ……。なんだ、その……えれえきれえな女は……？」

ため息を漏らすボクの背後、シャツの裾を掴んで放そうとしない女は、無表情のままきよきよともものめずらしそうに工房を眺めていた。

結局、部品を買うことは出来なかった。こんなやつがずっとぴったり背後についていたら、買い物なんてしていられるわけもない。じいさんが驚くのも無理はない。その理由は十分にある。

「なあ、いい加減に放してくれ……。シャツが伸びちゃうだろ？」

「そうなんですか？」

「そうなんですよ。」

ようやく開放された裾をチェックしてみると、しっかり伸びていた。深くため息をついていると、じいさんに首根っこを捕まれ工房の隅に引っ張られる。

「おい、ウラ……。なんだありやあ？ メイドロボか？」

アンドロイド、という言葉はいつ頃からメジャーな存在になったのだろうか。

女性型のアンドロイド……この場合はガイノイドだが……を仕様した女中型のロボット、所謂メイドロボみたいなものは、現在でも存在する。

FRESやOZが作成した最新型であれば、その外見は限りなく人間に近いといわれている。しかし動作も人間に似せて作ってはあつるものの、それらは所詮ロボット。

人間の動作というのは、実はとんでもなく複雑だ。それを『なめ

らか』に行うのはとても難しい。アンドロイドに出来る事は、本当に簡単な動作、そしてあらかじめプログラミングされている想定事実のみ。

見た目もなんというか、人間のように見えるが、『機械』である事を彷彿とさせる部分がある。例えばずっと瞬きしなかったり、表情が全くなかったり。

『夜の相手』をするようなマニア向けの代物であればそういう部分が凝っている事もあるのだろうが、あれほどまでに精巧なものは恐らく存在しない。

埃まみれの今は使われていない作業台。その上にちょこんと腰掛けては、積もった埃を指先でなぞり、それをじっと眺めている。

何が楽しいのかわからない。その動作は何よりも人間に似すぎている。見れば見るほど、人間にしか見えないのだ。

皮肉なのはその美しすぎる外見と、衣服がドレスであるという点が逆に浮きすぎていて違和感を齎している事。この二つがなかったなら、彼女はどう見ても生きている人間だろう。

しかしボクは目撃している。彼女が人間離れた力で、マンイーターを轟沈させる瞬間を。

「とりあえずメイドロボじゃないよ。それに、人間でもない……。F R E Sのコンテナから出てきたから、F R E Sの新型アンドロイドじゃないかな……。戦闘用の」

「戦闘用ロボットなら、あんな容にする必要はねえだろう。ワシに言わせりゃ、人の形なんぞは戦闘には向いておらんのだからなあ」

「用途にもよるんじゃない？ 人間に酷似させた、暗殺用ロボット、とかさ……」

というか、そうじゃなかったらあの戦闘能力の説明がつかない。

「ふうむ……。 お嬢ちゃん！ 名前、なんつーんだ！」

「レヴィアंकロウ。 レヴィと呼んでください」

「レヴィかい。 嬢ちゃん、なんでまたウラについてきたんだ？」

「ウラは私のマスターで、ウラは私を人間にしてくれるからです」

会話のキャッチボールは張本人を置いてけぼりに繰り返された。

女は当たり前のようにそんな事を口にする。 そう、当たり前のように。 ずうっと前から決まっていたとしても言わんばかりに、じいさんに言い放つ。

「ちょ、ちよつとまって……。 ちよつとまてよ」

二人の間に入り、会話を中断する。 とんとん拍子に会話が進んでいたのを邪魔されたのが不満なのか、二人とも何か言いたそうにボクを見る。

しかし、引き下がるわけにはいかない。 女に向き合い、ボクは深く息を吸い込んだ。

「さつきからお前が言ってる『人間にする』ってどういうことだよ……。？ なんでボクなんだ？ あとマスターって何？」

「マスターは私の所有者と言う意味です。 ウラは、ウラだからです。 人間にするというのは、そのままの意味です」

「だーかーらーっ！ なんでボクなんだよ！？ ウラはウラって、答えになってないだろ！？ なんでボクのこと知ってるんだよ、お

前っ！！」

「そんな事を言われても困ります……。私は、ウラに人間にしてもらっんです。ウラの事は私の記憶回路に刻まれているんです。

私が目覚めた理由は、全て貴方にあるんです！」

「人間にするってなに！？　じゃあお前人間じゃないってことじゃないか！！」

「私はREVの一つです。それと、『お前』じゃありません。私の事はレヴィと呼んでくださいと先ほども言いました」

「お前みたいな機械『お前』で十分だよ！　変なところで食い下がるな！」

「私は『お前』ではありませんっ！　それに、機械と呼ばれるのも不快ですっ！！　貴方こそ、本当に私のマスターなら、早く私を人間にしてくれたっていいじゃないですかっ！！」

いつの間にか論争はヒートアップしていた。落ち着き払っていた女もいつの間にか声のポリウムをあげ、ボクの方に歩み寄ってくる。

ボクも負けじと前に進むと、二人は結局にらみ合う形になった。

わけのわからないQ & a m p ; Aの応酬はなんら状況を打開させようとはせず、それがきつとお互いを苛立たせる。

「まあ落ち着け落ち着け！　とにかく一旦止め！　ワシの話を聞け！」

間に入ったじいさんがボクらの頭を掴み、左右に引き離す。　女は

納得がいけないのか、不満そうに頬を膨らませながらジト目でボクをにらんでいる。

「とにかく、お前さんはウラに頼みがあるんだろう？ わざわざこんなめんこい女が尋ねて来てくれたんだ。ウラも邪険にせんでもいいだろうが」

「じいさんはこいつがどれだけ恐ろしい化け物か知らないからそんなことが言えるんだよ。そもそも、『ウラ』って本当にボクの事なの？ 世界に何人『ウラ』がいるのかわからないけど、これはボクの偽名だし……お前の言うウラがボクである保障なんてないだろ」

「それは……っ。それは、そうなんですが……。では、私の探すウラはどこに……？」

途端に悲しそうな表情を浮かべ、途方に暮れるレヴィ。迷子になった子供のように不安を隠そうともせず、落ち込んだ様子でボクを見る。

そんな顔をされたらまるでボクが悪い事をしているみたいじゃないか。なんだかこちらとしてもあまりいい気分ではなくなってくる。苦し紛れにじいさんに目をやると、じいさんはボクを見ていなかった。俯いて作業台に腰掛けるレヴィを見つめ、なにやらとても真剣な表情を浮かべていた。

「ウラよう。ワシにはあいつがただのロボットであるように見えん。まるで本当に生きているみたいだ。あんなに生き生きとした動きの出来るロボット、この世に存在しねえだろうよ」

じいさんには珍しく、感心しているようだった。同じく機械を齧る者として思うこともあるのだろう。確かにボクにもわかる。

これが人の手で創られたものならば、紛れもなく芸術作品と呼ぶに相応しい存在であるという事が。

自分で考え、判断する。それくらいはAIなら出来て当たり前だろう。でも、『迷い』や『不安』といった感情を再現する事は出来ない。

だから見れば見るほど、知れば知るほど、それは不自然な存在だった。

「ふうむ……。ウラ、レヴィとは本当に初対面なんだな？」

「さつきも言ったでしょ？ FRESのコンテナ——そう、なんか棺桶みたいなのから出てきたんだって」

「棺桶！？ そりゃ、本当か？」

「えっ？ う、うん」

「そうか……。棺桶か……」

腕を組み、じいさんはなにやらぶつぶつと独り言をつぶやきはじめる。

ボクもレヴィもその間じいさんの事をずっと見つめていた。じいさんの一人思考が終了したのか、一人で勝手にうんうん頷いて何かに納得してみせると、レヴィの肩をポンと叩く。

「レヴィ。お前さんがどんな『ウラ』を探していて何をしようとしているのかはわからんが、一先ずはこの『ウラ』でガマンしてやつてくれんか？」

「じっ、じいさん——」

「お前は黙ってるいつ!! とにかく、レヴィの事はよく話し合つて、よく考えて判断しろ。いいなっ!? 勝手に追い出したら承知しねえぞっ!!」

気づけばじいさんは完全にレヴィ鼻屑になつていた。

こうなると二対一の図面になり、ボクの圧倒的不利は揺るがない。

ため息を漏らし、とりあえずその場は引き下がる事にした。

二階に上がっても、じいさんが下で作業をしている音は些か衰えていなかった。二階も一階と変わらず散らかりまくっている。洗濯していない衣類が乱雑に床に散らばり、テーブルの上には空き瓶や空き缶、食べかけのスナック菓子やらが放置されている。

工房の鉄くさは相変わらず付きまとい、工房で火を吹くバーナーの熱気も届かないここは、唯一の利点である暖もない。

そんなぼろつぼろの、女性なんて一度も入れたことのない男やめもいいところの部屋のベッドの上に彼女はちょこんと腰掛けていた。ボクは壁によりかかり、何度も目を擦る。

幻ではない。当然だ。面倒くさくて片付けずに居た部屋がだんだんと恥ずかしく思えてくる。彼女はそれくらい、この薄汚い部屋には似合わなかった。

「あの」

「な、なにっ?」

声が裏返りそうになる。彼女はベッドの上で何故か正座してボクを見ていた。

「貴方の話を聞かせて頂けませんか? 話を聞けば、私が探している『ウラ』が貴方なのかどうか、判るかも知れません」

言われてみればそうだ。彼女が探す『ウラ』の情報が僅かでもあるのであれば、ボクと照らし合わせる事により何らかの光明が見えてくるかもしれない。どちらにせよ彼女から情報を引き出さねばならないと思っていたところだ、渡りに船である。何故って？ ああ、女の子から個人情報を引き出すなんて、やったことがないからだ。

こっちが洗いざらい話したら、向こうだって話すだろう。それは楽観的な考えだろうか？ 少なくとも、今のボクには判断出来ない。

「そうだな……。何から話そうか」

腕を組んで天井を見上げる。洗いざらい、となると本当に最初の最初から語るべきなのだろうか。

「ボクは、気が付いたらここにいた。じいさんと暮らしてて、機械いじりを覚えてた。いつからかトレジャーの仕事が儲かると知ったボクは、そっちのほうを優先するようになった。今はじいさんの仕事を手伝いながら……。まあ、ジャンク屋みたいなことだけど……。このこと、仕事場を行き来しながら生活してる」

ちらりとレヴィに視線をやる。真剣な眼差しが焼ききらんとばかりにボクに向けられている。まだ足りないのか？ 再び思考を過去へ。

「年齢は、じいさんいわく十四……。見てのとおり男。ていうかトレジャーってわかる？ あの、結構悪い事なんだけど」

「違法手段による情報売買とその仕入れですね」

「あ、うん。　ボクそつちの世界では結構名前が売れてて……あ、ウラって名前じゃないんだけど。　とにかく、ボクの人生は……こんなものだよ」

特別なことなんて無い。　今のボクを語るなら、本当にトレジャーと機械いじりくらい。

それ以外、何もしてこなかった。　だからそれだけは負けまいと必死にやってきたけれど、振り返ってみれば自分の空虚な過去が漠然と広がっている。

これから先どんな明日へ向かうのか。　夢も目標もなく、けれど生活できない事は無い。　誰とも関わらない、閉鎖的な日々。　匿名の心地良さ。　多分きつと、そんな毎日。

レヴィに聞かせるような事なんてない。　少しだけ、寂しい気持ちが胸の中で揺れていた。　もう一度視線を向けてみると、じつとこちらを見つめ続けていたらしいレヴィと視線がばっちり衝突してしまった。

「一つ答えていただけますか？」

「何？」

「その……ハンドルネームは？」

ハンドルネーム。　ネット上で使う、仮の名前だ。　現実でも仮の名前を使う今の世の中、ハンドルネームなどただの記号ですらない。それでも、そこには名前があり、意味がある。　ボクという個人が、数知れない同じハンドルネームの中に紛れ込み確かに存在するために必要なもの。

「A s h」

自分で考えた名前ではない。でも、それは今はボクのものだった。

「Ashっていうんだ。でも、それがどうしたの？」

「Ash——それが、ウラの本当の姿なのですか」

途端、彼女は立ち上がった。正座の状態から途端にどうやって立ち上がったのかは謎だ。

とにかく、飛び出すような勢いでボクの前に立つと、両肩を掴んで顔を近づける。猛然としたその勢いはイーターを倒した時と同じ尋常ではない動きで、ボクは反応さえ出来なかった。

「私には、よくわかりません。ただ、貴方は恐らく私の探している『ウラ』です」

彼女はとても興奮していた。つい先ほどまで『人間と同じ程度に力を抑えていた』のに、ボクの話聞いた途端そのセーブが利かなくなつた。

表情が変わらなくてもわかる。彼女はとても喜んでいた。とりあえずボクの目の前にすっ飛んできて、ぎりぎりとボクの両肩を締め上げるくらいには。

「ですが——不明な点があります」

途端に両手から力が抜ける。肩が砕けるかと思ひ始めていたボクは思わず安堵する。彼女の表情は、困惑しているように見えた。

「私の中にある『マスター』の記憶は、確かに『ウラ』——そう、貴方で間違いないのです。トレジャーで生計を立てている。

ハンドルネームは『A s h』。それで間違いはない。けれど、相違があります」

「それは？」

「年齢です」

一歩身を引き、ボクの頭の上に手を載せ、彼女はいたって真面目な表情で語り始めた。

「今のウラは、こんなに小さい」

余計なお世話だ。

確かにボクの背は高くはない。子供なんだからしょうがないだろ。レヴィはボクよりも一回り以上大きいのだから、易々と頭に手は届いていた。

その手のひらを、大きく背伸びしながら自分の頭よりも30センチほど高い位置まで伸ばし——背伸びする必要はなかったようだが——ボクを見下ろす。

「私の記憶にあるウラは、これくらいの大きさです。つまり、子供ではありませんでした」

「大人だったってこと？」

「はい。ウラはウラで、九割間違いはないのですが——年齢だけが、大きく異なっています」

年齢が違ったら一割の相違なのだろうか。ボクに言わせれば五割は違うと思う。いや、もっとか。

それにしても、レヴィより30センチ。今からどれだけ大きくなればそんな大きさになるのだろうか。180は悠に超えている。190くらいあるだろうか。今のボクにはとてつもなく遠い世界だ。

「結論からして……。一先ず、貴方を私の探すウラと仮定する事にします」

「勝手にするなよ……。そもそもその、『ウラ』の記録に確信はあるの？」

「あります」

即答で豪語するレヴィは自らに額を人差し指で軽く叩き、顔をボクの目の前に近づける。

「私の記憶回路に確かに刻まれています。実際に『マスター』から私は命令を受領したのです。マスター……つまりウラ、貴方から」

「ボクがあ……？」

「貴方は確かに言いました。『人間になりたければボクを探せ。本当のボクを見つけた時、お前を人間にしてやる』——と」

「ちょ、ちょっとまってよ!? ボク、そんなの知らないし! レヴィとは初対面だろ!？」

「しかし、この記憶は何者にも改竄出来ない根本的なものです。ロボットには絶対的に遵守すべき命令がいくつか存在します。私

にとってはそれと同格です」

ロボット三原則、というやつだろうか。

それに匹敵する命令なのだとしたら、確かに容易に改竄は出来ないだろう。しかし、すごい自信だ。機械なんてその気になれば人間は簡単に制御できてしまうのに。

「というかやつぱりお前、機械なんじゃん」

「むう！　ですから機械ではありません！」

機械って自分で言ってるじゃん！

というか機械だろう。何がどうなれば機械じゃなくなるのか誰か教えてほしい。教えられるものなら、ね。

結局会話は平行線。彼女はボクを『ほぼマスター』と認識するようになり、ボクは相変わらずわけのわからない状況に流されていた。FRES社に問い合わせるべきだという当たり前の事に気づく頃には、レヴィは部屋の片づけを始めていた。部屋の隅に壊れかけのパイプ椅子を置いてボクはその様子を眺めている。

当たり前のように仕事を進めるレヴィ曰く、『これくらいは自分の仕事。居候なのだから当然だ』との事。

居候？　というかお前ロボットなんだし、居候なんて立場も過ぎるんじゃないか？

そんな事は言えなかった。何故なのかわからない。ただ——少なくとも一生懸命に仕事をするレヴィの姿は、ただのロボットなんかにはどうしても見えなかったから……。

そうしてボクがのんびりしている間に、街では沢山の出来事が起こっていた。

とつくに動き出していた様々な運命が自分に無関係なものではない
という事をボクが知るのは、随分と先の話だった。

「——というわけで、君にはこれからテロリスト共に奪われた我が社の極秘兵器を奪還してもらいたい」

FRES社ビルは摩天楼の中でも最高の巨大さを誇る。人工の空に手を伸ばせば届きそうなほど巨大なそのビルが『一番』である事はFRESにとって重要な事であった。

この街に存在するあらゆる物の中で最も優れている事。最高品質であること、常に究極である事を企業理念とするFRESにとって『一番』である事は一つでも多い方がいい。

様々な力を持ちこの街のマーケットを大きく支配し、街そのものの半分近くを自分たちの手中に収めているFRESにとって唯一目障りなのは同業者であるOZ社のみ。FRESとほぼ同等の力を持つOZ社は究極を自負するFRESにとって唯一のライバルであり、唯一意識するに値する存在だった。

故に二つの企業は常に勢力争いを繰り広げてきた。トイレットペーパーからミサイルまで、お互いを意識して商品開発を進める。二つの大企業が負けじと邁進する姿は結果として街の発展に大きく貢献してきたのだが、反して街に負の面をも生み出していた。

所謂『荒事』をも平然と行って罷り通るだけの力を持つ大企業は、警察組織である治安維持局からも暗黙の了解として攻撃的な行為をも許されている。厳密に言えばFRESやOZそのものは闘争行為を行っていない。

今回のケースで言えばFRES曰く『テロリスト』たちの犯行であり、OZ社そのものは関与していない。しかし、背後にOZ社の動きがあると言うのは既に誰も言わずもがなわかりきっている事だった。

大企業であり『ルール』であるFRES、OZに喧嘩を売る様なものはお互いの存在かあるいは街のルールを理解出来ない身の程知らずと相場が決まっている。

FRESもOZも直接闘争はしない。しかし、それぞれがお抱えの荒事専用の人間を雇っている事が多く、今回の極秘兵器を奪われた事件もOZの差し金の傭兵の仕業だとFRESは判断していた。かといってOZにそんな命令を下したかどうかは確かめるだけ野暮というもの。水面下で繰り広げられた戦闘行為には水面下の力で答える。それがお互いのやり方だった。

今まさに任務を言い渡された若い男も、まさにそんなアウトロー的な役職に付く社員だった。伸ばしっぱなしの後ろ髪を簡単に括り、着衣はスーツ姿とは程遠い軍用装備。迷彩柄のジャケットは穴だらけでとてもお洒落とは、ましてや正装という言葉からは程遠い外見。長身の男はいかにも眠たげに欠伸を浮かべながら手渡された情報ディスプレイを眺める。

クリアケースの中に保存されたそれを眺め、男は頬を掻きながら目の前の上司に向かって口を開いた。

「そりゃ構わないんですけどねえ。奪われたモノが何なのかが判らないんじゃないっすよ」

本人は敬語のつもりだった。もちろん敬う心とはかけ離れすぎているが、スーツ姿の上司は何も思ふ事はない。こうしたモラルのない連中に何か言ったところで無駄そのものだど判りきっているし、伊達に彼らをまとめる役職に就いているわけではない。

スーツ姿の小太り中年は高級な椅子に深く体重を預け、ため息を漏らす。苦笑を浮かべるその様子は憤っているわけではなく、呆れているように見える。

男の名前はシャッフル。勿論本名ではない。シャッフルの役職はこうした『力任せの問題解決』の統括、そして『アウトロー社員』

への指示だった。

シャッフルが目の前失礼な男の面倒を見始めて既に四年になる。それだけ上司をやっていたら、その横柄な態度にも慣れが生じ、元も子もない事を言えばもつとろくでもない人間は多く存在する。

「正直なところ、私にもよくわからん。だが、奪った組織のタリはつけておいた。目的地、武装持ち出し許可、スケジュールなんかはいつも通りディスクにある」

「でも連中、FRESの護送を突破して極秘兵器とやらを奪ったんだろ？ この任務オレ一人でやれっていうのはちよつと酷じゃないスか」

「それは大丈夫だ。上から人材が派遣されてくるらしい。指定の場所で合流して協力して捜査に当たってくれ」

「まあ、文句言った所でしょうがないか……。了解了解、行つて来ますよ」

FRES社は任務を断るような人間を置いておくような組織ではない。そもそも、断る事は許されない。

特に荒事専門の人間など掃いて捨てる程いるのだから、これからも会社とうまくやっていきたいのであれば大人しく命令に従っておくのが吉である。

本社ビルを出た男は愛用のバイクに跨り夜の街を走り出す。ハイウェイを駆け抜けながら、自然と思考はこれからの仕事の事に向けられる。

色々と、納得のいかないことが多かった。そしてその不可思議な事件が何故自分に回ってきたのか。

「運命の巡り合わせ、か——」

そんなものを信じるわけではないが。
男は苦笑を浮かべ、風に身を任せた。

REV・2

「あんまり何でもかんでも触るなよ……？ 散らかっているように
見えて実は整理整頓されてるんだから」

勿論そんな事はない。でもあながち嘘でもない。工房の中に転
がったり山になったりしているガラクタたちは、大体どこにあるの
かくらいは察しがつく。

本当ならば当然、きちんと片付けておくのがいいのだろうけれど、
ガラクタはガラクタであってガラクタ以上でも以下でもない。だ
からガラクタなんて片付ける必要もない……。自分でも何を言っ
ているのかわからない。

後で山をひっくり返して小さなパーツを探す事になるとわかってい
ても、それが結局見つからず後で買いに行かなければならなくなる
とわかっていても、結局片付けるのはどうにも苦手だった。

そもそもこんな家業をやっているとガラクタは増えていく一方で、
しかもどれを捨てていいのかもわからない。明らかに要らないパ
ーツが、後々必要になったりすることなんてよくあることだから。
まあ、どんなに言い訳をしたところで散らかっている事には変わり
ないよね。レヴィはそんなガラクタの山の前に座り込み、ネジを
手にとってじっと見つめていた。

じいさんは今、席を外していた。修理した品をお客の所に届けて

いるらしい。まあ、ここまで取りに来たくない気持ちはわからないでもない。何せこれだけ散らかっているのだから。

去り際に強制的に任された修理の代行をこなしながら作業代の向こう側、目を丸くしているレヴィを眺めている。お陰で作業はちつとも進まなかった。

「……ウラ！　ウラ！　お訊ねしたいことがありますっ」

「今度は何……？」

「これは何ですか？」

駆け寄ってきたレヴィが作業代の上に置いたのは古びたバッテリーだった。しかも意外と高出力で、まさかとは思うが中身が入っていたら結構危ない代物だ。

引きつった笑顔を浮かべながらそれを確認してみると、残量が僅かだが残っていた。これならば突然爆発して工房炎上ということにはならないだろう。多分。

「バッテリーだよ。汎用性のあるやつだから、大体のものはこれで動かせる」

今修理している旧式のカメラのバッテリーもこれで充電出来るはず。直接繋いで動かすのは基本的によりしくない扱い方だったが、元々入っていた小型のカメラ用バッテリーを外し、そこにレヴィの持ってきたバッテリーを接続する。

一瞬火花が散る。明らかにまずい感じの音だった。少々焦げ臭くもある。しかしこのバッテリーは放出量を調整できるので、これでも問題はないはず。

「ほら、動いたよ」

レヴィに目をやると、両手をおそろおそろこちらに伸ばしていた。目がきらきらと輝いていて、もう彼女の興味は目の前の壊れかけたカメラにしか向けられていないようだった。さつきからずっとレヴィはこんな調子だった。ガラクタの山を弄っては何かをボクにもってきて、それをボクが修理する。そんな事の繰り返しなのに、その度に彼女は目を輝かせては大喜びして遊んでいるのだ。

「……これはお客のだから勝手に弄るなよ。お前はそつだな……。ネジでも拾ってれば？」

嫌味のつもりだったのだが、レヴィは無言で頭を縦に何度も振ると、落ちていたネジを拾い始めた。全く以って何が楽しいのかさっぱりわからなかったが、本人がそれで満足ならそれでいいか……。

「ネジ一つとっても、様々な種類が存在するんですね。とても不思議です」

「そうかあ？ 用途によって違うだけじゃないかなあ……。って、何勝手にガラクタをくっつけてるんだよ」

「ネジが留まりました！！」

「見りゃわかるよっ！！」

言うまでもなく、平然と床に落ちているようなものは汚い。よってレヴィは手も顔もとてまばっちくなっていた。深く溜息をついて立ち上がり、作業用のグローブを外しながらレヴィ

イの隣に座る。夢中になって鉄板と鉄板を留めようとしているレヴィを横から眺めた。

「手とかドロドロになってるけど……」

「む？ どうやらそのようですね」

何そのリアクション。

「それにしてもここは興味深い物の宝庫ですね。探せば探すだけ不思議な物が出てくる……。とても素敵です」

そうだろうか？ 一般人ならとてもじゃないが汚くて出入りしたくない類の場所だと思うけど。

何にせよ、こうしてうるうるしている間レヴィは大人しい。そうすると色々こっちとしてもありがたいので、放っておく事になっていた。

しかしとてもじゃないがレヴィにこの空間は似合っていない。ドレス姿の美女とゴミの山とでは釣り合う方がおかしいのだけれど。にしても落ち着かない……。じいさんがボクしか出入りしないこんな不潔な空間に何故こんなのが居るのか。何故落ち着かないのだろう。いや、以前はここにだって人の出入りは結構あったんだ。

そう、四年前までは……。

四年前にボクがあんな事をしなければ、今だってここは賑やかなままだったはずなのに……って、あれ？ レヴィの姿が見当たらない。

「レヴィ？」

ちょっと目を離れた隙にすぐ隣に居たはずのレヴィの姿は消えてしまっていた。いや、もしかしたら長い間考え込んでいたのかも知

れない。　ボクにそういう自覚がなかっただけで。

「自覚がなければ、許されるってわけじゃないよな……」

一言呟き、歩き出す。　工房は広いとは言え、ボクはここですつと暮らして来たのだ。　レヴィに行けてボクに行けない場所などあるはずもない。

袖を捲くり、工房内を隈なく歩いて見る。　しかし、二階の部屋まで探し回ってもレヴィの姿は見当たらなかった。

「マジ……?」

少々焦る。　もしかして外に出て行ってしまったのだろうか？

こんな治安の悪い地区であんな外見であんな服装の女が歩いていたらどうなるのかちょっと余り考えたくなかった。

冷や汗を浮かべながら階段を下りて工房に戻ると、ふと目に留まったのは地下へ続く鉄の扉だった。

レヴィが行けてボクが行けない場所。　確かにそこには存在していた。　きつと無意識に、その可能性を排除していたと思うから。

階段を駆け下りて地下への扉に向かうと、扉が少しだけ開いていた。　何年も人の出入りがなくて積もっていたノブの埃も掃われている。　残念な事にそこにレヴィが入った可能性は高いと思えた。　レヴィの事だ、まだ外よりもこの工房内に興味が向いているだろうし。

思わず深く息を付く。　色々と苦い思い出のある場所へ続くその扉に手を伸ばすのには、僅かな躊躇があった。

意を決して扉を開くと、もう長い間目を逸らして来た自分の過去へと続く階段が伸びている。　思わず気分が落ち込みそうになるが、そんな場合ではない。

この地下通路がどこに続いているのかまるで判っていないはずのレヴィは、確実に迷子になっているだろうから。

街の地下は迷宮だ、というのはうちのじいさんが昔のボクらに言った言葉だ。

この街が出来てからどれくらいの年月が経っているのかは、きっと誰にもわからない。ただ地下には膨大な空間が広がっていて、電気、空気、蒸気、水……エトセトラエトセトラ。とにかく様々なライフラインが交錯している。

そのライフラインは結局後々の人類が追加したものであって、元々その地下にある空間は何に使っていたのかわからない部分も多い。

今も現在進行形できつといくつかのライフライン系は過去の遺物になり、誰が何のために作った物なのかわからなくなっているところだろう。

地下には沢山の人々の歴史が積層している。それもやっぱりじいさんの言葉で、ボクはその地下空間に憧れを抱いていた時期があった。

何故か？ それは浪漫だと言っていたのはボクの知人で、でもその人は今はもういない。色々合って今はもう、地下空間に入るような事は基本的にはなかった。

階段を駆け下りると、細い通路が網目のように広がっていた。こうなるとレヴィを探すのも一苦労だ。この当たりの地図は頭の中に入っているものの、増築、撤去が無許可に繰り返される地下空間において数年前の知識が通用するかどうか……。

「レヴィ……！！ あーもう、本当に手間がかかるなあ、あいつ！」

愚痴りながら駆け出すと、レヴィは意外とあっさりと発見できた。

その理由は単純明快。彼女が立っている位置からは、地下空間の中でもとても巨大な空洞が一望出来るから。

「レヴィ……！ 勝手に出歩くなよ！」

「ウラ、あれは何ですか？」

こつちの話はまるで聞いていない。肩の力がガクッと抜けたのは、きつとレヴィがとても楽しそうだったからだろう。

全く、こつちの気持ちはお構いなしか……。心配してたわけじゃないけどさ。心配してたわけじゃ

レヴィの隣に立つと懐かしい場所の空気を思い切り吸い込んでみる。じめじめしていて、鉄くさい。けど、『帰ってきた』気がするのは何故だろう。

地下には時々、わけもなくとんでもなく広い空洞が発生してしまう事がある。無計画に誰も彼もが勝手に弄繰り回しているから、そういう無駄スペースが生まれるのだ。工房の地下すぐ近くにあるこの巨大な空間は、所謂ボクらの秘密基地だった。

その奥には、とても巨大な縦長の機械が鎮座している。上から継ぎ接ぎだらけの布を被せてあるので余計に訳の判らない物体Xになっってしまったが、色々と思い出の積もった代物だ。

「スペースシャトルだよ」

「スペースシャトル、ですか？」

「うん。そうなる予定だった——って言うべきかな」

色々な思い出が残されたまま、時を止めてしまったようにあの頃と変わりない空間。見上げた出来ない夢の跡に思わずセンチメンタルな気分になってしまう。

そんなボクの顔を隣から覗き込み、レヴィは突然人差し指でボクの頬を突付いた。

「……一応聞いていいかな？」

「はい」

「何をしているのかな」

「いえ、ウラの表情がどうも浮かない様子でしたので、ほぐして差し上げようかと」

余計なお世話だこの野郎。

「ところでウラ。スペースシャトルとは？」

物を知っているのか知らないのか良くわからない奴だ。 きっと知らない事の方が多いのだろうけど。

「宇宙に行く為の乗り物……らしいよ」

「らしい、とは？」

「判らないんだ。宇宙に行った事なんてないし、宇宙に行った人の話も聞いた事がない。この街から出る事が出来るのはね……政府関係者か、FRESやOZみたいな大企業のごく一部だけ。そうじゃないボクらみたいなどこにでもいるような一般人は、街からは出られないんだ」

この街は広い。でも、とても閉鎖的で……。だから、狭いんだ。勿論、この街という一つの世界は完成されていて、何不自由なく生きていけるけれど。とても安定しているけれど。でも、多分楽しくはない。

どうして皆そんな風に何も気にせず生きていけるのだろうか？ 外の

世界は気にならないのか？　このままずっとこんな閉ざされた場所で暮らしていけるのか？

様々な不安や疑問がある。　いや、あった。　子供の頃は外の世界に憧れてを持っていた。　いつかこの世界の作り物の空をぶち破って、本当の空へ――。　そんな事を夢見ていた。

だから、作ってみたかった。　作ってみたくなつた。　変えてみたかったのかもしれない。　信じていたのか。　夢見ていたのか。　何であれ今となつては馬鹿馬鹿しい話だ。

「二人で見よう見まねだね。　昔から機械弄りだけは得意だったから、なんとなく作ってたんだ。　結局完成しなかったけど」

「何故、完成させないんですか？」

「何故って……馬鹿馬鹿しいだろ？　そもそも法律で決まつてる。　未許可で外に出たら捕まっちゃうよ。　それに、子供がシャトルなんて作れるわけないだろ？　そもそも作つたとしてどこに行くのかもわからないし、無計画にも程があるよ。　子供だったって事」

「でも――ウラはまだ、あれに思い入れがあるのでしょ？」

一瞬、真っ直ぐなその視線に気圧されてしまった気がした。

その視線は当たり前前のように、その言葉は当たり前前のように、ボクに本心を擲る。

それが堪らなく嫌で、自然と目を逸らしていた。　言われなくても判っている事を、他人にあれこれ言われるのはいい気分じゃなかった。

「冗談言つなよ。　思いだけで現実が変えられるわけないだろ。　今の生活だって気に入ってる。　ボクはこれでいいんだ」

まるで言い訳だった。いや、きっと言い訳そのものだ。それもレヴィに対してじゃない。きっとボクがその言い訳を聞かせているのは――。

思い出に背を向け歩き出すと、レヴィも後ろを付いて歩いていた。

先ほどまで周りが見えずはしゃぎ回っていた子供のような彼女が何故、神妙な面持ちでボクの半歩後ろを付いてくるのか。

それは彼女なりの気遣いのような気がした。振り返って顔を見るのが怖くて、ボクは結局工房に戻るまでの間、一度たりとも振り返る事はなかった。

「それでもウラは、立派だと思います。努力をしたのであれば、きっと。無意味などでは無かったのだと」

レヴィの慰めのような台詞に何故かボクは苛立っていた。だってそうだろう？ やり遂げられなかった努力なんて、何の価値もないのだから――。

「――で、ここが待ち合わせ場所と」

バイクのエンジンを止め、キーを抜く。FRES社から依頼を受け、準備を整えているうちに約束の時間はとくに過ぎてしまっていた。

三十分以上の遅刻をしても、男に悪びれる素振りは皆無だった。FRES社ビルがある中央オフィス街とは打って変わっていかにも柄の悪い人間が出入りしそうなスラム街のバーに足を踏み入れる。

店の名前は『Weit』。男にとっては馴染みの店だった。

理由は単純明快。男の自宅はこのスラム街の一角にある。FRESビル内にも部屋を与えられてはいるものの、基本的に清潔すぎ

る空間は男の好みではなかった。

元々スラム街の出身である事、孤児である事、腕っ節だけで今まで生きてきた暴力的な過去を顧みれば、その性格が出来上がる事は特に不自然ではない。

自動ドアを潜り抜けるときついアルコールの匂いが鼻につき、煙草の煙が視界を遮る。しかし男は慣れたもので、店主の親爺に軽く挨拶をしてカウンター席に座った。

バー『We it』、そのカウンター席の奥から二番目。それが待ち合わせ相手が座っているはずの席だった。しかし男はその場で首を傾げ、目の前の人物と資料とを何度も視線を行き来させる。

「あんた、ちよつといいか？」

「はっ、はいっ!？」

声をかけた相手は女性だった。いかにも育ちの良さそうな風貌、高級スーツを身に纏い、黒縁の冴えない眼鏡をかけている。素っ頓狂な声を上げる女性を見て、男は再び資料に目をやる。

「F R E S社が送り込んできた、今回オレとチームを組んで行動する社員は一名。奪われた極秘兵器に詳しい科学者で、所属部署は非公開……。これ、もしかしてあんたの事？」

「は、はい、恐らく……。という事は、貴方が……?」

「……オーケエ、ちよつと待ってくれ」

慌てて立ち上がる女性を席に着かせ、男は踵を返す。店の外に飛び出すと、即座に端末を取り出し、上司であるシャッフルの番号をコールする。

「……おい！ オレだ！！ 何考えてんスかあなたっ！？ 今回の仕事は危険だからチームを組むんでしようが！ 何でよりによってあんな育ちの良さそうなお嬢さんがオレの相棒なんだよ！？」

「……まあそろそろお前から電話が掛かってくるだろうと思っっていた場合だが、その様子だと余程気に入らないようだな」

「こっちは命賭けてるんスよ……。あんなどう考えても足手纏いになるような奴、絶対に連れて行きたくねえ。映画とかだと逃げる途中に転んだりして足引つ張るタイプじゃねえか」

「ムービーの話はともかく、彼女は非常に優秀な科学者だ。上からも念を押して彼女とお前、二人で仕事に当たるようにと釘を刺されている」

「他に増援は！？」

「ない」

「あの女だけでも帰すのは！？」

「無理だ。その上、彼女の身に何かあったらお前はクビだそうだし」

「理不尽極まりねえッ！？」

「兎に角そういう事だ。詳細は彼女に尋ねろ。せっかく待ち合わせ場所はお前に合わせてくれたんだ、しっかりエスコートする事だ。以上」

「エスコ―……おい!? シャツフル!? きつ……切りやがった……っ」

その場で頭を抱え込み、怒りで沸騰しそうになる頭を何とかクールダウンさせる。落ち着け、今ここでキレて本社に行っても意味のない事だ。問題があるようならば、それを口実に抗議すればいい。何度も繰り返し自分にそう言い聞かせた。

少しだけ落ち着きを取り戻した男はしかし不機嫌そうにずかずかと大股でWe itに戻る。店内に入って女に視線を向けると、今まさに柄の悪い男たちに囲まれているところだった。

「あ、あのう……! 私これから仕事があるので……そのう……」

歯切れの悪い言葉を口にしながら鞆で顔を隠している女を見て、男は盛大に溜息を漏らした。

背後から男たちに駆け寄り、有無を言わず蹴り飛ばす。男の一人が空中を捻りながら飛んで行き、窓ガラスを突き破って外に転がり出た。

「ひゃああっ! 暴力反対! 暴力反対っ!!」

「うるっせえ!! 何ナンパされてんだコラアッ!!」

「ひゃあああっ!! ごめんなさいごめんなさい! もうナンパされないようにするから許してーっ!」

それは自分の意思とは関係ないのでは? と男も思ったがそれは口にしなかった。周囲の客たちは争い事が日常化しているのか、気にしている者は一人も居なかった。

窓の外に仲間が吹っ飛んで行く様子と男の顔を見て、悪党連中はそ

の場から走り去っていった。地元だけあり、男は店で顔も利く。店主の親爺も、多少のトラブルなら自分で何とかするだろうと思いい、あえて何も言わないで見ていたくらいで。

「おい女……。名前は？」

「な、ナンパしないでください！」

「違う！！ 仕事のパートナーとして兎に角名称不明じゃお話にならないえだろぅが！ コミュニケーション取る気あんのか……？ イライラするなあもぅ！」

「あ、えつと……。宇宙開発特務室所属、マリー・コンラッドです」

「……………なあ、お前所属は極秘なんじゃなかったっけ？ オレの気のせいかな？」

「あつ！！ しょ、所属は極秘なので忘れてください……っ！！
そ、そんな事よりも貴方の方は？」

「オレはゼン。偽名だが、ガキの頃からずっとこの名前だ。フ
アミリーネームはないから呼び捨てでいいぜ、コンラッドさん」

無愛想な表情のままゼンが手を差し伸べる。マリーはそれが何なのか理解出来ないと言った様子でその手のひらをじろじろと見つめていた。

「あの、これは何でしょう？」

「握手だよ、握手っ！！ ああもう、イライラするなあっ！！」

「イライラしないでください！ よ、宜しく願いします！」

「はいはいよろしくよろしく」

恐る恐るその手を取ったマリー。二人はゆっくりと握手を交わし、それから手を離れた。

男性の手を握った事が無かったマリーはしばらく自分の手を赤面しながら眺めていたが、ゼンは勝手に酒を注文していた。

「ところでゼン。割れた窓ガラスの分はツけておくからな」

「うるせえ爺。嫌なら自分で仲裁しろよ。いくら治安悪くても酒場でのルールってもんがあんだろが」

「そうだな。だが、余りにもこう、育ちの良さそうな嬢ちゃんが座っているもんだから、どう接したら良いのかわからなくてな。ケバい化粧の風俗女の方が俄然落ち着く」

「そりゃ違いねえ。……って、お前は手相でも見てるのか？ いい加減会話しようぜ、会話」

「はあっ！？ そ、そうですね……。ええと、とにかく何から話しましょうか……」

ちらりと周囲を気にするマリー。その様子を見てゼンは苦笑する。

「みんなろくでもない話してるから気にするな。ここじゃみんな『聞かなかった事にする』のが暗黙の了解だ。それが出来なきゃ

恨み報復の大バーゲンだ。 皆よく聞けばイケナイお話してるんだからよ」

「そ、そうですか。 では……」

一拍置き、マリーは胸に手を当て深く息を吸い込む。 そこまでして覚悟を決めるような事でもないだろうと苦笑しながらゼンがグラスを傾けていると、意を決しマリーは口を開いた。

「—— 私たちが追っている兵器が悪用されたのなら、この世界は崩壊します」

その一言はゼンが口に含んでいたウォッカを噴出するのに十分至る内容だった。

そしてその直撃を受けた親爺も目を丸くしてマリーを見つめている。 しかし、マリーのその至って真剣な表情が、嘘や冗談の類ではない事を強く物語っていた。

「ゼンさん。 これから私と貴方は、この世界を守る為の戦いを始めなければならぬんです。 たった、二人だけで……」

神妙な面持ちで語るマリー。 ゼンは口元を拭くと、眉を潜めて彼女に向き合った。

「……話を聞こうか」

——二人の追跡劇が、今始まるうとしていた。

本当は嫌と言うくらいに判っている。判り過ぎる程に、判っているのだ。

自分は決して特別などでは無いのだと。何処にでも居る、何処にでも在る、当たり前のように流れては消えて行く誰の心にも残らないような存在なのだ。

だからこそなのかも知れない。それを覆したかったのかも知れない。誰かの心に残るような、そして自分の心に残るような、強い思い出が欲しかったのかも知れない。

何故外の世界に憧れを抱き、その場所を目指そうと考えたのか。

それはあれから何年も経つのに未だに判らない。ただその先に、きっとボクは言葉に出来ないような沢山の思いを抱えていたのだと思う。

そうして力を合わせて何かをやり通す事が、とても素晴らしい事だと思っていた。それはきっと素敵な事だった。でも、いつまでも夢を見ているわけには行かない。夢中になって幻想を追えるのは、本当に僅かな間だけなのだ。

困難にぶち当たり、日々狭まって見えてくる自分の限界。それを越えようと四苦八苦している内に、どうしようもない、変えようのない現実が立ち塞がる。そうしてボクらの行いを鼻で笑い、現実を目を向けるとボクらの背後を指差すのだ。

そこには何も無い。ただ必死で歩いて来た道にはただ自分の足跡だけがあり――得られた物など何も無く、始めは重なっていたはずの誰かの足跡も、そこには無くなっていた。

だから立ち止まり。足を止め。振り返り、静かに溜息を漏らすのだ。そうして現実という物と折り合いを付けなければ、この世界は重くボクの両肩に押し掛かる重圧となるだろう。

それを一人で背負う覚悟がなかったから。その勇気がなかったから。だから今のボクは、その時勇気さえあれば——何か違っていたのだろうか。

「……わふう」

欠伸を浮かべ、頭を振れば下らない考えは少しずつ消えて行く。

こんな事を考えるようになったのは、きつと昨日あんな物を見てしまったからだろう。レヴィさえあんなところに行かなければ、こんな気持ちになる事も無かったのに。

振り返ると、ベッドの上でうつ伏せに眠っているレヴィの姿がある。結局ろくに眠る事が出来なかったボクはこうして一人で朝食の用意をしているわけだが、何故あいつはまだ寝ているのだろう。

普通、なんかこう……逆ではないだろうか。普通ほら、ボクがまだ寝ていてさ。彼女が食事を用意するべきじゃないかな……居候もいいところなんだし。

溜息を漏らす。作業用のバーナーを改造して作ったコンロは火加減がかなり難しい。レヴィの料理の腕前がどれ程の物なのかはわからないが、どちらにせよこれで調理しろと言うのは少々酷というものかも知れない。

「————ったく！」

しかしそれでも、何故かレヴィのためにこうして料理を頑張っているのは。

恐らくきつと、あの場所に久しぶりに立ち入る事が出来たからなのだと思う。

だってあそこには、自分一人だけでは絶対に行く事の出来なかった場所。彼女の導きがあったからこそ足を踏み入れる事が出来たのだから。

いつまでも逃げているわけにはいかないと判っている。思い出を振り切る為にも、あれといつか向き合わなければいけないのは明白なのだから。

勿論、今更どうにかなるとか期待しているわけじゃない。ただ、やはり向き合う事は必要なのだと思う。自分自身が忘れられず、心の中で思い出が叫んでいるのなら。治める手段くらい、自分で何とかしなければ。

レヴィとの共同生活も三日目を迎えた。寝ぼけているレヴィを叩き起こし、一緒に歯を磨いて嗽をして。お互いに寝癖だらけの髪を指摘し、お互いに直す。

予定はまるで無かったし、これから先何がどうなるのかもまるで判らない。ただ、それでもこのボクの生活に起きた僅かな変化がゆっくりと浸透して行く感覚を、ボクは悪く思っただけで居なかった。

じいさんは工房を空ける事が多いし、ボクも仕事でここを空ける事は多々ある。生活が擦れ違えば、一週間以上一言も口を利かない日が続く事だってある。だから、起きてすぐ当たり前のように誰かが居て、自分の生活が誰かと時間を共有する事を前提にしたものに変わり始めている事が、少しだけくすぐったく、居心地のよい感触だった。

「……にしても、レヴィってよく食べるよね」

「んむ？　そうでしょうか？」

レヴィの前には沢山の皿が重ねられている。勿論彼女が全部平らげた物だが、その量は既にボクの分の三倍は軽く越えている。

昨日の夜に発覚したこのレヴィも食事を取るという事実と、そしてとんでもなく食べるという事実。そして何より、食事が出るのであればなるだけ三食すべてきっちり食べたいというレヴィの要望。

一日一食とか雑な食生活が当然のボクにとって、彼女の提案はか

なり変わって聞こえた。

しかし、そこはレヴィの熱意を汲むしかないだろう。一生懸命に三食食べたいと抗議して足に縋り付くレヴィを引っぺがすのは難しかったし、何より自分の作る料理を誰かが食べたいと言ってくれるのは、どこか懐かしく嬉しくもあったから。

何だかんだでこうしてレヴィと生活を共にしている内に、彼女の面倒を見るのが楽しくなってきたり自分が居るのかも知れない。

それはそう。勿論、認めたくはないのだけれど。

「あの、ウラ？ もう満腹なのですか？」

考え事をしながらレヴィの様子を伺っていると、彼女の視線はボクの食べかけのスクランブルエッグに向けられていた。涎を垂らしながら上目遣いにボクを見るレヴィに思わず苦笑しながら、ボクは皿を彼女の前に置いた。

「そんなに食って体内でどうやって処理してるんだろっなあ」

ぱあつと花が咲くような笑顔を浮かべて満足そうに食べかけの卵を口にかきこんでいくレヴィ。正直お行儀は宜しく無かったが、本人が幸せそうなら野暮な事を言う必要もない。

それにしても、レヴィは本当に機械なのだろうか。食事を取るアンドロイドなんて聞いた事がない。いや、そもそもアンドロイドなのか。

彼女の一挙一動は生活を共にすればするほど人間そのものに見えて意識しなければ彼女が化け物のような力を持つ事なんて忘れてしまいきそうになる。

だからきつと、ボクはその生活の中で幸福を得ると同時にゆっくりと危機感を失いつつあった。

そう、だから。もっと気をつけてさえ居れば。少しは状況も違

ったかも知れないのに――。

REV・3

いつまでも工房の中に閉じこもっているわけにも行かないのは当然の事で、ボクはレヴィを連れて昼間の街へ繰り出していた。

レヴィの外見は余りにも目立ちすぎるので、頭から布を被って貰う事にした。怪しさが何倍にも跳ね上がったけれど、この辺じゃ怪しい奴の方が逆に目立たない。

何せレヴィが着用しているドレス以外、女物の服がないのだ。ボクの服じゃレヴィにはちよつと小さいし、じいさんの作業着を着せるわけにもいかないだろう。いや、ボクのもそうだけだね。

かといって彼女は一人では女物の服が買えないらしい。買って来いと無責任に放り出す事も考えたが、その後どんなトラブルが待ち受けているかを考えると結局そうも行かなかった。

自分の事だけ考えて生きてきたボクは女の子が着る服なんてわからないし、どこで買えるのかも良くわからない。こういう時はかりは流石に後悔する。

夜の街と違い、昼間の街は濃く霧架かっている。夜の間にもきつとそうなのだろうけれど、昼間は特にそれが濃い気がする。

昼の町というのはどこか静かだ。皆夜に起きて昼間に寝ているからかも知れない。真面目な人は既に出勤している時間だし、真昼と言うのが実は一番動きやすい時間だった。

殆ど車さえ行き交わないような道の歩道の隅を歩くボクの後ろ、レヴィは周囲をきよきよと眺めながら付いてくる。彼女にしてみればこの街は興味対象の塊で、出来る事ならあれこれボクに質問したいところなのだろう。

その彼女が黙り込んでいるのは何故なのか。そんな場合ではない

と理解してくれているのか、それとも面白そうなものがありすぎて何を言えばいいのかわからなくなっているのか……。

何はともあれ、ボクたちは二日前の夜に出会った場所へ足を運んでいた。現場は相変わらず荒れ果てていて整備が成される様子は一切無い。当分の間瓦礫の山は撤去されず、通行人の苛立ちを掻き立てる事だろう。

あの夜にあつて今存在しないものが在るとすれば、それは彼女が入っていた棺桶と、彼女がその棺桶で倒してしまったマンイーターという兵器の姿だろう。

FRE Sも流石に駆逐兵器を出したという事実は揉み消したかったのだろうか。それとも腕のいいジャンク屋がこっそり解体して持ち去ってしまったのか。ただあの夜の出来事を考えると、FRE Sが慌てて回収に来たような気がしてならなかった。

「そういえばレヴィはここでボクに会うより前の事は覚えてないんだっけ？」

「はい。覚えているのは、ウラが私を人間にしてくれるという事と、貴方の記憶だけです。ただ、それだけ」

「……………」

腕を組んで思案する。彼女は遠い所を見るような寂しげな瞳で焦げ付いた大地をじっと見つめていた。それはもしかしたらあの夜に思いを馳せていたのかも知れない。

レヴィはいつも暢気で、楽しげで。だからボクは忘れていたのかも知れない。

自分の過去も判らず、自分が何者なのかも判らない。そんな彼女がここに居る理由は、そしてこの場所に來た理由は、きっとボクへの言葉の為だろう。

けれどもボクは彼女に何も言える事が無くて。それはどれだけ不安を駆り立てるだろう。頼れる物も縋れる物もない気分は、きつととても心細いはずだから。

「……………お前が探してるウラがボクかどうかはわからないけど、きつと探していれば見つかるよ。ボクも、手伝う……………からさ」

「……………はい。ウラの事を頼りにしています」

異様に照れくさかった。でも、彼女が安心したように微笑むと、言った甲斐はあったと思う。

そうだ、ずっとこんな風に生活していけるわけじゃない。FRESのコンテナから現れ、マンイーターに追われていたレヴィ。そこまでして取り戻そうとするFRESが、このままレヴィを放っておくはずがないんだ。

だったらボクに何が出来るのだろう。世界の半分を支配するような巨大な力を相手に出来る事なんて限られている。それにあの夜ボクは殺されかけたんだ。何で生きているのかという方がわからない。

本当ならこいつをさっさとFRESに突き出して知らん顔しているのが一番いいんだ。そんな事はわかってる。でも、仕方ないじゃないか。

「……………何か？」

「い、いやっ！ 何でもないよ！」

レヴィは独りだ。そして自分を探してる。

そんな彼女を、頼る物の無い彼女を、こんな馬鹿みたいな世界に投げ出す事なんて出来ない。

誰にも頼れず独りきりで生きていく辛さと寂しさを、ボクは嫌と言
うほど知っているから。

だから、放っておけるわけなんてないんだ。それは正直に言えば
認めたくない事だけれど。でもきつとボクは、見捨てられないん
だ。

「とりあえず、『ウラ』についての情報を集めなくちゃ。ボクが
知らないだけで、同業者の中にそんな奴が居るのかも知れない」

「はい。でも、どうやって調べるんですか？」

「……お前、それ本気で言ってる？」

頭上にクエスチョンマークを躍らせながら首を傾げるレヴィ。こ
いつは本当に、ボクの話の聞いているのだろうか。

「ボクはAsh——。この街でボクに盗めない情報なんて無いん
だよ」

過言ではない。FRESもOZもボクの手にかかれば容易いし、
それは勿論政府だってそうだ。

ボクに見つけられないものはないし、盗み出せないものはない。
時間とお金は相応にかかるけど。

今の自分に出来る事、少しずつやっていこう。そうすればきっと、
彼女の願いは叶うだろうから。

その手伝いが出来たらきつとボクが彼女と出会ったことは無意味な
んかじゃなくなる。ボクは彼女を人間にはしてあげられないから。
ずっと傍には居てあげられないから。

でも心のどこかでそんな自分を醒めた視線で見つめているボクが居
た。そんな夢物語みたいな事、出来るはずがないんだって。

大人ぶって傷つく事を恐れている、諦めたがりのボクが居た。

「行こう、レヴィ！　とにかくここに居たってしょうがないからね！」

「はい。　ところでウラ？　どうやって情報を得るのですか？」

なんだかカッコよさげな台詞を口にしてみたものの、彼女は全く理解していなかった。

Ashとしての仕事場に着くまでの道中、ボクは彼女に自分の仕事の内容をもう一度一から十まで説明する羽目になった――。

ゼンとマリーの二人が本格的に行動を始めたのは一晩明けた翌朝の事だった。

ハイウェイを突き抜ける二人を乗せたバイクの後部座席からマリーの劈くような悲鳴が空に響き渡る事数十分。　二人はあの夜、『極秘兵器』が紛失した場所へやって来ていた。　そこはハイウェイの高架下、裏通りにある十字路だった。　比較的古い住宅建築が並び、特に目立つような通りではなかったが、夜になればそれなりに人通りもある、何の変哲も無い場所だ。

「ここに直接ヘリが落下して、そこから見失っちまったのか。　確かになんか大惨事っぽかった痕跡だけは残ってるな」

バイクを停車し、瓦礫の山を見下ろし眉を潜めるゼン。　しかし彼が言葉をかけている相手である女性はゼンの腰に必死にしがみ付いたまま、身体を小刻みに震わせて居た。

「……おい、何してんだあんだ……」

「……うまれてきてごめんなさい」

「いや……離れようぜ。仕事になんねえよ」

「……しにたくないです」

「あゝッ！！ イライラするなあもッ！！ いいからさっさと降りるんだよ、馬鹿ッ！！」

涙を流しながら放心するマリーと並び、現場に足を運ぶゼン。余りにも乱暴なゼンの普段通り過ぎる運転はマリーが一生懸命整えてきた髪形を滅茶苦茶にし、眼鏡はずれて衣服も乱れに乱れさせるのに十分すぎた。

当たり前のように瓦礫の山の前に屈み、砕け散った鉄板やアスファルトの破片を摘みながら周囲を眺めているゼンの背後、文句を言うてやりたい気持ちで一杯なのに怖くて逆らえないマリーはめそめそ涙を流しながら乱れた髪を直していた。

「流石FRESだ、ヘリの破片なんかは完璧に片付けられてるな。

だったらこの瓦礫の山、撤去してやりやいいのによ。サービス精神ってもんが無くて駄目だ、ウチの会社は」

「……それは、FRESがこの事件に関与しているという事も、さらには失った兵器を取り戻せていないという事も、極秘にしておきたいでしょうから！」

「な、何で怒ってんだ……？」

「怒ってませんっ！！　それより、どうしてここに来たんですか？」

「いや。　実際、どんなもんがここにあったのか興味があつてな。　アスファルトも鉄板も全部粉々だ。　何がどうなればここまで酷くぶっ壊れるんだ？」

「本社は追撃にマンイーターを使用したそうですから」

「……おい、そんな危ないモンを使って尚、取り戻せなかったのか？　テロリスト如きが駆逐兵器を撃退出来るのか……？」

「失われた兵器が悪用されたと考えるのが無難でしょう。　あれの力なら、これくらいの被害で済んだ事の方が奇跡ですから」

立ち上がり、ゼンは振り返ってマリーを見つめる。　昨晚、二人が We i t で話し合った時から、ゼンの中にはいくつかの蟠りがあった。

マリー・コンラッド。　所属は宇宙開発特務室。　そして、奪われた兵器の研究に携わっていた科学者の一人。

世界を滅ぼしかねない程の力であると脅しのような事を言いながら、彼女は結局その正体をゼンに明かす事はしなかった。　ただ、危険な物であると。　ゼンが実際にこの場所を訪れたのは、それがどれほど危険なものであるのかを実際に確認して見たかったからと言う理由もある。

そしてもう一つ、マリーがこの光景を見てどんな反応を示すのかを確認したかった。　狙い通り彼女は『これくらいで済んだ事が奇跡』という事場を漏らす。　それほどまでに危険なものであれば、対処の方法も色々ややこしくなる。

「なあ、結局何なんだ？　奪われた兵器ってやつは。　爆発物なの

か？ それともマンイーターのような駆逐兵器なのか？ あるいは重火器——色々可能性はある。でもこの様子を見ると爆発物が大型の駆逐兵器の可能性が高いように思える。どちらであるかによって対処の方法も違ってくるだろうが」

「内容は極秘なので……。ですが確かに、ゼンさんの言う通り。それは爆発物であり、同時に駆逐兵器でもあります」

「ハア？ 何だよそりゃ。オレは頭悪いんだ、判るように説明してくれよ」

カ一杯馬鹿を自称するゼンに思わず呆れるマリィだったが、人差し指をピンと立ててずれた眼鏡を直すと真剣な瞳で口を開く。

「とにかく、ゼンさんには説明出来ません。貴方のやるべき事は、テロリストから兵器を奪還する事。それ以上の事を知る必要はありません」

「勘違いするなよ。オレはその自分のやるべき事をやり遂げる為に訊いているんだ。興味本位で仕事をする奴は早死にする——そういう世界だ。別に言い触らしたりしねえから、ちゃんと教えてくれ。でなきゃ失敗した時オレはテメエを言い訳にするぜ」

「む、むう……。それでも、言えないんです。こんな風に言うのもあれなんです、そもそも何故貴方みたいな人が奪還任務についているのかわからない——それくらい、FRESという企業の今後を決めてしまうくらいに重要な物なんです。口外厳守は当然ですし、話した私も聞いてしまった貴方も、FRESという企業から一生逃げて暮らす事になります。それでも構わないんですか？」

ゼンのはつきりもしない事を基本的に好まない。曖昧さの美学など彼には通用しない。遠まわしな言葉は通用しないし、ストレートに思いついたら即座に行動する生き方を信条としている。

しかしそれでも仕事は仕事。感情を含ませる程甘くもない。知らなければ仕事に支障は出るが、そこまでしてパートナーが口を閉ざそうと言うのであればそれ以上踏み込む必要はないと判断した。この仕事を与えられてしまった時点で無茶でも無謀でもやり遂げるしかないのだ。だからこそ万全を期したいのだが、致し方ない。深く溜息を漏らし、軽く手を振る。

「わかった、わかったよ。そんな怖い顔すんな、もう訊かねえよ」

「ほ……っ。そうして頂けると助かります。ですが、ある程度推測は立てたいですね？」

バイクの上に腰掛けたマリーは持ち歩いている小型の端末を開き、キーボードを操作する。そこにいくつかの映像が映し出され、ゼンは画面を覗き込んだ。

「これは二日前の夜、事件が起きた時間帯のこのあたりで起きた映像です。街にはいくつも監視用のカメラが仕掛けられているのはご存知ですよネ？」

「ああ。政府の管轄だろ？ F R E S は囓んでいないはずだが」

「はい。ですから勝手に映像を盗み出させて貰いました。昨日の晩のうちに」

ゼンは思わず目を丸くする。政府の街に対する管理は確かにザルと断ずるに躊躇無いものだが、それは口で言う程容易くはない。

何せ万が一不正アクセスが発覚してしまえば、その後の人生はとも暗い物になる。

マリーはそれを容易くやってしまったのである。この小さな端末一つだけで、たった一晩で。並のトレジャーでは不可能な事を、FRESという真つ当な会社の研究者が行う——それは育ちの良さそうなマリーの外見も相まって、意外な印象を与えた。

「輸送は実際に兵器を輸送する大型輸送ヘリの他に護衛用のヘリが六機、しかも特別な戦闘用のものが同行していました。しかし、結果輸送ヘリは追撃され——？ ゼンさん、聞いていますか？」

「あ、ああ。続けてくれ」

「——撃墜された輸送ヘリはそのまま私たちが今居る交差点付近に墜落。その後何十メートルが移動した後爆発したと思われます。」

その輸送ヘリを撃墜したテロリストは、輸送ヘリの進行方向に向けて進んでいる上のハイウェイの上を走る車から、対戦車ライフルで狙撃した物だと思われます」

映し出された映像には輸送ヘリに追従する車、そしてそこから身を乗り出しライフルを構える何者かの姿が確認出来た。しかし解像度の問題もあり、顔まではわからない。

「明らかに事前に準備していたところを見ると完全に情報は漏れてたらしいな。漏洩したのはどこからなのか……」

「それは内部に裏切り者が居ると考えた方が妥当です。そもそも、あの兵器の研究データは他のネットワークから物理的に接続されていないので、外部からアクセスして盗み出すのは不可能なんです」

「成る程。 本社内の実際の研究室まで辿り着いてそこで調べないといけないわけか」

「極秘中の極秘として研究が進められていたため、社内でも事情を知る人物は限られています。 犯人が判るまでそう時間はかからないと思います」

「社内までスパイが侵入した可能性は？」

「ゼロでは在りませんが1%もないでしょう。 うちの研究室、入るのに毎度クイズが出るんです。 そのクイズが解けないと入る事が出来ないんですが、これが日替わりでして……。 中に居る研究者がお遊びで作るんですが、難易度が恐ろしく高いんです。 この世界の天才をかき集めたようなところなので、私も一度外に締め出された事があります。 入るのに何時間もかかりたりして……。 他にも超一流のセキュリティで管理されているので、部外者の侵入は非常に困難です」

「……なんかよくわからんが不思議なセキュリティだな。 まあどこから漏れたのかは兎も角……。 このテロリストが何者かって事だな」

「大体の目処は付いています。 あの護衛を突破出来る勢力は自然と絞られますし……。 問題は、完全に特定するのが難しいと言う点にあるのですが」

「と、言うത്？」

「この件には恐らく複数の組織、企業が複雑に関与していると思われます。 もしかしたら政府さえも……。 私たちに与えられた役

目は、そのうちの一つのテロリスト組織——最も関与した可能性の高い人物に接触し、その是非を問う事です。私たちの他にもいくつかのチームが同時にそれぞれ担当の組織に探りを入れているので、つまり、たった二人だけで全てを調べる必要はないという事である。与えられた場所を調べるだけ——それならば確かに深く事情を知る必要はない。当たり前れさえ明確ではないのだ。気構えて全てをやり遂げるつもりで臨む必要はないという事。

「でも、一番可能性が高いんだろ？ どちらにせよ気は抜けないなで、その組織って言うのは？」

「名称は『アース』。ここ数年で急激に勢力を拡大した組織で、テロリストというよりはレジスタンス——この街の外部への出入りを禁じる政府の行いに対しての反対運動が高じて発生した物のようです」

「それがなんでF.R.E.S.の兵器を奪うんだ……？」

「その確認が私たちの仕事ですよ。さあ、急ぎましょう。時間は刻一刻と過ぎていくんですから」

と、口にした直後、急ぐ為には再びバイクに乗らねばならないという事実気づいたマリーは青ざめた表情でその場で停止する。ゼンはそんな事はまるで気にも留めず、崩れた街を振り返る。

この世界で生きている人間全てが善良で在るとは言わない。しかし、この場所で被害を受けた人々は咎を受ける必要があるほど罪を抱えた存在だったのだろうか。

誰もが当たり前のように生き、今と言う世界に縋りつくこの街で、突然に未来を奪われる命が多すぎる。

「――止めなくちゃな」

拳を強く握り締め、呟く。 もうこれ以上、誰かが巻き込まれ傷つ
いてしまう前に。

「よし、行くぞコンラッドさんよ……って、何逃げてんだよ。 お
い！ 何瓦礫に隠れてんだよ――！」

「ゼンさん、私思ってたんです。 ゼンさんって失礼ですけどお幾つ
ですか？」

「はあ？ 二十歳だよ、それがどうした」

「では私より年下ですね。 年下は年上を敬うべきだと思うんです。
そう、気を使うべきだと思うんです。 私の言いたい事がわかり
ますか？」

「全然わかんねえ。 つかお前何歳だよ」

「二十四ですよ。 お姉さんですよ」

「げっ、見えねえ……。 童顔すぎだろ。 おら、行くぞ」

「いやあああああああつ――！ 安全運転で――！ エコ発車でえ
ええええつ――！」

泣き喚くマリーを無理矢理バイクに寄せ、走り出す。 高らかに響
き渡る悲鳴に、街行く誰もが一度は振り向いた。

「……………。は——っ？」

調べ物をするならば最適な場所は当然ボクの部屋——凄腕のトレジャーハンターAshの仕事場と相場は決まっている。少なくともボクにとってはそうだし他に選択肢はなかった。

何故か？ 当然自分の部屋と言う事がある。何年も掛けて改造を重ねたそこいらの物とは比べ物にならない程高性能化されたマシン。完全に合理的に配置された計算しつくされた構造。お陰さまで散らかっているのはご愛嬌だが、とにかくその部屋はボクの人生全てと言っても過言ではない場所だった。

その部屋の扉を開いた直後、ボクは思わず啞然と立ち尽くす。ボクが長い年月を費やしてきた自慢のマシンが黒い煙を吹いて沈黙していたのだ。いや、動いていても困るけど。でも、何で煙吹いてんのって話で。

「あら？ お帰りなさい」

目を丸くするボクの視線の先、壊れたマシン、ぶち割れたモニター、切断されまくったケーブルの山の中、見知らぬ女が立っていた。

緩くウェイブした金髪のショートカット。サングラスを着用し、全身をすっぽりと覆う黒いコートを纏って腕を組んでいる。

ボクは何も言えなかった。ただ口をぱくぱくと開け閉めし、わなわなと振るえる拳を握り締める。段々と変な笑いが込み上げてきて、気づけばボクは叫びながらマシンに駆け寄っていた。

「うわあああっ！！ な、何がどうなってんだよぉっっ！？」

嫌な汗がだらだらと噴出す。直せるかどうかは一目瞭然だった。
一生蘇る事が無い愛用マシンの数々にそつと触れようとすると、
漏電したエネルギーが火花を散らした。
思わず全身の力が抜けてその場に座り込む。腰が抜けたと言い換えてもいい。あとは薄ら笑いを浮かべながら、その場にうずくまる事しか出来ない。

「あー……。なんていうか、うん。そうね。ご愁傷様、言
つておこうかしら」

ブリキの人形のように、きりきりと首を捻って背後の女を睨み付ける。まるで悪びれる様子も無く、煙草に火を点けていた。
例えばうの無い絶望と怒りと困惑の中、立ち上がり詰め寄る。ぶん殴つてやるうかと思ひ近づくと、女はボクの眼前にびしりと人差し指を突きつける。

「勘違いしないでよね。あたしがここに来た時には既にこうだったわよ。とにかくあたしは無実。あんたが可哀想なのは判るけど、八つ当たりでしかないって事。判った？」

「……………んなこと、信じられるかああああっ！！」

掴みかかるうとするボクの額に突きつけられたのは、今度は人差し指なんて生易しい物ではなかった。
重厚感たっぷりに、銀色に鈍く輝く大型拳銃。いつの間に抜いたのか、女はそれをボクの額に押し付け、後退させる。

「めんどくさい子供ね……。あたしは悪くないって言ってるんですよ？ 無駄な論争を繰り返している場合じゃないの。判った？」

ボクは必死で縦に頭を振った。一秒に五回くらいのペースで振った。もう怒りとかそんな事よりもこの場所から逃げ出したい気分一杯だった。

コートの下、女の腰のベルトには無数のナイフと拳銃が装備されているのが見える。拳銃を持ち歩くのは違法ではないけれど、人に突きつけたら違法じゃないのか？

「とりあえず自己紹介するわね。あたしの名前はイクス。『アイス』って言うレジスタンス組織のリーダーよ。あんたがウラでしょ？ あんたの——！？」

女が驚くのも無理はなかった。ボクもついその瞬間まで、『彼女』の存在を忘れていたのだから。

いや、違う。厳密にはボクが扉を開き、室内に不審者が居る事に気づいた時点で物陰に隠れて様子を見ていたのだらう。見た瞬間襲い掛からなかったのはボクの知り合いであるケースを想定してか。しかし銃口を向けられている以上、友好的な関係でない事は明らかで。

だから彼女は動いたのだ。この狭い空間の中、一体どこに隠れていたのか。部屋の外に居たのかも知れない。何の気配も音も無く、女の背後から伸ばされた手。それは拳銃を握る女の手首へと伸ばされ、銃口はボクの額を反れる。

女の対応は素早かった。拳銃を右手だけでボクに向けていた女は、左手を腰のナイフに伸ばす。しかしそれよりも先にレヴィは掴んだ女の腕を振り上げ、背負うようにして入り口方向に投げ飛ばす。空中を人が吹っ飛んで行くと言う摩訶不思議な映像をボクは目撃していた。閉ざされた鉄の扉に直撃した女は扉ごと部屋の外に飛び出し、手摺のない通路から落ちて行った。

何だか悲鳴が聞こえたが、ボクは聞こえなかった事にした。あれ

くらいされて当然なのだ、とも思ったがちょっとこれはやりすぎか。

「た、助かったよレヴィ……。ありがとう」

「いえ、当然の事ですから。 それでは止めを刺してきます」

「す、ストップ！！ 待て待て、それはどういう意味だ……」

「……？ ですから、動けないようにと。 彼女はまだ活動可能な状態にあると推測します」

部屋を飛び出そうとするレヴィの手を両手でしっかり押さえつけ、ボクは首を横に振る。 冗談じゃない。 目の前で殺人されて堪るか！

すっかり忘れていたが、レヴィの力は凄まじい。 生身の人間相手に全力を出したら、きっと滅茶苦茶な事になる。 いや、あんな投げ飛ばされ方をしてしかも通路から落ちて行った彼女だって、まともな状態にある可能性の方が低いじゃないか。

「とにかく、殺さなくていいの！ 何でそんなムキになるんだよ、お前はっ！」

「……ですが、ウラに銃を向けたんですよ？ もしかしたら殺されるかも知れなかった。 そんな人を放って置くんなんて……出来ません」

「それでも駄目ったら駄目！！ ボクは穩便に生きていきたいのっ！！ 出来るだけ面倒な事にならないように………？」

何やら物音が聞こえ、ボクらは同時に風通しの良くなった扉から外

の様子を伺う。

見下ろす遠くの通路、FRESのロゴが刻まれた装甲車が停車していた。そこからそろそろと武装した兵士が降りてきて、こっちに向かって走って来る。

自分の顔が引き攣っているのを感じた。レヴィはボクの隣でほったたを膨らませている。何で？　って訊くよりも早く、彼女は呟いた。

「何故彼らは私たちの邪魔をするのでしょうか？　ウラは何か悪い事をしていたのですか？」

ああ、していたとも。トレジャーしていたとも。でもね、レヴィ。多分彼らの狙いはボクじゃなくて、君なんだから思うよ。

荒事なんて御免なのに。どうしてボクは、この場所から逃げる最も効率のいい方法を必死で思考しているのだろう。

「隠れていてください、ウラ」

身体を被っていた布を投げ捨て、レヴィが笑う。

「直ぐに終わりますから」

につこりと、何事もないかのようにレヴィは笑う。

けれど沢山の足音がどんどん迫ってきていて。逃げ場何て無くてああ、だったら。ボクにどうしろって言うんだ——？

頭を抱えて部屋の隅に隠れると、レヴィが颯爽と部屋を飛び出して行く。直後、部屋の外で銃声が聞こえた。

何だかとても、大変な事になった——。

疾走する蒼い風は細い通路の中、突き抜ける突風のように駆け巡る。FRES社の作業員たちがレヴィアंकローと接触してから僅か数秒。先陣を切って進んでいた作業員数名は蹴り飛ばされ、空中をくるくると舞っていた。

人が空を飛ばされると言うお笑い染みた状況に誰もが呆けていた。

目の前の敵はただの少女。巨大な兵器でもなければ、特殊な武装をしている訳でもない。

むしろ、作業員たちは全身を覆う強化スーツによって武装しているのだ。彼らの身体能力は高められ、物理的な攻撃に対する性能も持ち合わせている。だというのに、少女の足が吸い込まれるように急所に直撃すると、まるで巨大な鉄球が直撃したかのような衝撃が全身を駆け巡り、気づけば宙を舞っている。

蒼い髪が揺れ、鋭い眼差しが怒りに打ち震えている。それを殺意と解釈し、恐怖するのは致し方の無い事だと言えるだろう。

彼ら自身に罪があったのかと問われれば、その答えには詰まる所だ。何しろ彼らはただ仕事としてこの場所にやって来ただけなのだから。

こんな話聞いていない。それが素直な感想だった。数十人の編隊全員が同時にそれを思う。こんな事になるなんて、聞いていない。聞いていないのだ、と。

元々彼女と彼らの邂逅は予定されていたものでは無かった。予想外の遭遇はお互いにとって良くない効果を齎す。

邪魔をされたレヴィアंकローは不機嫌そのものであり、八つ当たりをするように作業員を蹴散らすその動作に手加減や情けのようなものは一切感じられない。装甲服の上から叩き込まれるしなやか

な手足が生む破壊は、無慈悲な程に彼らを痛めつける。

予想もしていなかった彼らの反撃手段は銃器によるものしか無かった。しかしそこで更に予想外の事態を目の当たりにする事になる。鋼鉄の弾丸を打ち出す機関銃。その殺傷力は確かな物で、装甲服を着用している彼らのような人間ならまだしも、一般人——ドレスを着用している女一人殺せないわけがない。しかし、戸惑いながらも引き金を引いた彼らが目にしたのは、銃弾を受けても平然とその場に立っているレヴィアンクロウの姿だった。

誰もが機関銃を確認した。それが本当に機関銃なのか確認した。銃弾は彼女のドレスを貫き、しかしその白い肌を傷つける事はない。一歩前に歩みだす彼女の足音に誰もが戦慄する。

「——やはり貴方達は危険です。ウラに近づかせる訳には行きません」

レヴィアンクロウが駆け出すのと工作員達の悲鳴が上がるのはほぼ同時だった。容赦無く放たれる銃弾が奏でる騒音を耳にしながら、その遥か下方でイクスは顔を上げた。ずきずきと全身が痛みを訴え、投げ飛ばされた右腕はあらぬ方向へ曲がってしまっていた。

「痛……。手加減って物を知らないのかしら、あの子」

落下したのがゴミ捨て場の上だったのが幸いしたと言える。しかしイクス本人にしてみればそんな不潔なところに落下したのはこの上なく不幸であったが。

拉げた右腕を左腕で折り曲げ、正しい方向へと修正する。それは人体の構造的に無理のある動作だったが、彼女にとっては日常茶飯事であると言えた。

「動くわね」

右腕を軽く振り、指をそつと握ってみる。健康な状態と遜色なく稼動する右腕で全身の汚れを叩き、上を見上げる。

頭上から降って来た工作員の一人がイクスの頭上に降り注ぐ。それを何の感傷も無しに右腕で払い、ゴミ捨て場に突っ込ませる。乱雑に散らばるゴミの山に背を向け、イクスは歩きながら拳銃を抜き、両手でそれを構えた。

「全く……本当に乱暴ね。まあ、REVとしてはあれくらいでないと意味が無いのだろうけど」

呆れるように溜息をつき、一呼吸。鋭い眼差しを浮かべ、イクスは駆け出した。

階段を駆け上がりながら両腕を前に突き出し、足を止めずに引き金を引く。レヴィアंकロウに襲われ引き返して来る工作員達は想像していなかった第二の敵の存在に浮き足立ち、反撃する事も悲鳴を上げる事さえも出来ないまま、巨大な銃弾に貫かれて次々に倒れていく。

イクスは足を止めない。無表情に目前に迫るヒトガタ達を打ち抜いて行く。特殊な鉄鋼弾を打ち出す右手の銀の拳銃が火を噴く度に装甲服を貫通し、工作員の肉体を吹き飛ばす。

それらを挟んで反対側、格闘で装甲兵をばったばったと薙ぎ倒すレヴィアंकロウの姿があった。二人は意識せずとも段々と出会いに向けて歩みを進め、やがて互いに最後の標的を葬り去った時、二度目の邂逅を果たした。

「——まだ、生きていたのですか？」

「す、ストップ!! 待ちなさいよ、明らかに助けてあげたんでしょっ!?! あんたと敵対するつもりはないのっ!?!」

銃を振り回し後退するイクス。しかしその言葉を意に介さず、レヴィアंकロウは低い姿勢で駆け出そうとする。その直後、イクスは咄嗟に大きく口を開き、絶叫していた。

「人間になる方法、知りたくないの——ッ!？」

その言葉が後ほんの僅かでも遅くこの世界に生まれていたのなら、彼女の首は見事にへし折られていたであろう。

伸びたレヴィアंकロウの指先が自分の喉元に掛けられている事にイクスが気づいたのは、レヴィが停止してから数秒後であった。

逃げる事も、避ける事も、ましてや反撃する事など夢のまた夢——。余りにも鋭い攻撃に、思わずイクスの頬を汗が伝い、乾いた笑みが浮かんでくる。

「……人間になる方法、ご存知なのですか？」

「は、う、あ……。と、にかく……。これ、どかして……。生きた心地がしない、わ」

「……………」

退き、指先を強く握りしめるレヴィアंकロウ。その表情は決して納得が行った様には見えない。しかし、イクスの話に興味があるのも明らかだった。

下手な動きを見せれば殺される——。そんな無言の圧力に晒されながら、イクスはそつと壁に背を預け、震える指で胸ポケットの煙草に手を伸ばす。

「兎に角、休戦。そんなに怖い顔しないでよ、こっちは本当に死

に掛けたんだからね」

「良いでしょう。一先ずは貴女の命は奪いません。ですが、もしまた妙な動きを見せたり、ウラに何かしようとした時は――」

「ああもう、殺せばいいでしょ！好きにきなさいよ！そんな事より、早くここから離れた方がいいわ。あたしの知っている事を話すのは、それからよ」

周囲を見渡すレヴィアंकロウ。そう、ここは違法住宅地。四方八方に家があり、部屋がある。その扉たちが僅かに開き、住人達の視線が二人に向けられている事態にレヴィアंकロウが気づいていないはずもなかった。

荒事揉め事は珍しい事ではない。しかし、激しい銃撃戦や乱闘騒ぎなど早々起きていい物でもない。住民たちの怯えた視線を受け、レヴィアंकロウは静かに頷く。

「そうした方がいいみたいです。人目は出来る限り避けるべきです」

「オーケイ。それじゃあ一時休戦、これ大事よ？約束してね、お嬢さん」

指先で大型拳銃をくると回し、流れるような動作でホルスターに戻すイクス。茶目っ気のあるウインクも、無愛想に頬を膨らませるレヴィアंकロウには意味が無いように思えた。

とりあえずまず彼女たちがすべき事。それは、銃声と悲鳴を聞いて怯えきっているであろう、部屋に隠れた少年を引っ張り出す事だろう。

二人が同時に駆け出し風通しの良い出入り口を潜ると、室内からは

少年の悲鳴が聞こえていた。

「――で、到着したわけだが」

ゼンとマリーの前に聳え立つのは今は廃棄され誰にも使われる事の無くなった地下鉄への出入り口だった。

バイクを降りるゼンと、涙を流しながら呪文のような言葉を繰り返し口ずさむマリー。強引にそのマリーの首根っ子を掴んでゼンは進む。

「しかしすげえな」

廃墟そのものであると言って過言ではない。出入り口周辺には有刺鉄線が張り巡らされ、吹き荒ぶ風は埃っぽく、幽霊か何かが出るにはうってつけの環境だと言える。

元々、この街の交通手段として地下鉄はメジャーな物であったが、近年は頭上に張り巡らされたモノレールにとって換わり、地下鉄の利用頻度は減っている。そもそも政府は地下と地上、二つの公共交通機関を維持するつもりが無かった為、直ぐに地下鉄が運行しなくなるのは自然な事だった。

地下空間を行き交う地下鉄の線路は手抜き工事も多く、陥没、土砂崩れなどの事故も多く、さらには地下空間に無断で立ち入る人間によるテロ行為や悪戯の格好の的であった。今となっては何故そんな不安定な場所を公共交通機関が平然と往来していたのか、疑問に思っしかない。

実際その手抜き工事が原因で生み出された謎の空洞も多い。それらがテロリスト、レジスタンスの温床になっている事は、それほど珍しいケースではない。

「で、あんたはバイクに乗る度にそうなるのか？ 随分と面白い習性だな」

「あ……！？ あ……っ！ 貴方がそれを言うの！？ 貴方が普通に、ふつ……うに運転さえしてくれば！！ 法律を守れとはいわないけれど、それでもごくふつ……の、人間らしい運転さえしてくれば問題ないのよ！？ それって私が悪い事なの！？ 私が悪い事なのっ！？」

涙ながらに必死に詰め寄るマリーに揺さぶられながらゼンは深く溜息をついていた。 いちいち構っていては時間がいくらあっても足りない。 やり過ぎそう……。 そんな類の溜息である。

腰に挿した大型のナイフを取り出し、有刺鉄線を切り裂いて行く。超高速で振動し、鋼鉄でさえバターののように切断出来る振動ナイフが、ゼンのお気に入りの得物だった。

戦闘に使える他にもこうして様々な場面で役に立つ。 出入り口を確保すると、まとわりつくマリーを振り解き、バイクの元に戻る。

「どうでもいいけど年下だと知った瞬間タメ口だな、あんた」

「だって四歳も年上だもん。 お姉さんだもん。 むしろ、ゼン君の方こそ敬語を使うべきじゃない？」

失笑しながらバイクを押し、フェンスを潜るゼン。 それに続き、マリーも恐る恐る敷地内に足を踏み入れた。

おっかなびつくりゼンの背後に続くマリーに捕まれっぱなしのジャケットの裾が気になるゼンではあったが、今はそれどころではない。 いよいよ敵地に乗り込むと言うのであれば、トラップの警戒くらいいなければ。

しかし、地下へと続く階段までやって来ても何も起こらない。バイクを転がしながら地下へと降りていく二人。壊れた配水管から漏れ出したのか、どこかで水が流れる音が聞こえ、足元はじつとりと湿っている。

湿度の高い薄暗い空間だったが、足元の非常灯だけは未だに現役であり、進む事は不可能ではない。一先ずバイクのライトを点等すると、薄汚れ落書きとゴミまみれになった駅のホームが姿を現した。

「このホームが使われなくなってどれくらいなんだろうな」

「えと、確か十二年と三ヶ月です。下調べはばっちりだよ」

「そうかい……。それにしてもなあにもないな。人が居ると思っちゃいねえが、何も起こらん。ここが本当にアースの拠点なのか？」

「いえ、違いますよ？ アースの拠点はこの線路をずっと、15kmくらい進んだところにあるの」

「15キロッ!？」

すかさず振り返るゼン。マリーはずれた眼鏡の向こう側、真ん丸くした瞳でゼンを見上げている。

その頭を両手で掴み上げ、ぶんぶん振り回して怒鳴り散らした。

「そんなに歩くんじゃ等分先じゃねえかっ!! ここが拠点だって話じゃねえーのかよ!？」

「そんな事一言も言っていないですうつ!! い、いいじゃないですか気をつけるのは悪い事じゃないと思うつ!!」

「……………」

ぐらぐらと揺らされた頭が解放され、ふらつく足取りで一息つくマリーが目にしたのは、バイクのエンジンをかけるゼンの姿であった。声にならない悲鳴をあげ、慌ててゼンのバイクのキーをひったくと、そのまま暗闇の中に放り投げた。

「……………？ あ—— ツッ！？ なっ！？ なあっ！？」

口をあぐりと開けて呆然とするゼン。固まり続けるその傍ら、マリーはだらだらと冷や汗を流しながら乾いた笑いを浮かべていた。

「おっ…………！ なっ…………！？」

怒りの余り笑うゼンの鋭い視線がマリーを射抜くと、マリーはこっそりとゼンから離れ、ゴミの山の陰に隠れた。

「何やってんだコラアアアアアッ！？」

「ひいーっ！ ごめんなさい、ごめんなさいっ！！ でも、バイクは良くないと思うっ！！ バイクだけはもう駄目だと思うっ！！」

「訳のわからねえ事をほざいてんじゃねえぞ、こんの馬鹿女ア——ッ——！！」

ゴミの山を蹴散らし、マリーの首根っ子を掴んで引き上げるゼン。青筋がびくびくと揺れ動く凄まじい形相にマリーは涙を流しながら脱力していた。猛獣に鹵獲されてしまった小動物と言うのは、こんな状況なのかも知れない。

「ざけんじゃねーぞクソッ！！ てめえ、さつさと鍵を探して来いっ！！ このバイクが一体いくらしたと思ってやがる！？」

「……………それでも、もうバイクは嫌ああああああああっ」

泣き喚くマリーとゼンとの言い争いはしばらく続いた。しかし結局その後には、二人肩を並べて線路の上を搜索する事になった。

『アース』。

住民に対して非常に閉鎖的な態度を取り続け、その説明もしないこの街の管理者達に反抗する為に生み出され、活動が続けてきた反政府組織。

その歴史は長い物で、イクスは三代目リーダーらしい。この街がいつから存在しているのかは判らないけれど、もう半世紀以上活動している組織など今の世界にそう多くはない。

誰にも知らない所で生まれ、誰にも知られないまま朽ち果てて消えていく。そんな命や、形、在り方ばかりで、孤独と孤独が繋がらないこの世界で、『歴史がある』事を知る事も伝える事も難しい。

親の顔も知らず、生まれた場所も知らず、その意味も知らないまま死んで行く。そんな命が多い中、受け継ぎ、そして自分が成すべきことがはっきりしている人はいいいと思う。だって楽そうだ。

イクスが用意していた乗用車に乗り込み、三人で逃亡を始めてから数時間が経つ。今ボクらは高速道路を降り、近くのアスタフードショップの駐車場に居る。

運転をしていたのは勿論イクスで、余程暇だったのかそれとも仕事熱心だったのか、彼女はアースについて長々と聞かせてくれた。

ボクは興味無かったのだけれど、助手席に座っているのだから聞かえてしまうのは仕方が無い。

レヴィは後部座席から身を乗り出し、イクスの武勇伝に耳を傾けていた。彼女は人の話を聞くのが好きだ。別に、ボクの語る言葉である必要はないらしい。

知識に対して貪欲――。恐らくそんな意味なのだろう、あのきらきらした瞳は。何故か助手席で腕を組み、深く体重をシートに預けたボクの表情は浮かないものだった。

「ほら、あんたが一番顔割れてなくて安全何だから早く行ってきなさいよ」

「……お金は？」

「後で払うわ、うん」

その『後』は一生来ない気がした。

オンボロの黒い普通車——何故か元々はイクスの物ではなかったような気がする——を降り、しぶしぶファストフードショップに行く間もボクはずっと考えていた。

自宅にやってきたF R E Sの作業員。あれは明らかにボクの所在がばれてしまっているという事で。ボクがF R E Sに何をしたのかと言えば、勿論色々やってたわけんだけど……。でもきつと狙いはボクじゃない。

判っていたつもりだった。マンイーターに追われていた彼女を、その巨大な対人駆逐兵器を破壊してしまった彼女を、F R E Sが放っておくわけがないんだって事。

さらにはイクスのようなわけのわからない人まで出てきて、お陰でボクの仕事場は死んだ。ああ、死んだ。思い返すだけで泣いてくる、くそう。

恐ろしく愛想の悪い店員からハンバーガーやら何やらを受け取り店から出る。接客態度のいい店があるなら是非見てみたいくらいだから慣れているけれど、店から出るとイクスとレヴィが楽しそうに話しているのが見えて何故かいい気分がしなかった。

そうだ、何でボクが使い走りで彼女たちは仲良くお話中なんだ。

おかしい。おかしいぞ。ていうか顔が割れてないって、ボク割れてるんじゃないのか。自宅まで来てたわけだし……。いや、彼女たち二人の方が『もっと』割れているって事なのだろうか。

イクスはとても気さくな女性だ。年齢は二十二と言っていた。
一組織のリーダーだけあり、彼女は人の心の壁を飛び越えてしまう
ような、そんな不思議な魅力がある。それはわかる。認めると
ころだ。

でも、何故あんなにレヴィと仲が良さそうなのか。レヴィもレヴィだ、さっきまで敵かも知れないとか殺す殺さないと言っていたのに、もうけろつとしている。

「なんなんだよ、もう……」

イクスはレヴィを人間にする方法を知っているらしい。

それに比べてボクはどうだ。レヴィに何かしてあげられた事なんて、何一つない。

「……………はあ」

何となく自分が情けなくなつた。

「おーい、少年！ 何ぼーっと突っ立ってるのよ。お姫様が食べ物所望よ、早くして」

「……………判ってるよ、もうっ！」

思い切り言い返して駆け出した。

そうだ、それでいいじゃないか。厄介事はイクスが何とかしてくれる。ボクは所詮子供なんだ。戦う力もないし、世の中の事も

知らない。

腑に落ちない胸の奥のどろどろとした感触に必死に言い訳をする自分自身。この気持ちをボクは良く知っている。知っているからこそ、認めたくなかった。

そういう事の二つや二つ、あるものでしょう？ 男の子ならば――。

REV・5

「しかし、よく食べるわね、お嬢さんは……」

レヴィはハンバーガーを四個も五個も食べて、今は指先をぺろぺろ舐めていた。頬にケチャップやら何やら付いているので、ボクはナプキンを渡す。

イクスが驚くのも無理はない。ボクだって知らなければ今度肝を抜かれていたところだろう。本当にあの細い体の何処にあれだけの食料が入っていくのだろう。不思議だ。

イクス、レヴィ、ボク。三人の旅は未だに続いていた。イクスがどこに向かっているのかはまだ判らなかったが、進行ルートを見る限り、決して真っ直ぐではない。時々裏道や全く関係の無さそうな道へ寄り道し、じぐざぐに進んでいる。

その理由は恐らくFRESの監視を潜り抜ける為なのだろうけど、彼女はどこでそれを知ったのだろう。時間がかかるお陰で話す時間は増えたわけだが。

「それで、イクスはどうしてうちに来たの……？」

そこは大事な部分だ。勿論、イクスが敵ではないと判断できる要素は今の所多くはない。兎に角あの場所から離れたかったと言う理由は大きいが、こっちだって全部イクスの事を信じたわけじゃない。

ただ、レヴィは後部座席に隠れながら座っている。彼女は常にイ

クスを背後から殺せる位置に居る、という事なのだろう。どんなに呆けているように見えても、レヴィはレヴィ。危険が迫れば咄嗟にイクスの首を刎ね飛ばすだろう。

とにかく、レヴィが居る限り安全は確保されていると考えていい。

となれば、むしろ知識的にボクらよりも抜きん出る彼女に解説を頼んでおくのが得策だろう。

「あんた——ウラの家が場所がFRESに知られてしまったからよ。REVの持ち出しに協力した人間ではないかってあんたが疑われている」

「それは、ウラとしてではなく、Ashとしてって事？」

「そう。あんたFRESのサーバー内に『足がかり』作ってたでしょ？ 多分仕事がいやすいようにだろうけど。この間一斉に内部の調査が行われてね、多分そこで引っかかったんでしょ。タイミング的にもREV喪失直後だし、疑われて当然でしょうね」

確かにFRESにもOZにもボクは足がかりを残している。でもここ数年間ずっと誤魔化せていたはずだ。相当神経を削って作り上げたルートが発見されるなんて事、考えたくはなかった。

見つかるという事さえ初めてなのに、自宅に踏み込まれるという事は逆探知もすっかりされたという事だ。悔しいが自分より上手の技術者が居ると見て間違いない。流星はFRESという事が。

「それじゃあイクスは……」

「そ。あんたを助けに行ったわけ。尤も、部屋に到着した時にはすっかり荒らされていたわけだけだ」

煙草の煙を吐き出しながらイクスは笑う。

しかしちよつと順序が不思議だ。イクスが来るよりも前に破壊されていたのに、F R E Sの作業員はボクらより後に到着した。壊したのはF R E Sではないのだろうか？ だとしたらF R E Sとしては完全に予想外の展開だったろう。レヴィどころか、第三者であるイクスに邪魔をされ、しかも部屋に後で入ってみればボクもレヴィもいない上にデータ類が蓄積されたボクのマシンは全滅だし。何はともあれ、イクスはボクらを助けようとしていた。そこがポイントだ。そして彼女はF R E Sの敵でも在る、という事。

「イクスが助けようとしてくれたのはわかったよ。でも、イクスはどうしてあそこに？」

「F R E Sがガサ入れするって情報を入手したからよ」

彼女の答えにボクは納得しなかった。もし本当にそうだとしたら、ボクの本名である『ウラ』という名前を知っているはずがないのだ。ネット上ではA s h……。でも彼女は初めて会った時、ボクの名前を口にしていた。事前にあそこの住人がボクであるという事を知っていたのだ。

傲慢じゃないけど周辺住民との交流は皆無なので、ボクの『ウラ』という名前を知っている人間はあの辺りには居ない。F R E SはあくまでA s hを捕らえに来たのであって、ウラという名前は知りもしないはずだ。

腑には落ちないが、とりあえず混ぜ返すのはやめておいた。どちらにせよイクスが怪しい事には変わらないのだ、これから警戒すればいい。

「それで、イクスはR E Vについて何を知ってるの？」

本題に入ると、イクスは顔を顰めてちらりとバックミラーに視線をやる。レヴィはハンバーガーを頬張りながらも、鋭い視線でイクスを射抜いている。

「そ、その話は後にしないかしら」

「はっ？」

「だ、だから……REVの話は後にしようよ。ね？」

ボクは再びバックミラーに視線をやる。すると、レヴィが段々とイクスに近づいているのが見えた。

思わずぎょっとしたのは勿論理由がある。レヴィは口の周りがケチャップだらけでとてもコメディな様子なのに、目だけが殺意に満ちているのだ。ゆつくりと伸ばされる指先がイクスの首にかかったとき、どうなるのかあまり想像したくないっていうかイクスが死んだらこの車事故るんじゃないですか。

「ちょ、ちょっと……！！レヴィ、口の周りがケチャップだらけだよ！ 気をつけようね！！」

「んぐ……はい」

慌ててレヴィの口周りをケチャップでナプキンが……ああ、くそう！ 落ち着けボク！

「と、とにかくREVについてはここで話してもしようがないから、ちゃんとした施設のある場所に行くわよ」

「そうしよう！ レヴィ、ボクの分も食べて良いよ！」

「本当ですか！？ では遠慮なく頂きます！」

食べている間だけは静かというか……。後部座席のレヴィがここにこしながら食べているのを見て、ボクとイクスは安堵の息を漏らした。

「助かったわ、少年」

「急に死なないでよ……？ ボクらの命が係ってるんだから」

「そうね。お互い、まだ死にたくないでしょう？」

乾いた笑みを浮かべるイクス。ボクらの間には妙な連帯感が生まれようとしていた。

「——無人、か？」

反政府組織『アース』、その本拠地と思われる場所にゼンとマリイが到着したのは数分前。

警戒しつつ搜索を続ける二人の間にあつた共通した認識は、やがて奥へと進むに連れ明白になっていく。

その場所は地下鉄の線路、その壁を潜った地下空間にあつた。広がるのはひたすらに闇。人の気配は感じられない。

持ってきたライトが照らす微かな明かりだけを頼りに二人は進む。

拳銃とライトを片手ずつに構え、警戒して進むゼンが前方、その後方にぴったりとくつつきマリイが随従する。

緊張感のある空気が流れるのは当然であつたが、二人の間にはそれよりも疑念の方が強くあつた。地下鉄の線路周辺はまだ微かに明

かりが存在していたが、本陣に近づくにつれどんどん明かりは少なくなり、今となつてはライトがあつても前後不覚に陥りそんな深い闇に覆われている。

人が生活しているような風には見えない上に、歩けば舞う埃。場所は確かにあつてはいるはずだと何度も確認するマリィ。

やがて二人が辿り着いたのは、確かに人の手が加えられていた様子がある扉だった。尤も、随分と長い間開いた形跡はない。捻るだけで軋むような音を立てるドアノブを強く引き、扉を開放する。無人。しかし、そこには確かに生活の痕跡が見受けられる。確かに広い部屋ではあつたが、しかし組織の拠点というには余りに狭い。

警戒すべき物が存在しない事を確認し、ゼンは銃を収める。電気は既に通っていないのか点くことは無く、ゼンはライトで周囲を照らす。

「ここがアースの本拠地つてのは本当なのか？ 人が暮らしていた形跡さえないぞ」

「……そのようですね。すみません、ちょっと確認してみましよう。そもそも、何故アースが今回の事件に関わっていると判断したのか」

「ここが一番可能性が高かつたんだろ？ 『アース』は実行犯だと判断していたはずだ。それがどうしてこうなる？ まるで蛻の殻だ」

「——アースが結成されたのは今から六十年ほど前。当時、街の外に出てみたいと考える若者が集まり結成された組織で、この辺りの反政府組織の中では最も歴史のあるものです。特に六十年前の当初は勢力も大きく——当時はそうした反政府運動が盛んだった時

期という事もあるのですが――。　ともかく、アースという組織はその当時から政府の敵でした」

「街の外に出たい、か……。　まあ、当然といえば当然の要求だよな」

腕を組み、過去に思いを馳せるゼン。　この世界が自分の目の届くだけの高さしかない空で、それが作り物で。　そして広い広いと思っていた街を、大人になるにつれ少しずつ狭いと感じるようになり。　言葉に出来ない、言い用のないどこからかやってくる焦りのような物に駆り立てられ、ただただここではないどこかを目指した……。　そんな時期がある。

この街に生きる子供ならば誰でも一度くらいは考える。　この街は余りにも完成してしまっている。　もう、変化のし様がない。　誰もが与えられた役職をこなし、力関係は永遠に変わる事がない。　個人個人の間での変化すら乏しいこの街が、大きな変化を迎える事などこの先来るのだろうかと思問に思う。

それはつまり、生まれた瞬間から世界に恵まれなかった子供たちは、それから一生恵まれなまま生きていくしかないという事。　与えられた力だけが全てで、自分で幸せを掴み取る事がとても難しい世界。

夢を抱えるのは無謀だと大人は語り、子供はいつしか自分の限界をする。　世界の大きな流れに身を任せ、あとは与えられた役割に徹するだけ。

「……そうでしょうか？　ゼン君は、街の外に何かあるのか知っているの？」

「さあな。　だが、そいつを知りたいと思うのは悪いことじゃないだろう？　俺もガキの頃を思ってた。　世界の『壁』の向こうに何が

あるのか、この目で確かめたいってな」

「知ってしまったら後には引けない事もあります。知らない方が、幸せな事も……」

埃だらけの無人の部屋を見渡し、マリーは小さく呟いた。その言葉の向こうにどんな意味があるのか、あえてゼンは言及しない。

「この組織の連中は、大人になってもそんな夢を忘れきれなかったんだろ。そして遠いどこかを目指した……。だから今、こうして終わってるんじゃないのか」

誰かの手により滅んでしまったのか。それとも自分たちで夢を追う行為に幕を引いたのか。

どちらにせよ、今ここに夢を追う人々が居た形跡は残されていない。とっくの昔に打ち捨てられた夢の残骸――。テーブルの上をゼンの指先が撫で、埃がそつと積もる。

「何はともあれ、上はこの事態を予測していたのかも知れませんね」

「どういうことだ？」

「だからこそ、私たち二人だけの人員で確認業務だったのでは？」

「じゃあ、どうして俺たちはこのアースって組織を確認する必要があったんだ」

「……………犯行声明があったそうです。アースのリーダーを名乗る人間から」

何故かマリーの言葉が歯切れが悪かった。まるでその事実を認めたくないかのようだ。

しかしその言葉のお陰でゼンにもある程度の想像がついた。つまりはこういうことである。

「アースが潰れた事をFRESは知っていた——つまり、何らかの形で関与していたと。そして潰したはずの組織が今、極秘兵器を奪って逃げたと言って来ている——」

「今、何故か再びアースを名乗る人間が現れたという事。そう、それが本物のアースなら、どれだけよかったか……」

ぎゅっと、抱きしめたパソコンを握り締める力を強めるマリー。

それは判りきっている事実を一つ一つ確認するような、余りにも無駄な動作に見えた。

けれどもゼンはそれを否定しない。気持ちが判るから。そう、人間は判りきっている事実から目を逸らし、いつまでもそこから進めない事が多々存在する。

だから一つ一つ確認し、納得させていかなければならないのだ。そうしなければ、いつしか心の中の蟠りは自らの心さえ壊してしまうから。

「……いくつになってもガキだな、俺たちは」

「うん？ 何か言った？」

「何でもねえ。しかしだとすると……その犯行声明をした奴をと捕まえるしかないな」

「はい。振り出しに戻ってしまいました」

途方に暮れる二人。しかしマリーには秘策があった。いや、こうなる事を事前に予測していたのだから、打開策を練っておくくらいは当然の事。

「だからこそ、私たちはあれを取り戻さなければならない。あの……世界を変えてしまう力を。ゼン君、手伝ってくれるよね？」

「……仕方がねえ」

煙草に火をつけ、微笑んだ。

「それが仕事だからな」

「うん、期待してる。それじゃあまずは——出来る事から始めないと」

決意を宿したマリーの眼差し。

理由は知らずとも、それには手を貸してやりたいとゼンは思う。

それは一生懸命に生きている人間に対する賞賛なのか、それとも……。

未だに振り切れない過去から逃げるように、ひたすらに進もうと努力するマリーの様子に、自分と同じ物を感じ取ったのか。

「行くぞ」

部屋を後にするゼン。戻れないのならば、もう戻りたいとは願わない。

その夢の終わりを踏みつけ、男は静かに歩き出した。

「――で」

ＯＺ社ビル。

ＦＲＥＳのほぼ反対側に位置する場所に聳え立つこの街の二つの力の象徴。そのうちの一つがボクたちの目の前にあった。

ひたすらに長い階段、その向こう側にＯＺの入り口が見える。行き交うサラリーマン風の人々の中、ボクラ三人は異様に浮いているように見えた。

「さ、入るわよ」

「ちょっとストップ！！　な、なんでＯＺなの！？　ＦＲＥＳと敵対している会社じゃないっ！！　まさかボクたちを売り払うつもりなんじゃ……」

「身の安全は保障するわもつ……保障します」

レヴィが何やら物凄く冷たい目でイクスを見ているのに気づき、ボクラは手を取り合って仲良しムードを演出する。　そうでなきゃ彼女が死ぬ。

「理由は単純明快よ。　ＦＲＥＳはＲＥＶを使って悪い事をしようとしているの。　それから匿うのなら、同じ力を持つＯＺは最適でしょ？　それにＲＥＶを調べるには相当な施設が必要なの。　ＦＲＥＳに行く以外、状況を打開するにはここしかないわ」

確かにイクスの言っている事は尤もだと思う。　けれどＯＺに対してボクはいい印象を持っていないし、イクスの事も信用できなかったわけではない。

ちらりとレヴィを振り返ると、彼女はボクの言葉を待っているように見えた。じつと、ボクを見つめて黙り込んでいる。彼女は指示を待っているんだ。きっとそう……マスターであるボクの。

「……………レヴィ」

「はい」

「これからもしかしたら危ない事になるかも知れない。それでも構わないかな？」

「…………それは、私の台詞です。宜しいのですか、マスター？」

「うん」

頷く。出来る限り前向きに、憂いを払うように。

「約束したからね。君を人間にする手伝いをするって。残念だけれとボクと一緒に居たところで君にしてあげられる事なんてない。状況を変えなきゃいけないんだ」

そう、ボクに出来る事なんてない。だから専門の人間に任せるのが一番なんだ。そんなのはとても当たり前前の事だ。

それでも彼女が心配で、傍についてあげたいと思うのは、突き放すように見捨てる自分自身が嫌だからなのか、それとも本当に彼女のマスターになったつもりで居るのか。

どちらにせよ馬鹿馬鹿しい事だ。彼女のマスター『ウラ』はボクではなく、そして彼女もまた『ボク』ではない。だから全ては自己満足。ここに居ても意味なんかないボクの我侭だ。それでも

「——はい。　ウラがそう言うのであれば、私はどこまでも付いて行きます」

彼女がそう無邪気に笑うから。　もしかしたらボクがここに居る意味もほんの少しだけ在るのかも知れないと、期待してしまう。

「ふうん……？」

「な、なんだよ」

「べつつにい？　ま、ともかくマスターの承認も得られたんだし、入るわよ？　大丈夫、期待は裏切らないわ」

にやにやしながら先に歩いていくイクスを追い、歩き出す。

振り返ればレヴィは何も考えず、安心した様子でボクの後ろを歩いている。

その無邪気すぎる、無防備すぎる表情の正体がボクに対する信頼である事に気づいた時、ボクは少しだけ自分が情けなくなった。

「急ごう、レヴィ！」

手を取り駆け出す。

そうだ、今自分に出来る事をしよう。　自分が彼女に必要とされているのならば、せめて。

それが例え、偽りのマスターだったとしても……。

何故あの時――。

そう考える事がある。

自分の行動や周囲の境遇、それらが巻き起こす偶然に理由や意義を求めてもそれはきつと意味のない事なのに。

それでも何故、どうしてとただ理由を求め、そこに自分の感情を押し付けたいと考える時がある。

例えばじいさんと一緒に暮らした日々の中、遠く見上げた作り物の空や、薄く街にかかる靄。その向こう側へ行きたいと願った日々。そしてその為の努力を惜しまず、いつかは必ず越えられるのだと信じていた日々。

何故、どうしてそうしてしまったのかと。いつ、いつか、それが忘れられるのだろうか。ただただ、そこに理由を求めたくなるあの日、じいさんの買出しで待ちに出たボクがレヴィと出会ったのは何故？

降り注ぐ残骸と人の死の匂いの向こう、きらきらと輝いて朽ち果てた世界のカケラの上、彼女は立っていた。

美しかった。見惚れてしまった。そんな場合ではないのだと、あの時ボクは判っていたのに。

恐ろしい力を持つレヴィ。それを受け入れたのは何故？ 彼女がボクをマスターと呼ぶのは何故？

何故出会い、そしていつ別れるのだろうか。そんな疑問を心に浮かべると痛む胸のその向こう、自分の本心が扉を叩いているような気がした。

「君達が出会ったのは偶然などではないよ」

聞こえた声は胸にすつと染み込んだ。

「これは偶然などではなく、運命だった。仕組まれた必然と言い換えてもいい。ともかくこれは起こるべくして起きた出会いだよ」

OZの社長室。 とんでもなく広い空間の向こう側、広がる夜景を背に彼はそう言った。

意味や理由を求める事はそれこそ意味のないことだと判っていて

それでも、ボクは――。

REV・6

オズワルド・ピースメーカー。

OZ社と言う巨大すぎる組織の頂点に君臨し、あらゆる組織に強い影響力を持つ、事実上この街を牛耳る人間の一人。

年齢は三十二。容姿端麗という言葉がぴったりに感じられる、美しく整った顔立ちをしている。細身の長身で、白いタキシードを身に纏った男は客人であるボクらの前に立つと、腕を組んで静かに微笑んだ。

「改めて始めまして、ウラ君。 いや、僕と君は初対面ではあるが全く認識が無いわけでもない……かな？」

にこやかなその対応にどう応えたらいいのかよくわからなかった。彼はどうやらボクがトレジャーで稼いでいる事を知っているらしい。というか、OZからも随分色々な仕事を引き受けたのだから、知られていてもおかしくはない。

ただ、まさか社長がそれを知っているとは思って居なかったわけ。
だからボクは曖昧に言葉を濁し、軽く会釈を返した。

この部屋に入った直後、オズワルドはボクとレヴィの出会いのあらましを話すように命じた。その時は背を向けていたオズワルドから放たれる無言の威圧感に気圧され、ボクは淡々と全てを彼に語った。

勿論、自分にとって不利益な事はある程度伏せたつもりだ。それでも彼は全てお見通しだったらしい。だというのに余裕のある態度でボクを見下ろしている様子を見ると、何となくいい気はしなかった。

何もかもお見通し……。そんな風に翡翠の瞳が語っている気がして。大人だと意識すればするほど、何となく目を合わせらなくなる。

「行き成り根掘り葉掘り聞いてしまつてすまなかつたね。だが、お互いが状況をどう認識しているのかを理解するのは必要な事だ。許してくれたまえ」

「……判つてますよ、言われなくなつて。それで、さっきの言葉はどういう意味なんですか？」

彼は先程こう言った。ボクたちの出会いは偶然などではなく、運命だったのだと。

その言葉の向こうに不吉な物を感じたのは恐らくボクだけではないだろう。レヴィもまた、警戒するようにボクの傍らに立ちオズワルドを見据える。

「そう怖い顔をしないでくれないかい？ 仕方の無い事だ、君達二人はREVという存在について何も理解していないのだから」

「……だつたら早く教えてくださいよ。もったいぶつても意味ないでしょ」

余りにも上から目線の態度にカチンと来る。けれど彼にとってはこれが普通の態度なのだろう。当然だ、OZ社の社長オズワルド・ピースメーカーなのだ。悪気が無い事も判っているが、思わず噛み付かずにはいらなかった。

「ふふ、まあその通りだね。では単刀直入に言おう。REVとは——この世界を変え得る存在だ」

「抽象的過ぎて意味が判らない」

「確かに。だが、それ以外に適切な言葉は存在しないだろうね。そうだな……ウラ君、君は包丁で料理をした事があるかい？」

「馬鹿にしないでください。それくらいありますよ」

「結構。ではウラ君、包丁とは何だね？」

料理に使う道具。それは判っている。ただボクが即答出来なかったのは、恐らく彼の意図に気づいてしまったから。

そしてボクがそれにすぐ気づいた事を彼も理解していた。薄く微笑みを浮かべながら、彼はレヴィの肩を叩く。

「包丁は調理に使う道具だ。だが使い方を変えれば凶器にもなる。包丁でも人は殺せる。本来の目的とそぐわない効果も、同時に持ちえてしまうものなのだよ。道具という物はね」

「レヴィがそうだって言いたいんですか」

「彼女はとても強い力を持っている。それは『兵器』と呼ぶに相応しいだろうね。巨大な機動兵器ですら蹂躪するその力は、確かに凶器になり得る。しかし彼女——REVという存在は様々な目的を遂行するために存在する『道具』だ。兵器としての能力はその一部に過ぎない」

それはボクも薄々気づいていた。レヴィは兵器というには余りにも無駄が多すぎる。

感情を所持し、人間と変わらない生活を送る事が出来る生体構造。

物を知らず、本当の持ち主さえわからない巨大な力。それを兵器と呼ぶには余りにも不完全すぎる。

殺戮の力は一步間違えれば自分にさえ向きかねない。だから人は常にその力を完璧に、間違いが無いように生み出してきた。銃に泣き笑う機能なんていらないし、暴発するようには作らない。当然の事だ。

「彼女はレヴィアंकローという名の一つの媒体だよ。本当のREVの力は、彼女に内包されている。レヴィアंकローという驚異的戦闘能力を持つボディのその向こう側にこそ、真に驚異的なものが眠っているのだ」

「……………その、眠っている物っていうのは？」

「それはわからない」

堂々と言い切ったオズワルドの言葉に、ボクは一瞬理解が追いつかなかった。

「それを暴く為にウラ君を連れてきたのだろう……と、イクスは説

明しなかったのかね？」

ボクとレヴィとオズワルド、三人の視線がイクスに向けられる。
問題の本人は口笛を吹きながら窓の向こうに広がる摩天楼を見下ろしている。

「……ボクラ、イクスがレヴィを人間にする方法を知ってるっていうからついてきたんだけど」

「……………そうなのかい？ 弱ったな……。イクス？」

「し、仕方ないでしょっ！！ 知らないなんて言ったらあたしは今ここに居ないわよ！ 変わりにウラの集合住宅地の前にとつても若くて美人な女の首が一個ごろりと転がってた事でしょーうね！ あーあーあーあたしは悪くない、悪くないもんねーっ！！」

まあ、確かに彼女の言い分も一理ある……。レヴィが怒って彼女に飛び掛るかと思いきや、むしろシヨックの方が大きいのか俯いて溜息を零していた。おめでとう、生きながらえたねイクス。

「やれやれ……。まあ、兎に角そういう事だ。ウラ君、レヴィアंकロウの中に何があるのか調べてくれないかね？」

「ええっ！？ レヴィの中にあるもの……！？」

振り返ってレヴィを見る。身を隠す為に羽織っていたボロ布を脱ぎ、今は小脇に抱えたその姿をもう一度よく認識する。

とても綺麗な、作り物みたいな顔だった。いや、作り物だけど。

とにかく無邪気な、何の敵意も感じられない純粋な瞳がボクを見つめ返している。

その、向こう側にある物……って、何だ？ レヴィを調べる？ 何をどうやって？

何やら色々な想像が脳裏を駆け巡り、それらを振り払うように頭を振る。とにかく結論は一つだけだ。

「無理っ！！ そ、そういうのはあんたたちがやればいいだろ！？」

「何故だい？ マスターである君がやるのは当然だと思うが……。それに君の腕前は重々承知しているしね」

「そういう問題じゃない！ もっとこう……モラル的な問題がっ！！」

両手をブンブン振っていると、レヴィは目を真ん丸くしていた。まるで小動物みたいなその視線はボクを逆に駆け立てる。ああ、イクスが何か遠くで笑ってるけど気にしない。

「しかし、構わないのかい？ レヴィアंकロウの中身を、その全てを、僕たちが覗いてしまっても」

「うぐっ」

ボクの言葉を待つように静まり返る空気。パニック状態の頭で考えられる事は余りにも少ない。レヴィに嫌われたくないとか、どうしようもない想像ばかりが頭の裏側を駆け巡って行く。

いや、何を考えているんだボクは。ただのロボットだぞこいつは。うん、ロボットだ。別になんてことないごく普通のデータの閲覧

——？

そこまで考えてボクは冷静さを取り戻した。レヴィの背後に立ち、失礼ながら全身を指を這わせる。

「う、ウラ？」

「……………あつた」

それはレヴィのうなじ、髪の毛の向こう側に隠れていた。

特殊な形式ではあるが間違いない。レヴィアंकロウ内部のREVデータにアクセスするための情報端子——。つまり、穴が開いていたのである。

当たり前だ。ロボットのデータを解析するのだから当然どこかしらにインポート出来るに決まっている。何を考えて焦っていたんだ、ボクは……。

「レヴィ……こんなところに穴開いてるのなら早めに言おうよ」

「ですがそこは私の大事な穴なので余り人には知られたくないというか……」

「ふーん、結構普通に穴開いてるんだ。じゃああんたは今からレヴィの大事な穴に接続するわけね」

「大事って言われても接続しないと始まらないだろ。でも特殊みたいだし、慎重に入れないと危険かな」

「……………や、優しくしてくださいね？」

何だこの会話。

REVの解析は別室で行われる事になった。

〇Z本社ビルともなればそうした研究施設も非常に充実していて、街の隅っこのおんぼろ工房で仕事をしているボクにしてみれば涙が出そうなくらい素晴らしい空間だった。

人払いを済ませたその場所で、背中を肌蹴たレヴィを椅子に座らせ、ボクは巨大なパソコンの前に座っていた。

指をこきこき鳴らしながらレヴィを見ると、どうにも意識が朦朧としている。あれからよく確かめてみると、レヴィの背中には合計六個のインポート部分が存在する事が発覚し、今はそこに全て改造したケーブルを接続している状態にある。

オズワルドとイクスはボクの背後にたち、まじまじと画面を見詰めている。あまりじろじろ見られるのはいい気分ではなかったが、興味があるのも理解できる。

「——それじゃあ始めますよ」

気持ちを切り替え、操作に集中する。

レヴィアंकロウの内部に閉じ込められたデータを閲覧するにはいくつが特殊なプロセスが必要らしい。幾重にも重ねられた彼女の防護壁は易々と侵入者を内部に入れようとはしない。

「わかるかね、ウラ君？」

「——って言われても……なんですかこれ」

画面にびっしりと現れたのは見た事のない文字だった。

街で使われている文字も言語も共通の物で種類はないし、プログラム言語も一応新旧知り尽くしている積もりのボクがまるで理解出来ない謎の文字。思わず手が止まり、レヴィを見る。

「これ、F R E S が作ったんですかね……」

「既存のデータに該当するものは存在しない。 解読は至難か……」

「いや、ちよつと待ってください」

しばらく画面とにらめっこをしていたボクの手が動き出す。 スラ
スラとは行かないまでも、ボクにはその文字達の語りかけてくる意
図が何故か理解出来た。

つい先程まで『まるで理解出来ない謎の文字』だった物たちは気づ
けばボクにとって馴染み深い存在になっていた。 まるでずっと昔
からそれを知っていたかのように。 そうなれば手は止まらない。
戸惑いはある。 背後の二人はどよめいてすらいた。 ボクだって
驚いている、十分すぎる程に。 でもそれよりももっと強く、ボク
の心が叫んでいるのだ。

もつと彼女の奥深くへ行かねばならないという本能的な衝動。 そ
れを知ることが自分の義務であるかのように感じた。 驚きと操作
の連続の中、ボクは自分以外の存在の事なんてすっかり忘れ、彼女
の存在に没頭した。

レヴィアंकロウの内部はまるで海だ。 底の見えない暗闇のよう
でいて、そこに満たされている物には全て意味がある。 少しずつ
壁を潜り抜けていくうちに、その全様が徐々に明らかになる。

「——データベースだ」

「データベース？」

「うん。 レヴィの中には、REVファイルっていうものがいくつ
かあって……それら全てが何かを記録した膨大な容量のデータベ
ースになってるんだ」

「……データベースか。閲覧は出来ないのかね？」

「ちょっと待ってください……。最後のロックで引っかかって……」

あと一つ、門を潜ればレヴィの全てを知る事が出来る。

だというのに、彼女はボクを拒絶する。最後の扉の前に、記された言葉。ボクはそれを見て思わず躊躇した。

「……………『REVの帰るべき場所を知っているか？』」

文字を読み上げたのはイクスだった。そう、その文字だけは謎の文字ではなく文字が読めさえすればどんな人間にも理解できる単純なメッセージだったのだ。

だからこそ逆に理解出来なくなる。まるでそれは誰かがレヴィの中に後付けしたメッセージのような気がしたからだ。そしてそのロックこそ、あらゆるロックよりも難解であり、レヴィアंकロウという存在の根本を闇の中に落としていた。

答えは当然わからなかった。無理矢理こじ開けようとするのも気が引けた。今までのロックも全て、ボクは無理矢理開きはしなかった。

全てが読めない文字で記された『質問』だった。その『問い』にボクは『答え』るだけ。だから別にハッキングしたわけではない。質問に答えただけだ。

判りやすく言えば合言葉だろうか。それは余計に頭を掻き乱すが、とにかくそうとしか言い様がない。それはずっと前から約束していたかのように、ボクの記憶の中にあつた意味の判らない文字の羅列。

訳がわからずともここまではそれで何とかやってくる事が出来た。

しかしこの、当たり前前の言語の当たり前前の質問だけは、どうして

も答えが閃かない。

「帰るべき、場所……」

彼女が生まれた場所、という意味だろうか。　だとしたらF R E Sの工場？　考えても答えは見つからない。　ただ焦りだけが積もっていく。

「駄目だ、判らない……。　一度中断して、レヴィに答えを聞きだす必要があるかもしれない」

どうやらR E Vファイルにアクセスしている間、彼女は意識が飛んでいるらしい。　今も瞳に何も映さないまま、ぼーっと床を眺めている。

ここまで来て引き返すのはかなり癪だが仕方がない。　三十七のフロセスを巻き戻し、レヴィへの接続を解除した。

「レヴィ！　起きてくれ！　ちょっと聞きたい事があるんだけど……」

「ちょっと、そんなに慌てる必要はないでしょ？　レヴィだって頭の中ごちゃごちゃされて疲れてるかも知れないし」

思わずレヴィの肩を掴んだボクの手をイクスが掴む。　確かにイクスの言うことは正しいかもしれない。　でもボクは……。

「……いや、イクスの言う通りだ。　レヴィ、起きて。　大丈夫？」

「は、い……。　何か、判りましたか……？」

「ごめん、はつきりとしたことは何も……」

「そう、ですか。 お役に立てずに……申し訳ありません」

本当に悪びれた、寂しげな横顔に思わずボクは微笑を零しながら視線を逸らしていた。

「役に立たなかったのは、君じゃないよ……」

「え？」

「少し休憩にしよう。 何か飲み物でも買って来る」

返事を聞かずに研究室の外に出ると深く息を吐き出した。

広く、どこまでも広がるような気がする白い廊下。 その脇にある休憩所のベンチに腰掛け、思わず頭を抱えた。

何故？ という思いだけが胸を締め付ける。 何故あの最後の質問だけ答えられなかったのだろうか。 あのたった一つの問いが、心を惑わせる。

それまでのパスはまるで準備されていたかのようにあっさりと解くことが出来た。 その時ボクは驚きながらも……興奮していたのかも知れない。

レヴィアंकロウという特別な存在の事を理解できるという不思議。 理由はわからない、でも……まるでその時ボクは、自分が本当に彼女のマスターであるような気がしていたのだ。

だというのに最後、当たり前すぎる質問に躓いてしまった。 それが判らなかった時、自分自身の存在を彼女に拒まれたような気がして。

寂しさとやりきれない思い、自分でも理解出来ないごちゃごちゃした感情を押し付けてレヴィに当たってしまうところだったと思うと、

本当に嫌気が差す。

役に立たなかったのはレヴィじゃない。

役立たずだったのは、ボクの方じゃないか……。

「こら、少年」

「うわあっ!？」

頬に急に冷たい何かが当てられて思わず飛び上がりそうになる。

背後で笑っていたのは、両手に缶ジュースを持ったイクスだった。

「飲み物買いに来たんじゃないの？」

「……うるさいなあ。ほつといてくれよ」

「そうは行かないわよ。お嬢さん、あんたの事心配してたわよ？」

お嬢さんにとってこの世界を判断する目はあんたしかないの。

あんたの感情にとっても感化されたやすいお嬢さんが不安になるのも仕方ないわね。あんたがそんな浮かない顔してるようじゃ」

「うるさいな……。判ってるよそんなこと」

レヴィはボクを全身全霊で信じている。信じてくれている。

だからボクの判断に従い、ボクの言葉に従い、ボクの感情に従う。

彼女にとって心を許せる存在がボクしか無いのであれば、当然その責任はボクにある。

マスターという言葉はとても重い。彼女のように強くて綺麗で、世界をどうこうするような力を持っているらしい存在の主がボクであるという事実は、余りにも重くボクの胸を締め付ける。

責任と重圧から逃れたいのか、それとも彼女の前を歩く自信がない

のか。恐らく両方だろうと思ったところで、考えるのを止めた。何となくこれ以上考え込んでも好転しない……そんな予感がしていたから。イクスから渡されたコーヒーを飲み干し、一息つく。

「……REVの帰るべき場所、か……」

「あら、判らないの？ あたしは判ったけど」

「えっ！？ ほっ、本当にっ！？」

「簡単な答えだけど……『他に選択肢もない』んだし。でもね少年、あんたはお嬢さんの所有者にでもなったつもり？」

あまりにストレートな質問に顔が熱くなるよりも先に全身の血の気が引いた気がした。

「ちょっとうまく行かないからって自己主張してさ。口で何だかんだ言っても、お嬢さんを自分の物だってしっかり認識してるんじゃない」

「……………っ」

心に浮かんだのは熱く燃え滾るような物ではなく、自分でも驚くほど静かに燦る怒りだった。

目の前のイクスに対するものも勿論ある。でも、何よりも憤るべきは……。

「……………っ！ だったら、あんたがあとはレヴィの面倒をみればいいだろっ！ ボクだって好きであんなやつ拾ったんじゃない！ マスターだなんだって言われたってピンと来ないし、そんな責任だって

取れない……！ 死にそんな目にももう二度も逢ってるっ！！ でも、仕方なく……皆が言うから仕方なくやってるのに……」

「皆が言うから仕方なく——ね。 だったら確かにあなたはマスターの資格ナシって所かしら。 男ならせめて、自分で選んで行動くらしい出来ないの？ 自分以外の場所に言い逃れを求めるのは余りにも幼いわ」

「あんたに何が判るんだよっ！！」

「判らないわね。 だってあんたは判って欲しいって口にしないじゃない。 本心隠してうだうだ悩んで自己嫌悪何てね、ガキの発想なのよ」

イクスの切れ長の瞳が強い力を帯びてボクを捉えている。 何か反論したいのに、ぐうの音も出ない。

腹が立つ。 悔しい。 でも、いう事はわかる。 判ってるんだ。

もうずっと前から。 でも性格なんだ。 直しようがないんだ。

そんなの、だって、仕方ないじゃないか。

レヴィが来てくれて楽しかったんだ。 あんな生活でもいいと思えたんだ。 役に立ちたいって、彼女を人間にしてあげたいって思ってたんだ。 でも、仕方ないじゃないか。 力がないんだ。 ボクには出来ないんだ。 こんな世界の半分を支配する会社の中で、その究極の研究室の中で、信じられないくらい膨大なデータを宿したレヴィと向き合い、そしてその後起きる全てに責任を取るなんて。

仕方ない、仕方が無いって、何度も自分に言い聞かせている自分がいて、また嫌な気分になる。 胸を張ってボクがレヴィのマスターだって言えないのが本当に悔しくて、不安で堪らない。

都合のいい好意に甘えているだけだって判っている。 理由も所以も意味もない、本当に都合のいい勘違い。 だから、ボクは——。

「別にいくらうじうじしても構わないけどね、お嬢さんの前では毅然としていなさい。それがあんたを信じている彼女へのせめてもの礼儀……当然のマナーよ」

突然ボクの肩を抱き、イクスは悪戯っぽく笑う。先程までの鋭く射抜くような視線とは違い、優しく嗜めるような、そんな眼差しだった。

「出来る事と出来ない事があるわ。でも関係ないの。それは『やった』人間が論ずるべき事よ。子供は子供らしく、がむしゃらにやりたい事をやって。それから大人になって後悔しなさい」

「結局後悔するのかよ……」

「後悔しない人間なんて居ないわ。誰だって例外じゃない。勿論あたしだってそうよ。だから今は後悔しないよう、良いと思つた事は全部やる事にしてるの。多少無茶でも無謀でもね。それを後で振り返れば笑っちゃうかも知れないけど、少なくとも後悔はしない。やるだけやったらスッキリする……そういうもんよ」

イクスはボクを励ましているのだろうか？ それとも叱っているのだろうか？

多分両方だと思つた。

だからボクは黙って頷き、自分の手のひらを見つめる。

「良いと思つた事は全部やる、か……」

「納得する必要はないわ。そのわだかまりを抱えたままでいい。だからまず、やれる事をやり尽くしなさい。そうすればまた、

やるべき事が見えてくるわ」

腕を放し、背を向け去っていくイクス。甘い香りが遠ざかり、ヒールの音を高らかに鳴らしながら去っていく。

その背中に聞こえないように、本当に小さな声でボクはお礼の言葉を呟いた。彼女は足を止めず、軽く手を振り替えてそれに応えた。

地獄耳だと思った。でも聞こえないよりは聞こえた方がまし――。

そんな馬鹿げた事を考えていた。

今自分に出来る事を一先ずやる。それから考える。当たり前的事だ、そうでなきゃ考えるだけで前に進まないのだから。

「――よし」

休憩は十分だ。すぐに続きに取り掛かろう――。そう考えた時だった。

凄まじい轟音と共に衝撃がビル全体を襲う。よろけるほどではないものの、びりびりと伝わってくる振動はその衝撃の大きさを物語っていた。

「な、なんだ!？」

慌てて窓辺に近づくと、窓の向こうのすぐ傍をFRESの戦闘ヘリコプターが飛んでいくのが見えた。

見下ろす大地全てを埋め尽くすような機動兵器の数々。完全にOZ社ビルを取り囲むその大軍隊の先頭、真っ赤なバイクが突っ込んでくる。

OZ社のバリケードを突破して強引にロビーにバイクが突っ込んでくると同時に、再び大きな衝撃がビルを駆け巡った。

「……あれは、まさか」

ボクの足は自然とエレベータに向けられていた。目指す先はバイクが突っ込んだロビー。ボクはある一つの確信めいた予感を持ってその場所に向かう。

何故、どうしてと。ただその意味や理由を問いながら、目の前に迫る奇跡に胸が躍る。

もう何年も前、ボクはロケットを打ち上げたかった。空に、ロケットを。

エレベータから飛び出し、ボクが目にしたのは燃え盛るロビーとその向こうに光る機動兵器の瞳。

そしてその先陣を切り突入してきた真紅のバイクに跨る一人の男の姿。

タイヤの焦げる匂いと溢れ返る熱の中、ボクはその人に声を掛けた。

「——ゼン兄ちゃんっ!!」

視線が変わる。

そう、ボクは何年も前に、ロケットを打ち上げたかったんだ。

その頃は一人きりじゃなくて。だから、傍らにはあの人がいた。無邪気な笑顔と強引さでいつもボクを引っ張ってくれた家族——。

「……ウラ、なのか？」

この出会いも偶然でないというのならば。

では一体、誰に仕組まれた運命なのだろうか——。

燃え盛る炎の中、ボクらは黙ってお互いを見詰め合っていた。

それが、悲しい再会である事も知らずに。

「——いつかぶち破って、行ってやろうぜ。くすんだ空を見上げるのには、もう飽きちまった」

そう言っただ空に手を伸ばす彼の姿は、子供心にとってもかつこよくボクの瞳に映りこんだ。

勿論、それは今でも変わらない。世界のどん底、ゴミ山の頂点に立って、作り物の空に手を伸ばす汚らしい外見の子供。今冷静に考えればそれ以上でも以下でもないはずなのに、今でも思い返すと胸を熱くする色あせない景色。

その傍ら、ボクはただその人が語る世界の理想に惹かれていた。想像以上に白い歯を見せて笑うまぶしい笑顔が、何よりもボクの背中を押すのだ。

「行こうぜ、ウラ。デッカイ事やってよ、そして探すんだ。俺たちの本物の家族って奴を！」

差し伸べられた手を取り、ボクは強く頷いた。何度も、何度も頷いた。

本物という事場に魅了されていたのかも知れない。本物の空、本物の家族、本物の友達——。本当の世界。真実の世界。目には見えない向こう側へ。

夢だった。ここじゃないどこかならどこでも良かったのかも知れない。それでも掛け替えのない、大切な夢だった。

生きていく目安、そして希望。何よりもその夢を共有する誰かが居るという事が、自分の存在を肯定していた。

きらきら輝く無邪気な笑顔を浮かべてその夢物語へボクを誘った人が今、ボクの目の前に居る――。

「……ウラ、なのか？」

声を聞いた瞬間心の中から様々な感情が溢れ出し、言葉にならない想いで胸が張り裂けそうになった。

ずっとずっと探していたのだ。もう一度出会う事がもしも出来たなら、何て声をかけよう？ いつも考えていた自分の胸にぽっかりと穴を開けてしまった原因。そしてあの日、ボクの心のその穴を埋めてくれた人。

「そうだよ……。ボクだよ、ゼン兄ちゃんっ！！」

バイクを降りた『兄ちゃん』は驚きを表情に浮かべながら近づいてくる。ボクもあまりの嬉しさに前に飛び出そうと一歩踏み出した。その二人の間を引き裂くように、兄ちゃんの後ろから飛び出てきた二機のマンイーターがボクの行く手を塞ぐ。そうしてボクは再び現実とご対面する事になった。

ロビーには沢山の死体が転がっていた。数え切れないそれらはばらばらに碎け散り、血と肉片――死の匂いが満ちている。

マンイーターの無機質なカメラがボクをじっと見つめている。白いボディの合間から除く金属が軋む音がして、思わず一歩後ろに下がる。

ようやく止まっていた時を動かそうと踏み出した一歩が引つ込んだ時、燃え盛る炎を背に立つ彼の姿が幻にさえ見えた。だが、それは紛れも無い現実で。

「どうということ……？ どうなってるの、ゼン兄ちゃん？」

「お前の方こそ……どうしてここにいるんだ!？」

答える間も無い内にマンイーターの口から機銃が飛び出し、銃口がボクに向けられる。

叫ぶ間も無く息絶える――。そんな予知染みた自分の死の鮮明なイメージが脳裏を過ぎった時、兄ちゃんはボクをかばおうと確かに前に飛び出そうとしていた。

それを見てほっとしたような……ああ、変わらないなあ、なんて思いながら……ゆつくりと死の瞬間から目を逸らさず、ボクは開いた瞳を閉じる事はしなかった。

そうだ。あの時も確か、こんな風に燃え盛るステージの上で……血と油の匂いの中、吐き気を抑えて見ていたっけ。

死を覚悟した瞬間、脳裏に過ぎったのはレヴィの姿だった。何故か後姿で、その表情を窺い知る事は出来ない。

最後くらい笑顔を見せてくれたっていいだろうに――。そんな風に考えるボクは、何故最後に彼女の後姿が見えたのか、その理由を直後理解する。

引き絞られた矢が放たれるように、レヴィは廊下を一瞬で駆け抜けて空を舞っていた。大きな跳躍と同時に回転しながらマンイーターに迫り、機銃ごと首を刎ね飛ばす。

ぶちぶちと音を立てて引きちぎられるマンイーターの首の人工筋肉からオイルが噴出すその刹那、目には見えずともレヴィの表情を知る事が出来た気がした。

まるで返り血のような真っ赤な熱いオイルを全身に浴びるレヴィは。ボクの目の前に立つ彼女は。

「――何をしているのですか、貴方たちは」

大気が軋るような音を聞いた気がした。

握り締めたマンイーターの機銃がべきりと押し折れ、間拔けな音と

共に大地に落ちる。

もう止められない。　ただ、そんな気がしていた。

REV・7

神様はどうしてレヴィを人の形にしたのだろう。

その細い腕は重く硬い金属の塊を易々と捻じ切り、押し折り、刎ね飛ばす。武器を持つでもなく、ただの素手だというのに。時には鋭利な刃のように、時には重みのある鉄槌のように、彼女の腕は敵と認識した物を薙ぎ払う。

命があるか無いかさえ関係なく、有象無象を破壊し尽くす恐ろしい殺戮兵器。　オズワルド・ピースメーカーは、道具は使い様だと言った。でも、この景色を見てもまだ同じ事が言えるだろうか。

マスターであるボクが尻餅をついている間に、彼女の足は鋭くマンイーターの胴体に突き刺さる。千切っては投げ、千切っては投げといった様子で沢山あるマンイーターの足を引き千切り、彼女は白いドレスを赤に染め上げながら感情のない瞳で炎の中立ち尽くしていた。

時間が停止したわけではない。その恐ろしくも美しい情景に、誰も言葉が出なくなっていただけ。レヴィアंकロウという一つの道具が見せた、道具であるが故に非現実的な美しさは強くボクらを打ちのめす。

「——化け物、か……っ」

その閉ざされた時間を巻き戻したのはゼン兄ちゃんだった。その唇から零れ落ちた一言がレヴィを再び動かし、その視線が兄ちゃん

に向けられる。

きりきりと、レヴィの首が軋む音が聞こえた。確かに聞こえたのだ。彼女はボクという時、とても兵器であるなんて信じられないくらい、『人間そのもの』に見えた。

でも違う。まざまざと見せ付けられる。今の彼女は人間ではなかった。道具——ただの兵器。首が軋む音なんて本当は聞こえない。でもボクには確かに聞こえた。人形の首が回る、きりきりという音が。確かに聞こえたのだ。

「兄ちゃん、逃げて——っ！！！！」

止められない。止められるわけがない。

近づく物全て滅ぼすまで満足しない彼女の破壊の両手。千切ったマインターの腕を鈍器のように振り上げ、薙ぎ払うようにゼン兄ちゃんに叩き付ける——！

一瞬の出来事だった。ゼン兄ちゃんはその攻撃に反応し、腕を十字に構えて衝撃に供える。でもそんなの意味がない——！

「ぐっつ！？」

巨大な鉄の塊を叩き付けられれば誰だって吹き飛ばされる。ボクの頭上すれすれを空を切るような音と共に払われた一撃は大の男であるゼン兄ちゃんの身体を易々とビルの外に吹き飛ばし、バイクは木っ端微塵に破壊してしまった。

一撃でそんな事になる。重機だってそうは行かないのに、小柄な少女一人がそれをやったのだ。異常であると認識せざるを得ない。そう、こいつは——おかしいんだ。

「やめろレヴィッ！！ 何で兄ちゃんを傷つけるんだよおっ！！」

「ウラ、あれは敵です。マスターに銃を向けた危険因子です。排除しなければならいんです」

「何で殺すんだよ!? そんな必要は無いっていつてるだろ!? 本当にマスターだって言うなら、ボクのいう事を聞けよオツ!!」

炎の中、レヴィは振り返った。少しでも寂しげなその表情は、オイルを浴びながらも美しく、不変的なその可憐さは逆に人間らしくないように感じた。

彼女は何も言わずに飛び出していく。ビルの向こう側に並ぶ兵士や兵器を駆逐するために。マスターである、ボクの静止を無視して。

「そうだ……兄ちゃんを助けなきゃ。ゼン兄ちゃん……二回も死ぬなんて……そんなのないよね……?」

よろめきながら立ち上がる。でも、これからどうしろって言うんだ? 目の前に広がるのは本物の戦場——。力を持たないボクに何が出来る?

顔にかかったマンイーターのオイルを拭い、考える。銃声と悲鳴の中、死屍累々を前に考える。

どう考えたってあそこに突っ込んでみただの自殺行為だ。流れ弾に当たって死ぬかも知れない。でも、それでも、やっと会えたんだ。ゼン兄ちゃんに。

「謝らなくちゃならないのに……っ」

全身が震えていた。死というものを明確にイメージできたあの一瞬、恐怖と混乱は脳の回路を焼き切ってしまったのかもしれない。だから正常な思考が出来なくなる。頭を振り、全速力で駆け出し

た。目だけは逸らさず、朽ち果てていく機械同士の乱舞を見据えながら。

そうだ、まずやるんだ。無茶でも無謀でもまずやる。それから後で考えればいい。その無鉄砲さの所為で傷つけてしまった人を、もう一度救い出す為に。

自分の過去から、一步前に進む為に。

「うわあああああつー！」

恐怖のあまり声を上げながら一直線にゼン兄ちゃんの下へ。

出入り口の向こう側、長くそして左右に広がる巨大な階段の上、ゼン兄ちゃんは吹き飛ばされていった。下り階段の為様子は見えなかったが、どの辺りに落ちたのかは推測出来る。

外に出ると無数の機動兵器をレヴィが薙ぎ倒していくのが見えた。

そして飛び出したボクの姿は、彼女にも見えたはずだから。

それを利用する。罪悪感はない。彼女はボクが無防備に進みだした事を知れば、理解はせずとも直ぐに追ってくる。

「——マスターツ！？何をっ！？」

そう。ボクを助けに。ボクの道を切り開きに——。

駆け寄るレヴィへ、それからその視線の先に居るボクへと銃口を向けるマンイーターたち。火を噴く銃口が耳の直ぐ傍で劈くような轟音を上げる。

悲鳴を上げたかった。それでもよるけながらボクは進む。足を止めたら本当に死んでしまう。足元のコンクリートが爆薬で吹き飛ばされても、ボクは止まらない。

近づく敵はレヴィが駆除する。振り返らない。彼女はついてきている。本当に邪魔な敵を倒してくれる。そう、信じている。言う事を聞かないなら、言う事を聞かなくちゃいけない状況を作っ

てやればいい。あとで何を言われようが構わない。
ボクに付いて来い、レヴィアンクロウ——！

「ゼン兄ちゃああああんっ——！」

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い。

死にたくない。でも、死んだような人生をずっと送るよりはずっとずっと、マシなんだ——！

階段を三個飛ばしで駆け下り、一直線に彼の元へ。周囲に立ちふさがる装甲服を着た兵士たち。考えるよりも早くボクは振り上げた手を敵に向けていた。

命じるよりも早く、想いに反応するかのようにレヴィは前に飛び出した。放たれる無数の銃弾を受け尚健在。敵兵から奪ったアサルトライフルを両手に携え、前線を押し上げる。

盾となり、そして機銃となったレヴィの背後、吐き出される薬莖の雨の中屈んで兄ちゃんの傍に駆け寄る。血を流す兄ちゃんは気を失っているようで、しかし命に別状はないように思えた。

即死級の衝撃を受け、彼が命を取り留めた理由。それはその両腕が——。

「マスター、もう持ちません——！」

レヴィの叫び声にはつとずる。周囲はマシーターに囲まれ、逃げ場もない。次々と向けられる銃口から、四方八方の死の嵐から、レヴィはもうボクを守りきれないだろう。

やはり無謀だった。それでも得る物が無かったわけではない。真っ直ぐにレヴィを見据えると、彼女はおもむろにボクをしっかりと抱きしめた。

直後、跳躍——。そらに向かって放たれた矢のように、レヴィはボクを抱えたままビル之窗目掛けて突っ込んだ。

同時にどこから放たれた煙幕弾が敵陣の中で炸裂し、追っ手の声はない。ボクらはそれを確認し、すぐに研究室を目指した。

研究室の前にはオズワルドが待っていた。余りにも激しすぎる運動直後の所為で息切れし、心臓が張り裂けそうだった。オズワルドがボクたちに何か言っていたが、そんなものは耳に届かなかった。

「レヴィアंकロー……ッ」

目を丸くするレヴィの胸倉を掴み、壁に叩き付ける。怯えるように揺れる彼女の瞳を至近距離で睨み付けた。

「何で言う事を聞かないんだよ……っ！ あの人には敵じゃない。敵じゃないんだよ……」

「で、ですが……」

「知ったことかよオツ！！ 何で殺すんだ！？ 何でっ！？ それじゃあお前、ただの兵器じゃないか！ ただの化け物じゃないかっ！！」

こんな事を言っても仕方がない。レヴィは以前からこうだ。ずっとこうだ。

ボクの言葉は意味を成さない。ボクはマスターで、彼女に命令を下すべき存在のはずなのに。彼女が自分でそう言ったのに。彼女は言う事を聞かない。

全て殺して滅ぼして。そうやって何も無くなるまで馬の耳に念仏だ。ボクの声は届かない。届かないんだ。

どうしてお前はボクを否定するんだろう。人殺しなんかさせたくないのに。兵器としてなんか働かせたくないのに。ゼン兄ちゃんを傷つけさせたくないのに。

判ってるさ。　レヴィが来てくれなかったらボクは死んでいた。それでも。　誰かに罪を背負わせてまで生き延びるくらいなら――死んだ方がましだ。

「もう、ボクを助けるな……お前は」

突き放す。　小さく呟いて。

彼女は打ちひしがれるように肩を震わせていた。　泣いていたのかもしれない。　でも、ボクはそれをよく見ていなかった。

何とも言えない空気の中、壁に背を預けずるとその場に座り込む。　ここまで来てしまえばそうそう危険な目に逢うことはないだろう。

下ではまだ戦闘が続いているようだったが、ここは天下のOZ社。

侵入者対策など万全だ。　奇襲故に初動で遅れを取ったものの、すぐに巻き返す。

胸をぎゅっと押さえたまま黙り込むレヴィの指先からぽたりと血が床に落ちて、真っ白の廊下を赤く汚していく。　その手が傷だらけで、ボクを守る為に必死だったという事を強く訴えかけている。

そんなのは判っている。　鉄の塊を壊すような力で殴ったり蹴ったりしているんだ。　特に手は素手……怪我をしない方がおかしいだろう。

それでもボクは目を逸らす。　間違いも戸惑いも、はいそうですかと受け入れられない。

だからまたきつと後悔する。　あの時みたいにずっと、後悔し続ける。

ボクは――。

「久しぶりね、マリー・コンラッド」

「……………イクス」

遠くから聞こえる銃声は、しかし二人の耳には届かない。
OZ社の研究フロア、その廊下。二人は相対していた。ノート
パソコンを抱えるマリーと、巨大なライフルを携えたイクス。二
人の様相は対照的だったが、その瞳には同じ物を感じる。

「久しぶりね」

「ええ……。本当にあなただったなんて……………イクス」

数年ぶりの感動の再会——とは行かなかった。見詰め合う二人の
間にあるのは奇妙な緊張感。睨み合いと呼んでも構わないだろう。
銃を持つイクスが圧倒的に有利なこの状況下、マリーは一步も引き
下がろうとはしなかった。お互いに問いかけたい言葉が余りにも
多すぎた。

「君がREVを奪ったのね、イクス」

「あたしだけじゃないわ。沢山の人がREVの解き放たれる時を
待っている。REVを個人が所有するのは間違いだわ」

「大衆には使えない、理解出来ない力もあるよ。道具を正しく使
ってくれる人ばかりとは限らないから」

「それでも人は希望があるなら縋らずにはいられないわ。そのた
めならばどんな手段だって厭わない……。あたしだってね」

マンイーターの装甲さえ打ち抜く巨大な対戦車ライフルを構えるイクス。直線の通路で、そんなものが放たればマリーの命はない。しかしマリーは怯える事も無く、堂々とした態度で背を向ける。それは彼女なりの抵抗だったのかもしれない。

「脅しだと思うの？」

「アースは滅んだのよ、イクス」

「いいえ、滅ばないわ。『帰るべき場所』は『土地』でも『組織』でも、ましてや『時間』にも支配されない。その人が望む場所、そこにある物なの。あたし自信の胸の内にね」

「REVさえ私と君だったら、解き放つ事が出来たでしょう。何故FRESを……私を否定したの？」

「否定していたのはFRESの方よ、マリー。私たちは余りにも人を信じなさ過ぎた」

向けた銃を下ろしながら、イクスは首を横に振る。

マリーも……そしてイクスも、本当はこうなるとわかっていた。

殺しあう事は出来ない。たとえどんなに冷酷になったとしても。侵せないものは確かにある。

「次に会う時は容赦しないわ」

「……うん。 そうだね。 きっと、お互いに」

そうして二人は別れた。対戦車ライフルの弾等は煙幕弾——。レヴィとウラを救い出す為、彼女が銃に込めた弾丸。

マリーはきつとその中身を知らない。それでもイクスを信じていたのだろ。例え敵同士になっても。それでも。

「REVは……世界の希望なのよ。そうでしょう？ 父さん……母さん」

首から提げた金色のロケットを握り締め、イクスは目を閉じた。

気が付いたら世界の隅で、ボクは機械を弄っていた。

それが当たり前で、いつまでもそれが続くのだと信じていた。

見るべき夢もない薄暗い諦めが渦巻く世界の中で、穏やかに生きて死んでいくのを待つだけの命。ボクも例外なく、そうなるはずだった。

「お前、機械いじり上手だな」

じいさんは親代わりだった。じいさんはボクに沢山の事を教えてくれた。

人形みたいに何も見つめない硝子の瞳に、沢山の色を宿してくれた。毎日毎日同じように機械を弄る日々。そんなボクの世界を彩ってくれたのは、じいさんだけではなかった。

六歳年上のゼン兄ちゃん。いつもボロボロの服を着て、傷だらけの姿で。それでもいつでも、どんな時も笑っていた。

大人相手にも喧嘩して、気に入らない事は無理にでも通してしまう行動力。ボクはいつもそれが羨ましかった。

「じいさんに教えて貰ったんだろ？ あの小難しい話をよく聞いてられるよなあ」

明るくて元気が良くて、腕っ節は大人にも負けない。いつも毅然としていて、くすんだ世界の中で鮮やかさを失わない人。

初めて目にした時、ボクはそのまぶしさに思わず目を背けなくなつた。けれども傍でその暖かさに触れていると、少しずつその色が自分にも流れ込んでくる気がした。

「謙遜する事ないぜ。俺も小さい時から聞いてるけどさ、全然わかんねーもん。お前すげえよ。なあなあ、どうやってんの？教えてくれよ」

肩を並べて工房の隅、玩具みたいなガラクタを弄った日々。

あの頃は、工房にも沢山の人がいた。じいさん以外にも技術屋が沢山働いていて、ボクらはその人の隅、許された領土の中で生きていく事に必死だった。

彼の語る夢を信じ、そしてそれを叶えたいと願う頃。ずっと笑えなかったボクも、自然と一緒に笑顔を浮かべていた。

ゼン兄ちゃん――。

ずっと長い時間、一緒にロケットを打ち上げようって、誓い合った親友。そしてボクの兄貴分。

かつてボクが自分の手で失ってしまった人。そして今も、この胸に突き刺さりぬける事もなく痛みを分け与える記憶の破片。

もう一度出会えるのならば、この命を掛けて償うと誓った。その

誓いは決して容易いものなんかじゃない。

それでも、ボクは……。

REV・8

「ねえちよっと、ウラってば」

物思いに耽っていると、隣を歩いていたイクスに肩を小突かれた。OZ社ビルの地下にも、当然闇の空間は広がっている。頻繁にそこを利用しているというイクスの案内で、一先ずボクらはOZ社を後にした。

遠くで流れる水の音と靴音だけのBGMの世界に、イクスの声は必要以上に響き渡る。ボクらより後方、五メートルほどの距離を取り歩くレヴィはそれでも顔を上げず、俯いたままとぼとぼと歩いている。

「あんたたちどうしちゃったわけ？ あレヴィの様子、尋常な落ち込み方じゃないわよ……？」

「……知るかよ！ あんな女の事なんて！」

「気になってしょうがない癖にどうしてムキになるのかしらね。思春期ってホント不思議」

「うるさいなあ……。悪いけどもうあんたの挑発には一々動じない事にしたの」

「あら、可愛くないわね。でもまあ、これから行動を共にするんだし意思の疎通は必要だと思うけど？」

これから行動を共にする、か……。その言葉はボクにしてみれば考えどころだった。

結局ボクは役立たずだったし……。それに、レヴィはボクを受け入れない。あんな怪我をした兄ちゃんの事も気になるし、とにかくこのままじゃいけない。

いつも半歩後ろをくつついて歩いていたレヴィとの距離が遠ざかり、それが自分でそうしたものだと判っていてもやりきれない思いに包まれる。

「ほら、気になってる」

「……………イクスはボクに構いすぎだよ。 ショタコンなの？」

「あら失礼ね。 あたしは両刀よ」

「……………もうなんでもいいよ。 それよりイクス、どうしてボクたちについてくるの？」

「護衛は必要でしょ？ それにあたしが居た方が色々都合がいいのは間違いないわよ。 理由は想像にお任せするけど」

確かにイクスが居てくれた方がいい。 今レヴィと二人きりになったら、気まずいっただらありやしないだろうから。 そうしてボクらは何時間も無言で歩き続け、やがて裏路地のマンホールから地上に出た。 真夜中の街中の汚れた空気の中、息を付いて振り返る。

「イクス。 レヴィを任せてもいいかな」

「ん。 別に構わないわよ？ どうせ今日はどっかに隠れるしかないし……。 宿が見つかったら連絡するわ。 それに情報も仕入れておく」

今街はきつと様々な混乱に包まれているだろう。 お互いに敵対しつつも正面衝突だけは絶対にしなかったFRESとOZが今まさに抗争の真っ最中なのだから。

その混乱に乗じて……。 きつとそう考える。 ボクもそうだ。 だから、彼もきつと。

「ま、待ってください……！ ウラ一人でなんて、そんな……」

「ガキ扱いするな。この町の勝手は良く知ってる。生まれてからずっと生きてきた街だ……。お前とは、違う」

「はいはい、喧嘩しない喧嘩しない！ いいじゃないレヴィ、こいつなら大丈夫よ。闇商売して生きてきたんだもの。でもまあ……これ、貸したげる」

イクスに手渡されたのは小さな拳銃だった。黒く鈍く光沢する、重量感のある銃。それでも小さく、きつと生身の人間しか殺せないような玩具みたいな銃。それを手に取り、戸惑う。

「身を守る物は必要よ。今のあんたにも……。これからのあんたにもね」

「……うん。判った。借りとく」

ジャケットの内ポケット、工具などを入れるスペースにそれを仕舞い込む。重く、今も尚存在感を主張する殺人の道具。出来ればこんなものは、持ちたくないけれど。

レヴィは相変わらず納得が行かないのか、何かを言いかけて口を開いてはその言葉を飲み込み口を紡ぐという動作を何度も繰り返していた。それを見ないふりをしてボクは背を向ける。

「そんじゃ、頑張りなさいよ……少年」

「……うつさいよ、ばか」

折りたたんだ対戦車ライフルを掲げながら手を振るイクス。彼女の筋力がどうなっているのか若干気になったが、ボクはそれよりもその後ろで捨てられた子犬みたいな目でボクを見ているレヴィの方

が気に成っていた。

勿論気にする素振りなんてしない。　すぐに気持ちを切り替え、足は自然と駆け出していた。　きつとあの場所で待っている、彼の元へ急ぐ為に。

街が大変な事になっているというのに暢気な顔をして歩く人々を避けて走り、辿り着いたのは瓦礫の山。　かつて、ボクらが出会った場所だ。

そこであの日、ボクは山の陰でうずくまっていた。　打ち捨てられた夢の欠片と人が使い古した忘れられた物の向かい側、一人で歯車を手に取っていた。

そして彼はあの日、山の天辺から手を差し伸べ、笑いかけていた。

あの日と変わらないその場所に、ゼン兄ちゃんは座っていた。

「よう兄弟。　四年ぶりか」

「……………うん。　四年ぶり、ゼン兄ちゃん」

あの戦いの後、直接この場所に来て待っていたのだろう。　啞えた

煙草は小さくなり、今にも燃え尽きそうに燻っている。

上着のジャケットはレヴィの攻撃でボロボロで、その両腕から金属質が露出していた。

四年前のあの日、ボクらはロケットのエンジンを調節していた。

ボクは完璧に調整したつもりでそれに太鼓判を押したけれど、エンジンの不調にパイロットの彼は気づいていた。

大丈夫だと言って失敗を認めないボクに代わり、彼はエンジンを調整しようとして——そして、一瞬暴発した火柱に巻き込まれた。

爆発と呼んだ方がいいのかもしれない。　その業火を、ボクはすぐ傍で眺めていた。

出力が大きすぎた。　その上、耐久性もアウト。　明らかに失敗だったそれを認められなかったのは、ちっぽけなプライドのせい。

機械弄りが得意じゃないゼン兄ちゃんが工具箱を持ってしぶしぶエンジンに向かうのを、ボクは見ていたはずなのに。

だから、それはきつとボクの所為。作業の為に前に出していた彼の両腕は燃え尽きて灰になり、命さえ落としたとばかり思っていた。その両腕は今金属の義手。だからあの時、レヴィの一撃を受けて尚彼は生きながらえていた。ただそれだけの話だった。

「どうして生きてるって教えてくれなかったの？　ボク、ずっと兄ちゃんが死んだものだ……」

「両腕吹っ飛んで、他のところも『修理』するのに時間がかかりすぎたからな。それに……色々と立場も変わっちゃった」

「今はFRESの兵士、って事……？」

「……ああ。あの事故の後、FRESに拾われてな。そこで新しい身体と仕事を与えられた。今は人には言えないような仕事をやってる」

「……それは、ボクもだよ。胸を張って誰かに言える事なんて、なあんにも……何一つないんだ」

空虚な人生だ。自分はこうだって叫べる物が一つもないという事は。

顔を隠したトレジャーとしての自分。影の技術屋として働く、町の隅の冴えない自分。どんな自分も本当にボクがなりたかったものなんかじゃなくて。だから、自信なんてあるわけがない。

心から目指した物を諦め、ずるずると情性で続ける人生に胸を張れるという方が無理な話だ。だからボクは、今もまた瓦礫の山の下に立っている。

「俺は今の仕事に満足してる。人には言えない事でも、正しいと思う事をやってきた。それは今だって同じだ」

山の上から飛び降りて、彼はボクの眼前に降り立つ。あの頃よりもずっと伸びた背が、高い瞳がボクを見下ろしている。

「相変わらず小せえな、ウラ」

「兄ちゃんは無駄にでつかくなったね」

お互いに苦笑を浮かべる。心の底から感動の再会と言えないのは、きつと今ボクらの立場が擦れ違っているから。

懐かしさを楽しむような空気から、張り詰めるような緊張感へと自然に変化した時、ボクは一種の覚悟を決めた。

「REVから手を引け、ウラ。あれは危険な兵器だ。あれに関わっている限り、お前の命だって保障出来ない」

ここに来ればそういわれることは判っていた。それでは何故ボクはここに足を運んだのか。たった一人で。

「ボクはね、兄ちゃん」

強く拳を固めた。

「レヴィが……REVが危険な兵器だとは、思えないよ」

矛盾した言葉だった。

あの殺戮と破壊を求める姿を眺め、そして戦慄したボクが。自分

でも理解出来ない程簡単にそんな事を口にする。

それはきつとあの数日間だけの、レヴィと過ごした日々があるから。得体の知れない相手ではなく、家族として。ボクの傍で笑ってくれたから。

「兄ちゃんはREVをどうしたいの？」

「……破壊する。あれがどれだけ恐ろしい兵器か、身を持って味わったからな。この両腕がイカれそうになるなんてここ数年で初めてだ。あいつをこのまま野放しにしていたら……また惨劇が起こる」

「……それは違うんだ！ レヴィだって本当は……」

あの時、振り返ったレヴィは炎を背に寂しく微笑んでいた。その表情の、瞳の奥にある彼女の本心は、きつとその燃え盛る炎とは違った温度のほずで。

「彼女も本当は争いを望んでいるわけじゃない」

「なら何故戦う」

「それは……」

「危険な兵器じゃねえなら何だ。お前はあいつの何だ。そしてあいつは、お前の何なんだ」

「何？ 何……。何、って……」

空からヘリが落ちてきて。 ついでに女の子も落ちてきて。

流星みたいに舞い降りて、子供みたいに笑う彼女。　マスターとボクを呼び、その少し後ろをちょこんと歩く彼女。
全てを破壊し、壊しくしそして――人の命さえ容易に奪う彼女。
何と訊ねられ即答は出来ない。　たっぷりの時間と迷いと本心を携え、ボクはきつく目を瞑る。

「――家族だ」

その答えはきつと本心じゃない。　それでも嘘はついていなかった。

「彼女はボクの家族だ。　傍に居て欲しいんだ。　誰も殺させたくないし、彼女が失われてしまうのも耐えられない」

「自分一人の利己的な感情で他人を巻き添えにするつもりか？　今この世界がどうなるうとしているのか、判らないわけじゃねえだろ」

「判ってる……。　判ってるよそんなの。　でも、失いたくないんだ。　大切な人は何も、誰も！　何一つ、失いたくなんかないんだ！――」

「あいつがもし、殺戮兵器として歯止めが利かなくなったらどうする」

「その時は――」

静かに息を飲み、そして胸に手を当てる。　重く硬い感触がジャケツトの裏側から返ってきて、ボクは決意を固めた。

「――ボクが彼女を壊すよ」

こんな拳銃で彼女が破壊出来るはずはないけれど。

それでもその心構えは必要なのだ。失わない為には、守る為には、壊す覚悟も必要だ。

だからそうならないように、ボクは彼女を従えるだけの強い意思と心を持たなければならぬ。ふらふらしてしまうような、子供っぽい感情ではなくて。

それはきつと百点万点には程遠い、現状維持の問題先延ばしの最悪な答えだった。それでもゼン兄ちゃんは呆れたように微笑み、ボクの頭を大きな手でわしわしと撫でた。

「変わんねえなあ、お前はよ」

「兄ちゃん……」

「判った、判ったよ！　ったく、クソしょうがねえ奴だなお前は。何とか掛け合ってやるよ、あいつが壊されないようによ。仕方がねえ……他ならぬダチの頼みだからな」

「ほ、本当っ！？　よかった……話が穏便に済めば、REVの事だつて——」

その時、訳もわからずボクは背後に倒れていた。

真夜中の空は薄暗く、寒いくらいの気温の中、暖かい物が身体から溢れ出して行く。

「……………え？」

自分の胸に手を当てると、止め処なく溢れ出す真紅の液体。それがなんなのかを理解した時、ボクは薄ら笑いを浮かべて首を傾げていた。

「ゼン兄ちゃん……？」

「——っ！！ ウラアッ！！！！」

冷や汗を流しながら絶叫した兄ちゃんの声が、その機械仕掛けの冷たい両腕がボクを抱え込む。

右の胸を抑えるボクの手を退かし、兄ちゃんは自分の上着を引き千切ってボクの傷口に巻き付け必死に止血を試みている。だから、視線は兄ちゃんではなく、彼が元々立っていた山の天辺に向けられていた。

立ち上る白い煙の向こう側、冷たい風を受けて女の人がボくらを見下ろしていた。とても冷たい眼差しで、射抜くような視線はまるで人間とは思えない。

「ウラ、すっかりしろ……死ぬんじゃないぞ！！ おい、勘弁しろよ……っ！！ 何でこうなっちまうんだ、くそつたれエッ！！」

ゼン兄ちゃんの叫び声が響き渡ると同時に、周囲に沢山のFRES兵が姿を現した。ずっと瓦礫の山たちに身を隠していたのだろう。彼らは同時に駆け寄り、ボくらに銃を向ける。

漆黒の夜空をスポットライトが白く切り裂き、ボくらに降り注ぐ。ヘリコプターが巻き起こす風を背に受け、シルエットだけで女性 は口を開いた。

「それは駄目だよ、ゼン君。それはいけない。今更になって和平なんて、そんな夢みたい な事を言わないで」

「……マリーツ！！ てめえっ！！」

見詰め合う二人。まぶしい光の中目を閉じると、意識がボクの意思とは無関係にどんどん遠くなる。

ゼン兄ちゃんが何か叫んでいるのが見えるけど、声が聞こえてこない。とても眠くて、とても暗くて。

ああ、もしかしてボク、死ぬのかな――。

そんな事を、考えていた。

「何故、ウラはあんなにも不快感を露にしたのでしょうか……」

街には宿泊施設が沢山ある。それこそ最高級のものから、街の隅、人前に顔を出せないような人間の為のものまで様々な種類が。

そんな中、広さは無いものの比較的衛生的でよくイクスが利用する安宿の硬いベッドの上、レヴィアंकロウは座り込んで虚ろな瞳で呟いた。

疑問を他人に投げかけたつもりはきつとレヴィアंकロウには無かっただろう。しかし、ここ数日間人間と行動を共にした彼女は自然と誰かに言葉を投げかけるという行為を実行に移していた。

「んー。それは、お嬢さんの事が大事だからじゃないかしら」

お気に入り的大型拳銃を分解しながらイクスは笑う。レヴィアंकロウにはその言葉が理解出来なかった。

首を傾げるその様子にイクスは言葉を続ける。

「人はね、本当に大事な物に対してはとも必死になるものなのよ。時には異常なくらい感情たっぷりで、どうにもならないくらい擦れ違う。でもそれはお互いの事を大切だと感じているからこそ、

深く鋭く互いにナイフを突き刺し合うの」

「大事だから傷つけあう、ですか……？」

「あんたがあんなにムキになって敵をやっつけようとするのはどうしてよ」

「それはっ！！ マスターに銃を向ける相手など、この世に存在してはならないんですっ！！ 危険な存在は全て排除して——」

「だから、どうしてそうなの？」

「どうして………？」

戸惑いながら首を傾げ、必死に考え込む。 どうして。 何故。 人は沢山のものに理由を求めたがる。 そこには真実と感情のやり場が存在するから。

レヴィアंकロウはその時まで心を持っているとは言い難い存在だったのかもしれない。 ただ感情という物を秘めてはいるものの、その色を知らなかった。

自分が感情たつぷりの存在であるという事さえ、彼女は理解していない。 救いを求めるような伏目がちな蒼い視線に、イクスは紫煙を吐き出しながら笑う。

「大切なんでしょ、ウラの事が。 あんたにはそれ以外ないから」

「私はウラが大切……。 私にはウラ以外ないから……」

イクスの言葉を何度も繰り返し呟き、自分に問いかけるように目を閉じるレヴィアंकロウ。 その言葉の意味はやはりまだ理解出来

ない。だが――。

「ウラの事を思うと、不思議と胸に暖かい物が湧き上がって来ます。とても不思議な……非合理的な感覚が」

「ロボットはね、計算ずくで作られているから無駄をしないの。無駄こそ人間という存在の証なのにね」

「私は無駄なのでしょう……？」

「それは無駄な感情でしょうね。でも、あんたがあんたという存在を理解する為に避けては通れない物よ。それは、あの少年も同じだけれどね」

自分自身の胸に手を当て、レヴィアंकローは不思議と笑顔を零す。それはきっと彼女の心と呼べる場所の中、様々な楽しかった記憶が行き交っているから。

暖かく、苦しく、時に見苦しく乱暴で、それでも相手を包み込む……柔らかくて触れ難い感情。
繊細過ぎる心というプログラムを、彼女は少しでも理解しようと努力を始めていた。

「あたしはね、お嬢さん。喧嘩大賛成よ。ぶつかり合って泣き合えば、明日はきっと晴れるから」

「ぶつかり合って泣き合えば、明日はきっと晴れる………はい。ありがとう、イクス」

その時レヴィアंकローが浮かべた笑顔が余りにも人間染みっていたから。

イクスは苦笑を浮かべ、煙草の灰を灰皿に落としながら深く息を付いた。

端末が音を鳴らしたのはそんな時だった。

その端末に浮かび上がった名前を見てイクスは顔を顰める。しあし応えないわけにも行かず、端末に送りつけられたメールを開示する。

そこには、血まみれのウラが古びた木製の椅子に縛り付けられている写真が添付されていた。

「これは取引です。そして、私たちに手段を選んでいる余裕なんてないの」

巨大な換気扇が回転する打ち捨てられた廃倉庫の中、ゼンに胸倉を掴み上げられたマリーのシルエットが浮かび上がる。

二人の表情を光と影、交互に映し出しながら回り続ける換気扇。

ゼンの表情は怒りに満ち溢れ、今にも目の前のか細い首を押し折りそうだった。

ゼンとマリー、二人の間にあつた物は何であるかと問えば、二人はきつと違つた答えを出す。

一つの大きな目的の為に大切な物を捨てる事を厭わない女と、今はもう失ってしまった理想と夢の為に力を振るい、それらを捨てきれない甘さを持つ男。

マリーの瞳はどんな色でさえ染められそうにない。荒々しく高ぶるゼンの心さえ、その瞳は映さない。冷め切つた硝子のようなその瞳は、どこか人形を彷彿とさせる。

「FRESはOZと争つてでもREVを回収するつもりだよ。そして、REVはその為に世界に放たれた」

「……………意図的に手放したとも言いたいのか。理由は何だ」

「本当はゼン君もわかつているんじゃないですか？そしてそれは、Ash君を救う事にも繋がる」

「その為に撃つたつていうのか……っ！？あいつは俺の弟だぞっ

「!？」

「——仕事に私情を持ち込まないで、ゼン。 たかが人一人の命じゃない」

「掛け替えのない人一人の命だッ!!」

「……いくら話し合っても平行線でしょ？ それに今は、仕事を早く済ませるのが先決。 そうすればAsh君だって助かる。 お互い今はそうするしかないはず」

「………ド畜生が！ テメエら全員クソツタレだ！ 胸糞悪い、下種連中がッ!!」

「なんとも言えはいいよ。 でもね、ゼン君」

ゼンの腕から逃れたマリーはシャツの胸元を直しながら、冷めた瞳でゼンを一瞥する。

「貴方もその会社の一員なの。 その恩恵で生きて来た。 この街の誰もがそうよ。 自分だけ両手が綺麗みたいな言い方をしないで」

遠ざかるマリーの髪が揺れ、足音が響き渡る。 置いてきぼりの暗闇の中、頭を掻き乱し壁に拳を叩き付ける。

「——言われなくても判ってるんだよ、畜生……」

アスファルトの壁に減り込んだ鋼鉄の拳を引き剥がすと、壁に大きく亀裂が走った。

暗くて、寒い……。

身体が動かなくて、自分の身体がまだあるのかどうかさえよく判らなくなる。

何故こんな事になったんだろう……って、またそれか。未だに理由と起因する物を探して責任転換したがつてる。

本当は判っている。自分が何をしたいのか、何をするべきなのか。それを実行する事でしかもう前に進めないと判っているのに、どうして足踏みをするのだろう。

いや、理由なんてきつとない。起因するものなんてない。あつてもそれは、ボク自身が作り出した足枷に過ぎない。

ならばそれを解き放つ鍵は自分の手の中に最初からあつて、わざわざがんじがために足に巻きつけたその鎖を見下ろして首を傾げている不可思議な自分をどうにか出来るのも、やはり自分だけ。

何か、やらなくちゃいけないことがあつたような気がする。何かしてやらなくちゃいけないのに。

ああ、そうだ。早く帰って謝らなくちゃ。そうしない限り、ずっとあいつは落ち込んだままだろうから――。

うつすらと瞼を開くと見知らぬ光景が映り込んだ。何か、とてもうるさい。自分がどこかに座っていて、何かで拘束されているのがわかる。

傍らにはゼン兄ちゃんが立っていた。視線はボクに向けられていないけど、その表情はとても心苦しそうに見える。出来れば今すぐにも全て投げ出してやりたいって、そんな顔だ。

ゼン兄ちゃんの視線を追うと、ボクの向かい側には二人の女性が立っていた。一人はサングラスを掛け、二丁の拳銃を携えているイクス。そしてもう一人は、凄まじい形相を浮かべたレヴィだった。

形相、と表現するのは多少無理がある。表情は全く無かった。ただ冷たく暗く深く、沈みこむような寒い色をした瞳が、煮えたぎるような怒りを表現している。

「レ、ヴィ……」

声は本当に小さかった。何かがうるさくて声はすぐに掻き消されてしまう。

そのうるさくて仕方の無かった何かが自分の呼吸だと気づいた時、胸に穴が開いている事を思い出した。

口の中に溢れ返る血の味を認識し、顔を上げる。正面にはボクを撃った女が立っていた。

「約束通り、時間通りに来ましたね。動いている貴方と話をするのは初めてだね。改めて今晚は、レヴィアンクロウ」

「マスターを解放して下さい」

レヴィはその言葉をここに来るまでずっと吐き出さなくて仕方がなかったのだろう。放たれた一言は魔性の一声、その場で銃器を構える兵士たちをどよめかせる。

歴戦の兵士、人を殺す事を何とも思わない——それを仕事にするような人間が震え上がる声。透き通るような、きれいな女の声にその場の誰もが怯えていた。

勿論レヴィと対峙し、直接その言葉の対象となった彼女にも恐怖はあっただろう。その気になればレヴィアンクロウは一瞬でその身を肉塊に変える事が出来るという事、彼女は知っているだろうからそれでも怯まずあえて前に出るのはきつと彼女の決意の証なのだろう。恐怖さえ踏破し、自らの意思を貫く。良くも悪くも彼女は強い人だと思った。

「貴方のマスターは解放するわ、レヴィ。貴方の中のREVファイルを回収してからね。REVファイルの最期の鍵は彼にしか開けない。この街に住んでいる、としか判らないマスターに該当する人物を早急に発見するには、こうするしかなかったしね」

「やっぱり、意図的に街にREVを放ったのねマリー。REVの行き先に鍵があると知っていて」

「うん、そうだよイクス。余り嘗められては困るの。FRESはルール。FRESは力、よ。その私たちがいつつかり他の武装組織にREVを奪われるなんて事、起こり得るはずがないじゃない」

「……………そんな事の為に、護衛の連中や街の一般人を殺したのか」
ゼン兄ちゃんの呟きにマリーは応えなかった。ただ、強く拳を握り締めたゼン兄ちゃんの悲痛な横顔だけがこの場に取り残されている。

どちらに付く事も出来ず、ふらふらとたゆたう彼の立ち位置。きつとも居心地が悪いだろうと思う。
でもゼン兄ちゃん。そうやって苦しんでる今の兄ちゃんも、その兄ちゃんたちに捕まってレヴィとイクスに迷惑を掛けているボクも…………自分で選んだ事だよね。

「勿論マスターは殺さないよ。彼が居なければ扉は開かないから扉を開くまで私たちも彼に手出しは出来ない。でも、もし力がこのまま放置されるくらいなら、彼の命は必要ない。これは取引である以前に、博打なの」

ボクに突きつけられる無数の銃口。吐く息が熱い。なんだ、またか。またボク、迷惑をかけてる。

このままじゃ……もしないでいたら、また大事な人が居なくなっちゃう。ボクの所為で。ボクが、弱い所為で。

「一緒に来なさい、レヴィアंकロウ。貴方は自分を賭け金にして博打を打つしかないの。それともご自慢の暴力で状況を打開して――、」

「判りました。同行します。今、直ぐに」

レヴィの瞳は暗い。隙さえ在ればこの場に居る全員を皆殺しにしたい衝動を必死に抑え込んでいるのだらう。でも、ボクは彼女の気持ちが判る。

本当に妥協出来ない時。本当に大切な物が動く時。人は本当に必死になる。必死になった時、人はなりふりに構わない。それは、勿論。

「――レヴィ」

ボクだってそうだ。

「こんな奴らの言う事を聞く必要は、ない……。よく聞けよ、馬鹿野郎共……」

深く深く息を吸い込み、震える声を必死に起立させ、口を開いた。

「何でもかんでも力で思い通りになると思ってたんじゃない……っ！ あんたら引けよ……。でなきゃ、ボクは舌を噛み切っても死ぬ……！」

言葉は少なからずその場全てを震え上がらせた。拘束されているから何だ。それがどうした。ボクは必死に暴れ回り、全身に鎖が食い込むのも無視して身体を左右に振る。

恐らく……いや、きつと間違いなくその様子は無様でかつこ悪い。

相当イケてない。でもボクは歯を食いしばり、胸の痛み逆天らう。

「弱いからって子供がいつまでも大人の言う事聞いて大人しくして
ると思つてんじゃねえぞっ！！ 聞いてりゃ好き勝手言いやがつて
っ！！ てめえらそんなに偉いのかよ、あぁっ！？」

椅子が正面に倒れ、床に派手に顎をぶつける。相当痛かったから
涙目になっただけ、そんなのはもう今更だ。

「レヴィ、何度でも言う！ こんな奴らの言う事を聞く必要はない
……っ！！ お前は逃げればいいんだ！」

「そんな命令は聞けません……っ！ ウラ、貴方は自分の言つてい
る事がどういう事なのかまるで理解していない！」

「判つていないのはお前の方だっ！ こんな外道連中にお前の力が
渡つたら大変な事になる！ お前の力が人を傷つけるものになるか
も知れないっ！！ そんなのはもう嫌なんだよ！！ 誰も傷つけて
欲しくないんだよっ！！ 例え相手がどんな悪党だつて！ お前は
人間になりたいんだろレヴィアंक로우ッ！！ だったら人を殺す
な！！ 誰かに縛られるな！！ 自分自身を何よりも大切にするん
だよっ！！ それが生きてるって事だ！ それが人間って事だ！
他人の為に全て投げ出すなんてのは生きる事を放棄しているだけな
んだよレヴィ！！ お前はもう、ボクと一緒にいなくなつていいん

だあっ！！」

「ウラは判ってないッッ！！」

それは。

その場の誰もが目を丸くするくらいの悲痛な叫びだった。

だから、ボクさえも思わず言葉を詰まらせる。　続く言葉を待ち、誰もが注意をレヴィに向けていた。

そのレヴィアंकロウは、人間になりたいと言っていた彼女は、身体を小さく震わせながらスカートの裾をぎゅうつと掴み、ボクを見下ろしていた。

揺れる……とても揺れる、今にも壊れてしまいそうな儚い瞳で。

「ウラが居なくなったら……私は何処に帰ればいいんですか！？

私はっ！　自分で選んで此処に居る！　貴方が居る場所に、私は居たいから居るんですっ！！　誰かの強制でも運命でもなく、私は私の意志で……！　ウラ、貴方が大切だから！　一緒に居たいから！　だから、お願いです……」

歩み寄ったウラは血を流すボクの唇を指先で撫で、泣き出しそうに笑って。

「お願いだから、居なくならないで。　私を置いて、行かないで――

そう、囁いた。

勿論、ボクは何も言えなかった。　ただただ、零れ落ちては頬を伝う熱い物を感じて歯を食いしばっていた。

何故こうなる前にボクらはお互いの事を理解出来なかったのだろうか。　それはきつと求めても得られない答えだとは判っているけれど。

ど。

これからどうなってしまうのかも判らない、先行きの見えない世界。不安と後悔が胸を渦巻くけれど、ボクはその結果からは絶対に逃げてはならない。逃げないのだと誓った。

ヘリコプターに輸送され、ようやくちゃんとした手当てを受けながらボクとレヴィはF R E Sに運ばれる。麻酔が全身の自由を奪う瞬間まで、レヴィはボクの手を傍で握ってくれていた。

こんな事を考えるのはきつとおかしいのだろうか。もしもボクにお母さんとか、お姉ちゃんとか……そんな人が、家族が居たならきつとこんな感じなんだろうなあ、何て思う。

眠りに付くのが不安で仕方が無いはずなのに、不思議と心は落ち着いていた。レヴィの手はとても冷たくて、それでも泣いて火照った顔には冷たくて心地良い。

ああ、そうだ。忘れてただけで、きつと。ボクにだって、お母さんは居たんだ。そうでなくちゃボクはここにいないよね。お母さんは、優しくったかな。レヴィみたいに、ボクの手を握ってくれたかな。辛い時、頬を撫でてくれたかな。

眠りは暗く、深い孤独の世界だ。それでもボクはもう恐くはない。彼女が傍に居てくれる事を信じられる。

運命でも打算でもなく、居たいから傍に居ると笑ってくれた彼女を信じられる。

だからボクも応えよう。目が覚めたら君を救うと決意する。だから、少しの間だけ――。

「――おやすみなさい、ウラ」

そんな、彼女の囁く声が聞こえた気がした。

「誰でもいい、俺を殴ってくれッ!」

「オツケエエツッ!!」

「ぐっはああっ!？」

ゼンの顔面に深々と減り込んだイクスの拳。　グルグルと空中を旋廻し、床に無様な格好で落下するゼン。

既にFRESは撤退し、倉庫にはゼンとイクスの二人しか残されていなかった。　つまりゼンの突然の叫び声に応えられるのはイクスしか居ないのである。

しかしまさか即座に右ストレートが飛んでくるとは予想していなかったゼンは、全く無防備な顔面に女とは思えぬ破壊力を持つ一撃を貰う事になり、卒倒しそうな意識を取り戻すのに必死だった。

「ぐ、おおお……っ！　き、効いた……ぜ……」

ぼたぼたと白いコンクリを鼻血で汚しながら立ち上がったゼンは折れた歯を吐き出し、イクスを見据える。

「あんた、ウラの面倒見てくれたんだろ」

「面倒見たっていうか……まあ、まんまとマリーの策に乗せられちゃったわけだけど。　でも、好きでやっていた事よ。　ウラの事もレヴィの事も、あたし好きだし」

「……………俺もだ。　俺も、そうやって……胸を張って言えるくらい、ウラの事が大事だったはずなのにな」

既に夜は更けた。　遠ざかったヘリコプターの向かう先、摩天楼の中に浮かび上がる巨大なFRESの城を見上げ血を拭う。

風が吹きぬけ、迷いと後悔さえ連れて行く人工の月明かりが輝くこの夜に、男は深く決意を新たにしている。

「ウラの奴、いつの間にかデカくなってやがった。ガキつてのはだからわからねえ。気づけばあんなに……あんなに強くなつてたんだな」

「男児は三日合わなければもう別モンなのよ。あんたは何年も少年と会ってなかったんでしょ？ 判ったつもりになるのは大人のエゴよ」

「返す言葉もねえ……。ああ、そうさ。何をやっていたんだろうな、俺は……」

何の為にこの両腕を手に入れたのか。男は自らに問い掛ける。人々を守る為に。理不尽から子供を守る為に。そして今尚どこかで苦しむ誰かを救う為に。

壊す事しか出来ない不器用な、しかし強い力を宿した拳。強く強く握り締め、顔を上げる。

俯きはしない。後悔ならば飽きた。ならばもう、やる事など判り切っている。

「――俺はF R E Sをぶっ潰す」

「あら、就職先なんじゃないの？」

「知った事かよ。てめえの大事なモン譲ってまで尻尾振る価値のある場所なんて在り得ねえ」

両手の拳と手の平を正面で突き合わせ、血を舐める。腹積もりは

とつくに決まっていた。もう、あの会社に未練はない。

「あんたイクスとか言ったか。FRES潰すの手伝ってくれよ。腕はいいんだろ？」

「……………なんで世界の半分を敵に回さなきゃならないのよ。あんたと一緒に行けばあたしになにか得があるわけ？」

「あるぜ、得」

男は笑い、髪を掻き揚げながら目を見開いて誘う。

「俺と一緒に来れば、最高に気持ちのいい世界を見せてやる」

差し伸べられた手を見つめ。イクスはサングラスを下げて呆れたように笑った。

「それ、ついさっきまで後悔してた男のセリフ？」

「過去は振り返らなねえ。後悔はしてもしょうがねえ。落ち込むだけ落ち込んだが、あんたの一発が目を覚ましてくれた。その一発が欲しい」

「あんたも大概ガキだと思っわよ、あたし。でもいいわ、その賭け——乗った」

手を取り合い、二人は笑い合う。見上げた暗い空、まだ見えぬ敵を見据えて。

夜の街に駆け出した二人の決断が、この世界を大きく変える事になるなど——当の二人さえ、知らないままに。

そうして二人がF R E Sを目指している時、街では静かに変化が始まっていた。

地下空間のいくつかがゆっくりと崩壊を始め、人工の星空にはゆっくりと亀裂が走る。

人々が歩く積層された歴史の下は、ゆっくりと終わりの時を迎えようとしていた。

「……………ねえねえ、これ何？」

数人の人ばかり。その向こう側、つい最近まで何の予兆も無かった場所に巨大な穴が開いていた。

床が崩れ落ち、地下の地下まで覗く事が出来るほどのその大穴を空けたのが誰なのか、そしてそれが何の為に空けられたのか——空いてしまったのか、住人たちは興味さえ抱かない。

そしてそれは今に始まった事ではない。ゆっくりと、ゆっくりと。そう、誰もが興味を抱かない世界の裏側で、それは確かに始まっていたのだ。

だから決して急な事などではない。そしてマリーは急がねばならなかった。マリーだけではなく、この世界に生きる全ての命が。

そんな大切な事を誰も知らないのはそう、きっと誰もが今生きる自分の命に興味がなかったから。

作り物の夜は今日も更ける。

明日が来る事を、誰一人疑わぬままに。

「……ごめんね、ウラ君」

マリーの言った言葉は、拍子抜けするくらい優しいトーンでボクの耳に届いた。

治療を終え、傷口には包帯が巻かれている。流石はFRESの医療技術と言ったところか、痛みはもう殆どない。

治療が終われば直ぐに始まる、ボクがこの場所に呼ばれた理由。

そこは何重にも閉ざされた巨大な鉄の扉の向こうに広がっていた巨大な空間。床も壁も天井も真っ白な、不思議な空間だった。

その部屋の中央、大きな白い椅子にレヴィは腰掛けていた。準備は既に整っているのか、レヴィは今は眠りに着いている。

ただ一人この部屋に同席するマリーに導かれ、傍に置かれた端末の前に腰掛ける。指を鳴らし、部屋の中を見渡した。

「当然監視はしてるよ。妙な動きをすれば直ぐに判るから」

「言われずとも判ってるよ。それに、ボクは自分の意思でREVを解き放つ」

「そう。それじゃあ早速始めて。REVファイルをFRESのメインコンピュータに転送するの。出来る？」

「嘗めるな。ボクはレヴィアंकロウのマスターだ」

小さく呼吸を整え、覚悟を決める。

どちらにせよこのREVという力からボクらは目を逸らす事が出来

ない。　なら、いつどこで解放しようがそれは同じ事だ。
前回と同じく意味不明な単語の羅列に答えを返していると、背後に
立ったマリーが小さな声で話し始めた。

「レヴィは街に出るまでずっと眠っていたの。　勿論、この文字……
REVコードの解析も出来なかった。　REVという力の本質を、
私たちはどうしても手に入れる事が出来なかった」

「だから街に出して目覚めを促したのか。　沢山の命を犠牲にして」
「仕方がなかった、なんて言い訳はしないよ。　でもその選択は今、
どうしても解くことが出来なかったコードを易々と潜り抜ける君と
いう存在に繋がってる。　後悔はしない」

ボクは手を止めなかった。　彼女も当然それは望んでいない。　た
だ何故か後悔は無いと言い切る彼女の様子はとても煮え切らないよ
うに感じた。

ここに来た時も彼女はボクに親切にしてくれた。　さっきも傷をい
たわりながら部屋につれてきてくれたし、今も彼女は訊ねもしない
事のあらましを話してくれている。

「あんたたちはREVが何であるか知ってるんだろ」

「うん。　REVは私たちの希望であり……。　そうね、きっとパ
ンドラの箱。　欲しい小さな希望を取り出す為に、数え切れない悪
意を世界にばら撒く事になる。　それでも、私は……」

言葉は止んだ。　彼女も違和感を覚えたのだろっ、この最期の質問
に。

REVの帰るべき場所を知っているか……。　それは明らかに何者

かによつて跡付けされた、法則性にそぐわない一言。

「何、この問いかけ……。こんな関連性のない質問が最後に出てくるなんて……」

きつと頭のいいであろうマリーにも、この答えは判らない。

あの時のボクにも判らなかつた。でも、今は少しだけその答えに近づけたと思う。

レヴィは安らかに眠っている。不安になんて感じていないんだ。

ボクを信じて、そして今全てを預けてくれている。

その信頼に応えられる人間で在る様に、ずっとボクがそう在る様に、ここにボクが入りたい答えは一つだけ。

——簡単な答えだけど……。『他に選択肢もない』んだし。でもね少年、あんたはお嬢さんの所有者にでもなつたつもり？

イクスは言っていた。彼女にはもう答えは判つていたんだ。確

かにそれ以外に答えなんてない、当たり前すぎる返答。

そしてその場所を選ぶのは、きつとボクではない。何故なら彼女はボクの物などではなく、自ら意思を持って考え行動するのだから。ならば、帰るべき場所は。

——ウラが居なくなつたら……。私は何処に帰ればいいんですか！？

戸惑うマリーとは裏腹にボクはとても落ち着いていた。

そしてこの辿り着いた当たり前の答えに、レヴィからの深い信頼と愛情を感じる。

そう、最初からわかりきっていたのに。わざわざ遠回りをして、ボクは今彼女に伝える。

「此処に居ていいんだよ、レヴィ」

入力スペースに打ち込んだのはアルファベット三文字。

ただ、『ULA』とだけ。その一言だけ。

刹那、溢れ出した情報の奔流はボクの知る世界の何倍もの広さで、FRESのデータベースに雪崩れ込む。

そこに記されていたのは、秘密の破壊兵器でも神様の在り処でもなく。

地球という緑の星を生きた人々の、最初から最期までを記録した、切ないメッセージだった。

REV・10

FRESとOZの抗争は、ゼンとイクスにとって僥倖であると言えた。

たまたま街中に止められていた大型バイクに跨り、百階を悠に越える巨大な城へ飛び込んでいく。後先は考えない。例えそれが馬鹿げているとしても。

ビル構造はゼンが把握している。ゼンのような『ならず者』が出入りする裏口へと真っ直ぐに加速し、硝子張りの出入り口を突き破り侵入する。

迂回して侵入。準備を整える。色々考えるべき事はあるが、まずと突入する事から始めると愚か過ぎる判断を下した二人の相性は確かに良いと言えるのだろう。

裏口付近に居たゼンの同僚たちも舞い散る硝子の破片と共に派手に飛び込んできたバイクに空いた口が塞がらない。それは勿論上司であるシャッフルも例外ではなかった。

「……………。ゼン……これは、なんだ？」

「……………なんだろう？」

真剣な表情で見つめう二人。しかしその不思議な空気は一瞬で崩れる事になる。ゼンの背後に跨っていたイクスが銃のグリップでゼンの後頭部を小突いていた。

「はいはい、注目！ レディースアンドジェントルメンツ！！お祭りの時間よ、ロッキンロール！」

二丁の大型拳銃を構え、湿気た煙草を咥えた口の端から紫煙を吐き出し、引き攣るように笑う。

「ゼン！ ボケっとしてんじゃ無いわよ！ 遊びに来たわけじゃないんでしょっ！？」

「……………判ってるよ！ 悪いシャッフル！ 何も聞かずに通してくれないかつ！？」

当然無理すぎる注文だった。その場に居る同僚たちは皆顔を突き合わせては首を傾げている。判断は当然、統括する立場にあるシャッフルに任されていた。

小太りの男は上着のポケットから煙草を取り出し火を点ける。それからしばらくの間窓の向こうを眺めた後、深く煙を吐き出した。誰もがその次の言葉を待つ中、シャッフルはゆっくりとした足取りでイクスの前に立ち、満を期して呟く。

「私たちは何も見ていないし、聞いていない。行き成りテロリス

トに襲撃され、気を失った……という事にしておこう。お前らは外に出ている。何だかよくわからないがよくない事になりそうだ。巻き込まれたいやつはいないだろう」

全員同時に頷き、ゼンに背を向けていく。最後に残ったシャッフルは深く溜息をつき、自らの額を親指で叩いた。

「後は頼む」

「オーケエ」

思い切り振り下ろされたイクスの大型拳銃のグリップがシャッフルの額に減り込み、盛大に血飛沫をあげる。

「おおい！？　少しは手加減しろよ！？」

「手加減って苦手なのよね……」

しかし勿論、警備体制は万全である。次々と現れる小型の駆逐兵器たちを目にした瞬間、イクスは無言で引き金を引いた。

放たれた弾丸は吸い込まれるように機械の兵士たちに命中し、派手に爆炎を巻き上げる。対機動兵器用爆裂弾頭――。イクスは容赦なくそれを両手に構えた双銃から吐き出していく。

巻き起こる炎と煙る風の中、ゼンも両手にマシンガンを構えて走り出す。

「本格的なセキュリティが発動すれば太刀打ち出来ねえのが出てくる！　先を急ぐぞ！」

「あくまで今回はレヴィとウラの救出って事ね。　はいはい、オー

ライ」

バイクに強引に積み込まれていた長大な対戦車ライフルを背負い、イクスもゼンの後を追う。

「それで、行き先はわかってるの？　これだけ広いビルじゃ闇雲に探しても見つからないわよ」

「宇宙開発特務室だ」

「根拠は」

「本人に――聞いたんだよっ！！」

立ち塞がる警備員達にマシンガンを掃射する。追ってくる機動兵器はイクスが爆破。二人は背中を合わせるように移動しながら話を続ける。

「あそこは独立した部署だ！　研究室の一つや二つあってもおかしい事は何もねえ！」

「ふうん、そう――。　マリー、まだそこにいたのね」

「何か言ったか！？」

「いいえ。　ただ、あつけないものね。　今のFRESのセキュリティなんて――」

黒煙の中から歩いてくる二人の姿はただの警備員ではまるで相手に出来ないような迫力が感じられた。

FRESのセキュリティは一級品である。それには違いないが、二人はその穴を縫うようにして地下——宇宙開発特務室に向かう。セキュリティ構造を知り尽くしているのはゼンだけではなかった。

ゼンの知らないFRESの情報は、イクスが補う。二人は拔群のチームワークで敵陣のど真ん中であるにも関わらず、圧倒的優位を誇っていた。

かつてこのような出来事は起こらなかったし、きっとこれから起こらない。馬鹿げた二人の力任せの突撃は、しかし意外なほどスムーズに進行する。

「お前FRESとどういう関係だ？ 何で警報装置の位置を知ってる」

「さあ、どうしてかしらね……。ま、それも込みで話があるのよね……マリーには」

二人の最大の障害となったのは宇宙開発特務室の入り口に存在する無数の鉄の扉だった。その装甲に試しに弾丸を撃ち込んで見るものの、当然破壊する事は出来ない。

機動兵器を吹き飛ばす火力でさえ通用しない事はイクスには判り切っていた。それでも試してみたのは、何となくという理由である。気づいたら撃っていた、とも言う。

その凄まじい突然の爆発と轟音に文句を言うゼンの声も無視し、イクスは銃をホルスターに収納し端末に触れる。

ロックを解除するのは極めて難解である。天才の集うこの部屋の扉を開くには、アトランダムに出題される難題全てに解答する必要がある。付け加えて言うのなら、全十問の内一問でも不正解になった場合、また最初からやり直しとなる。

「そっぴやマリーの奴が言ってたな……。侵入者は絶対にここに

は入れないって」

「あら、世の中に絶対なんてないわよ？」

「つつてもな……。余程頭が良くねーと入れないらしいぞ？ それこそ最高のセキュリティになるくらいに」

「さてね。それじゃあ——試して見ましょうか」

ぺろりと舌を出し、唇を舐めて笑うイクス。そんな彼らを追い、無数の機動兵器が迫ってくる。

「十五分、時間を稼いでくれる？ そうしたらあんに奇跡を見せてあげる」

「——ッ！！ くそっ！！ 開きませんでした、なんてオチは承知しねえからなっ！！」

対戦車ライフルを担ぎ、追っ手に向かって突撃するゼン。その背後、静かに笑みを零しながらイクスは呟く。

「さあ……。あれからどれくらいあんなに成長したのか見てあげるわ。マリー・コンラッド——」

「世界の、記憶……？」

部屋中に浮かび上がる立体映像たち。それらはREVというファイルの中に記録されていた映像のごくごく一部に過ぎない。鮮やかな夕焼け。静かに波打つ漣の音。本物の流星群。数え

切れないくらい、人が溢れ返る街。 かつて世界が本当にそこに在ったのだという数々の証。

それらはどれも美しく、時に醜く。 しかしそれでもボクらにとっては鮮烈な、いとおしく、喉から手が出るような——そんな世界。 囲われた偽者の世界ではなく。 何処までも広がっていた、本物の世界。 蒼い空。 白い雲。 笑ってしまうくらい当たり前なはずのそんなものが、美しい。

流れては消えていく様々な誰かの思い出の欠片達を見上げ、マリーもまた目を細めて見入っていた。 この世界のこんな記録は残っていない。 『過去』を知る人間はいない。 誰も興味がないから。 不思議な事だとボクはずっと思っていた。 この世界に生きる人は皆、『昨日』にも『明日』にも興味がないのだ。 刹那的に毎日を繰り返し過ごし、それに飽きる頃自然と死んで行く。

そんな世界が嫌で、此処ではないどこかを目指そうと夢見ていたボクにとってそれらは金銀財宝の山さえも凌駕する価値を持っていた。 きらきらと瞳に流れ込んでくる世界の景色、音——。

「何故、人は失ってしまったんだろうね……」

とても寂しく、ぼつりとマリーは呟く。

その横顔が余りにも悲しそうで、ボクは彼女を恨めなくなる。

理由を求めてもそれはきつと意味のない事だ。 終わってしまった世界はもう取り戻せない。 それでも、彼女の言葉は深く共感できた。

どうしてなのだろう？ これほどまでに美しく、掛け替えの無い世界。 何故失い、そしてボクらは何故偽りに囲われたのだろう。

この世界という根本的な疑問に伴い、熱く切ない思いが胸に去来する。 マリーは頬に涙を伝わせて居た。 そしてボクはオズワルドの言葉を思い出す。

きつとこれは、確かに物の一面に他ならない。 これはきつと、と

でも大切に。でもそれは、誰かを傷つける。

「取り戻したいなあ……。取り戻したいよ……。綺麗な世界を、みんなの手に……」

うわ言の様にマリーは呟く。それは同感だった。今のボクらの世界は、これに比べれば余りにも醜く閉鎖的で、余りにも明日がない。

「あんたは……。あんたたちは……。REVをどうしたいんだ？」

零れ落ちた疑問はきつとボクの本心だった。レヴィの中に眠る膨大な破壊と再生の記録。美しい物と醜い物。かつて世界に溢れかえっていた、『あたりまえ』という名の宝石たち。

これを知り、感動と共に涙を流したマリーは本当にボクの敵なのだろうか。悪人なのだろうか。そんな疑問に意味がないと判っている。それでも知りたくなる。

「マリーはこの世界をどうしたいの……？」

ボクの問いかけにマリーは微笑みと共に向き合い、そして答えてくれた。

「REVはね、ウラ君。『Revolution』であり、『Reverse』でもある。世界という膨大で抽象的な情報の塊をどう使うのかは……。きつと人間次第なんだよ」

「マリーはどちらを選びたいの……？ 進化か、それとも再生か……」

「この世界は、偽りと停滞に満ちている」

冷たい呟きだった。

「毎日何も変わらなくて。同じ事の繰り返しで。些細な変化の中、人間は明日を夢見る事も昨日に思いを馳せる事も辞めてしまった。今この世界でね、きらきらした目をしているのはきっと子供だけ。閉ざされた世界の中、何もない世界になれてしまった大人は皆、生きるって事を忘れちゃうんだと思う」

ボクも同感だ。そしてボクもそうなりかけていた。

諦めて、納得させて。他の誰でもなく自分自身に言い訳を繰り返す日々。

幸福や絶望はどこか遠いところにあつて、自分には無関係。そうしていつの間にか大人になる。

みんなこの世界に生きる人は不真面目で不誠実なんだ。一生懸命になるという事を知らない。皆孤独で、でもそれでいいと考えているから、繋がりが生まれない。

囲われた世界の中で、ボクらはいつしか沢山の物を諦めて、沢山沢山数え切れないくらい自分に言い聞かせて、嘘で満ちた世界に落とし所を求めていた。

「これは、進化なのかな……。にらみ合うOZとFRESさえ、正面衝突する事はない。皆望みがないから、欲望がないから、大きな争いにもならない。どんな変化も無くなれば、きっと確かにそれは平和なんだと思う」

マリィが端末を操作すると、見るに耐えない人の死と憎しみの連鎖の映像がこれでもかというほど部屋中に張り巡らされた。

それは戦乱の記憶。誰かが憎しみで人を殺し、笑った記憶。吐

き気を催すようなおぞましい数の悪意。それはきつと、星さえも滅ぼす。

「美しい、解放された世界には果てしない欲望と憎しみがある。世界が広がれば広がるほど人は何かを求めずには居られない。閉ざされたこの世界だって開かれてしまえばきつと……同じ歴史を繰り返す」

「……同じ事を繰り返すなら、それは進化じゃないよ。ただの堂々巡りだ」

「では再生？ それこそ同じ事の繰り返しだよ。だから、進化も再生も出来ないなら……。そして世界の維持すら出来ないなら。人間は——」

マリーの言葉が詰まると同時にボクらの背後、重く閉ざされていた扉が開いた。映し出されていた立体映像を突き抜け現れた二人の姿に思わずボクは目を丸くする。

「十五分も必要なかったわね。容易なロックだわ、マリー」

「イクス！ それに……ゼン兄ちゃん！？」

おかしな組み合わせだった。ボクら四人はそれぞれ入れ違った立ち位置で向かい合っている。

拳銃をマリーに向け、吸殻を吐き捨てるイクス。マリーはそれを見て苦笑する。

「やっぱり、イクスには通用しなかったか……。勝てないなあ、

「元室長には」

「室長……って、どういうこと？」

「あら、ウラにも言っただけ？ あたし、元々宇宙開発特務室——この室長なの。ここで一番頭が良くて偉い人。判る？」

「はあっ!？」

どう見ても科学者という様相じゃない。ボクと兄ちゃんが口をあんぐりさせているのを無視して二人は会話を続ける。何はともあれこれはまたとないチャンスだ。ボクは直ぐに反転し、レヴィの下へ向かう。

「REVを開け放った感想はどう？ 個人の手に負える知識じゃないと思うけど」

「イクスが弱腰な事を言うなんて珍しいね。でも確かにこれは個人が所有するような財産じゃない。だから、有効活用しなくちゃ」

二人の会話内容は気になるけれど、それは後だ。レヴィとの接続を解除しケーブルを引っ抜くと、気を失っていたレヴィがゆっくりと瞼を開いた。

「ウラ……」

「レヴィ……。ありがとっ、信じてくれて」

「……………はい。貴方を信じていました」

柔らかな笑顔を浮かべるレヴィを強く抱きしめる。
レヴィは暖かい。機械であることさえ忘れそうくらいに。もう手放したくない——強く願う。彼女がボクの手を握り締め、いてくれたように。ボクは彼女を強く抱きしめる。
誰かに命じられたわけでも、ましてや偶然や運命なんかじゃない。ボクは、ボクの意味で。

「一緒に帰ろう、レヴィ……」

触れれば触れる程胸の内から熱い想いが溢れてくる。
守らなくちゃならないんだ、今度こそ。今度こそ——。

「おい、それは一体何の話だっ!？」

ボクらの視線が向けられたのはゼン兄ちゃんだった。何やら蒼白な表情を浮かべてマリーに詰め寄っている。

「そんな話、噂にさえなつてねえぞ!？」 出鱈目か何かの間違いじゃねえのか……!？」

「うっん、間違いじゃないの。もうずっと前から判っていた事なの。もう、限界なの」

何の話だろう? よく聞き取れないと感じてボクらは傍に歩み寄る。ゼン兄ちゃんはマリーの両肩を掴み上げ、それでもどこかその表情は救いを求めすがり付いているように見える。何事かと困惑するボクらの胸に、現実が深々と突き刺さった。

「この世界はもう、限界なの。いつ崩れてもおかしくないの……」。

何度でも言うよ、ゼン君。　この世界はもう、御終いな」

「……………なに、が？」

その突然過ぎる告白の真意を問い詰めようとしたボクらの耳に、かつんと。　一步、部屋に踏み込む何者かの足音が聞こえた。

一斉に振り返るボクらの視線の先、開かれた扉の前に細いシルエツトが一つ。　光を浴びても尚暗く、闇を切り取ったかのような色をした誰か。

白い、人には程遠い色をした蒼白な肌。　全身の至る部分に装着されているのは特殊な装甲だろうか。　その表情は、銀色の鋼鉄のバイザーに覆われて窺う事は出来ない。

かつん、かつんと。　その何かが一步步近づいてくる。　当然ボクらは最高品質の警戒でお迎えする。　なぜならばその様相は、まるで――。

「え？」

一瞬、何が起きたのか判らなかつた。

理解不能な状況は一瞬でボクらの情勢を逆転させる。　さっきまでゼン兄ちゃんとイクスが立っていた場所には何故かその誰かが立っていて、床の上で二人は血を流して倒れていた。

その白い両手から零れ落ちる痛みと生の証。　それはどうしてもその手には馴染まない。　まるで死体に降り注ぐ雨が輝く事はないように。

「紹介するね、ウラ君。　彼女はR2」

R2と呼ばれた彼女は、レヴィアंकロウとそっくりの彼女は、何の感情も浮かべないままボクへと振り返る。

「もう一つの、REVだよ——」

マリーが笑う。

状況は間違いなく、最悪だった。

R2。

REVと言う存在の『兵器』としての意味合いを純粹に抽出した、ヒトガタの機動兵器。

REVを抱く箱であり同時に守護者でもあるレヴィアンクロウ。

その存在はかつてその所有者であったFRESにも全様を知る事は出来ない非常に難解な存在だった。

しかし、レヴィアンクロウの難解な部分はその内部であり、レヴィアンクロウという『器』は現代の科学でも十分に理解する事が出来る。

限りなく人間に近い、『無駄』を重視しつつも圧倒的な強度と運動力、軽量さを持つマシンボディは、しかし時間と金と技術を注ぎ込めば十分に再現可能であった。

その長い年月とFRESの技術力を持ってして尚、レヴィアンクロウが持つ『無駄』は再現する事が出来なかった。それでもその力と形だけを写し取り、無駄を省いた兵器は模造出来たのである。

二人目のレヴィアンクロウにして、FRESがその所有者であった唯一の証。R2はその戦闘能力ならば、レヴィアンクロウに決して引けを取らない。

その上外部に強化装甲を取り付け、戦闘用に武装しているR2と動き安いとはお世辞にも言えないぼろぼろのドレスを着用しているレヴィアンクロウ。装備的にもR2は圧倒的に有利だった。

「驚いた？ 私たちが手に入れられなかったのはREVだけ。レヴィ、貴方の形は私たちにだって模造出来る——いえ、越えられる」

高らかに鳴り響くマリーの指先。引き金を引かれた弾丸のように、

R2は疾駆する。一直線、レヴィアンクロウのマスターを目掛けて。

蒼と黒の二つの影が交わる瞬間は命令を下したマリーは愚か、その場に居る誰一人が認識出来るものではなかった。後から送れて飛んできた音と衝撃に誰もが息を呑む。

レヴィアンクロウの瞳が大きく見開かれ、バイザーの向こうに隠されたR2の視線と交差する。それは、彼女にとって生まれて初めての感覚だった。

蒼穹の少女が、初めて恐れと嫌悪を抱く相手――。それは、自分と同じ顔をした機械の人形。R2の頬が薄っすらと笑みを浮かべ、二人の戦いの火蓋が切って落とされた。

細くしなやかな足が同時にぶつかり合うと激しい金属音が鳴り響いた。打ち合いに成った瞬間レヴィアンクロウは悟る。足の皮膚は裂け、真紅の液体が零れていた。

それは当然の事だったのかもしれない。レヴィアンクロウは巨大な金属の塊を素手で粉碎する力を確かに持っている。しかし、その身体は所詮機械。

修理する事もなく、幾度となく繰り返された過負荷は彼女の装甲を痛めつけていた。超硬質を誇るR2の追加装甲とぶつかり合った時、砕け散るのがどちらなのかは明白。

元よりレヴィのその両手の皮膚は裂け、痛々しい程に血を滴らせて居た。ダメージを負っていても倒せる相手ならばいい。だが――

R2に思考する能力も、会話する能力も存在しない。それでもR2の唇が動くのを時の刹那レヴィアンクロウは確かに認識していた。

「レヴィッ!!」

声を上げてしまったウラ。それは完全にこの緊張感の中、失策だった。

一瞬だけ意識がマスターに向けられてしまったレヴィの頭部猛スピードで繰り出されたR2の踵が振り下ろされ、車に跳ねられた小さな人形のように、レヴィアंकロウの身体は宙を舞う。

陥没しない。縦にヒトガタがグルグルと回転するという異常な光景。直後繰り出されたR2の正拳がレヴィアंकロウの胸部に突き刺さり、その身体は軽々と吹き飛ばされて行った。

あなたは弱いね、レヴィ。

そんな風に、R2の唇が動いたような気がした。

REV・11

部屋中をめくるめく世界のかつての景色たち。それに囲まれた空間で、立っているのはもうR2とマリー・コンラッドの二名だけだった。

つい先ほどまで圧倒的優位にあったウラたちは全員床の上に倒れ血を流している。何よりも問題なのは、絶対的な力を持っていたレヴィアंकロウがあっさりとR2に敗北してしまった、というどうしようもない事実である。

レヴィアंकロウの性能がR2より劣っているわけではない。それでもこの一瞬、戦闘能力という限定された力で言えば、R2はレヴィアंकロウより何枚も上手だった。

吹き飛ばされたレヴィの髪を掴み上げ、動かない身体を強引に引き摺り上げるR2。その動作はとても淡々とし過ぎていて逆に薄ら寒ささえ周囲に与えるだろう。

「マリー……。流石に仕事をサボっていたわけじゃなさそうね。」

R2が、実際に動いているなんて……」

声を発したのはイクスだった。額から夥しい量の血を流しながらも強がりですみを浮かべて見せる。

「イクスが居なくなつて何年経つたと思つてゐるの……？ 現実を見ないで夢ばかり追いかけて、現を抜かしていた君とは違ふの。これが今の私。今の私の力なの」

R2はレヴィアंकロウを床の上に落とし、うつ伏せに倒れるその後頭部をヒールで踏みつける。赤い液体が床の上に広がり、レヴィアंकロウの身体は痙攣するように震えた。

レヴィアंकロウは齒を食いしばり、必死でそれを覆そうと身体に力を込めていた。砕け散つてしまつた左顔面からばたばたと流れ落ちていく痛みのはら。深く肩を揺らして呼吸をするその姿は人間と何一つ変わらない。

流れているのは血液かそれともオイルか。どちらにせよ彼女の身体に通う命の証に変わりはない。ゆつくりと、しかし確かにそれらが失われていく様——。世界そのものを有する絶対無比の守護者を跪かせるだけの力。それは、マリーの力を誇示していた。

「やめろっ！！ レヴィの中にはREVファイルがあるんだぞ！？ あんただつてそれを失いたくはないだろ！？」

「確かにね。でも、中断されてるダウンロードさえ終了すれば、容器はもう用済みなの。とりあえずデータベースとして持ち帰ればそれでいいから、最悪首から上だけだつて構わないわ」

「な……っ！？」

「勘違いしないで、ウラ君」

踊るように、舞うように。　その場でステップを踏み、光の下マリ―は微笑を浮かべる。

両手を広げ、世界の記録を臨み、静かに吐息伴いながら語るその様子は、恍惚と悲壮――狂気と愛に満ちていた。

慈悲深き聖女。　そんな言葉と同時に浮かび上がるは深淵の魔王、という言葉か。　聖女にして魔王は、にこやかに語る。

「私はこの世界が大ッ嫌いな。　大、大、大ッ嫌い。　進化も再生も必要ない。　だから私は、全てを裏切るの」

R2のに首根っこを掴みあげられるレヴィアंकロウに余力は残っていないように見えた。　それでも震える血まみれの手でR2の腕を掴み返す。

「マス、ター……ッ！　私は……大丈夫ですから……っ！」

その腕を取り、R2は何の前触れも無く有らぬ方向へと捻じ曲げる。　今まで聞いたことも無いような悲痛な音が響き渡った。

「あ……っ！？　ぐ……あ、う、ううっ！」

長く、細くしなやかな指先たちはおかしな方向に向いてしまった瞬間全てが不気味な物に変わってしまう。　押し折れた腕に思わずレヴィアंकロウは我慢していた悲鳴を上げてしまった。

それは、いけないことだった。　彼女はずっとずっと、わからないふりをしていたのに。　だから、ウラは冷や汗を流して震える声を上げる。

「レヴィ、お前——。痛みが、あるのか……？」

少し考えれば当然のように辿り着く事実だった。

料理を食べて、『おいしい』のならば。腕を圧し折られ、『痛くない』はずがない。

レヴィアंकロウが持つ人間らしさと言う名の無駄の中には五感も含まれている。そしてそれは、痛みを感じないR2と大きく差を開く要員でもある。

骨を砕かれようと皮を引き裂かれようと痛みを感じないR2はその手を緩める事はない。どんな状況でも可能な限りのポテンシャルを発揮し、常に最大の戦果を上げるだろう。しかし、レヴィは違う。

マスターの一挙一動に必要以上に反応してしまう。痛みを感じてその手に迷いが生じてしまう。人間らしさという無駄たちが今、機械仕掛けの少女を苦しめていた。

「いだぐ、ない……」

ゆっくりと首を振り、引き攣った笑みを浮かべるレヴィアंकロウ。

「だいじょうぶ……」

それがどうしようもなく悲しくて、ウラは首を横に振り拳を床に叩き付けた。

「もう止めてくれエッ！！ もう結果は見えただろ！？ これ以上レヴィを壊さないでっ！！ レヴィを傷つけないでえっ！！！！」

レヴィアंकロウのマスターが心の底から激しく叫ぶ敗北宣言。虚ろな瞳を浮かべるレヴィアंकロウが床の上に放り捨てられ、戦

いは決着した。

しかし同時にイクスとゼンも同時に立ち上がっていた。二人の瞳にはまだ闘志がはつきりと見て取れる。しかしR2の足がレヴィアंकクロウの額の上に軽く乗せられると、ぴたりとその動きは止まってしまうた。

あれだけ必死に。もう傷つけないでと願い叫んだ少年の思いを。二人はどうしても、裏切れない。

「マリィ……お前、何をしたいんだ？ そんな物騒な女こしらえて、めえが得たい物って何なんだよ」

「ゼン君はさ、どっちの味方なの？ 世界を救うのなら私に付くべきべきでしょ……？ 感情と現実と、秤に乗せて考えて見てよ」

「冗談抜かすな。俺の秤は常に片側が地べたにくつついてるぜ。感情突き通せねえ現実なんぞクソ食らえだ」

「そう、言うだろうと思ってたよ。だから、R2——。二人とも、もう追ってこないようにしちやってよ」

頷く事も返事もなく、R2の身体が動く。刹那、二人は別々の方向に跳んでいた。

認識するよりも早くゼンはナイフを、イクスは拳銃を抜き、迫るR2に備える。しかし振り返るより早く、R2は二人の腕を掴み上げていた。

「はや——っ!？」

左右のゼンとイクスを同時に持ち上げ、反対方向に投げ飛ばすR2。機動兵器さえ倒す二人が一瞬で宙を舞い、左右の金属壁には大き

な窪みが生まれた。

鉄の塊に高速でたたきつけられれば人間はもうそれだけで命を落とす程のダメージを受ける事になる。意識が跳びそうな痛みの直後、

二人は床の上に無様に倒れこむ。

二人が血を流し倒れる様を眺め、ウラは震えていた。それは彼に勇気がなかったわけではない。R2という圧倒的に無慈悲な殺意に立ち向かう事など、本能が『やめておけ』と絶叫する。

たかだか十代そここの少年がそんな力に立ち向かう事など出来るはずもない。しかしそれでも、ウラは必死に自分に言い聞かせる。今まではずっと、諦めの言葉を聞かせていた自分の心を奮い立たせ、必死に、必死に。目をきつく瞑り、手にしたのは拳銃だった。

「もう、止める……っ!!」

小さな拳銃が。R2は絶対に倒せないその拳銃が、マリーに向けられていた。

動き出そうとするR2を片手で静止し、マリーはあえて前に出る。

銃口を向けられた女は自らの額を指差し、にっこりと微笑んだ。

「——撃つていいよ、ウラ君。君にその、覚悟があるのならば」

心臓さえ止まりそうな、時が凍りつきそうな瞬間。

ウラの手は小刻みに震えていた。それは人の命を奪うという事を彼の心が必死に阻んでいる証だった。

マリーという人間を知り、その行いの向こう側にある不確かな彼女の想いを知ってしまったウラ。ただ憎しみと衝動にかまけて引き金を引く事が出来なかったのは、皮肉にも冷静に思考が可能なほどに成熟していた彼の心の所為。

そう、それは出鱈目に引いていいものではない。二つの境界線を、

罪を知る者と知らない者との間を二分する引き金。

甘さであると誰もが指を刺し笑うだろう。　本当に大切な物が三つ、目の前で失われようとしているのに何を躊躇うのか、と。

しかしそれでもその戸惑いこそがウラの美徳であり、そして彼がレヴィアंकロウのマスター足る証でもあるだろう。

「さあ、どうしたの？　私を止められなかったら、今この瞬間だけだよ。　私は生身の人間、体力もなにもないし避けるなんて絶対無理。　それでも殺さないの？」

「ぼ、ボクは……………」

「君が決意できないなら私が促してあげる。　瞳を閉じて、十数えるから。　あなたはそれに合わせて引き金を引けばいい」

誰もがその景色に目を奪われいていた。　かつての世界の中心で、清らかな声で数字を唱えるマリィ。

それと相対し、両手で必死に握り締めた銀色の刃に迷いを乗せるウラ。　緊張は少年の呼吸を乱し、その双肩にずっしりと押し掛かる。

「十」

そう、確かにこれは二度と巡って来る事はないであろう一発逆転の瞬間である。

R2という絶対的な力を屈服させる手段を持たないこの刹那、ただ一つの指先が運命を左右する。

「九」

レヴィアंकロウ。　イクス。　ゼン。　三人ともウラにとって掛

け替えのない仲間であり、友であり、家族であり――。当然、自ら手を汚してでも守らねばならないもの。そのくらいの覚悟は持つてこの銃を受け取ったはず。

「八」

それでも尚指先を石のように重くしているのは何か。戸惑い――。マリーが見せた涙が忘れられない。

「七」

安易に引くべきではないその引き金を、大きな目的の為に引く――。理由をずっと求めてきた少年にとって今、引き金を引くに足る理由は腐るほどある。

それでも尚、汗は止まらず呼吸は喧しい。引つかかっている物は何か、考えねばならない。

「六」

イクス。突然の出会いと共に現れた不思議な女性。良くも悪くも少年の理解者であり、保護者であり、そして始めての仲間だった。

「五」

ゼン。かつての罪と自らの業を宿す大切な友。ずっと捜し求め、生きている事を信じ続けていた。それを今、失う事など絶対に許されない。

「四」

そして、レヴィアंकロウ。守ると誓った。信じると誓った。自分の全てを認め、信じてくれる彼女に絶対に応えるのだと誓ったのだ。

それなのに、血塗れで床の上に倒れてぴくりとも動かない。それは何故なのか考えねばならない。当然判りきっているその、自分が無様な所為であるという明白な理由を飲み込まねばならない。

「三」

両手を汚す事を恐れているのか。

「二」

マリーを悪と断ずる事を迷っているのか。

「一」

その、両方でもないのならば。理由は一体どこにある――？

「……………ボクは」

拳銃はゆっくりと持ち主の手をすり抜け、床の上に音を立てる。

「感情や手段や目的の為に、自分を擦じ曲げたくない……」

涙を流し、歯を食いしばり。それでも少年は我俣を口にした。

「ボクは、マリーと同じにはならない！どんなに大切な物を守る為でも、誰かを犠牲にしてそれを掴むなんて事は絶対にしたくない

つつー!!」

「そう」

銃声が一発。この出来事の終幕を告げるように、鳴り響いた。

撃ち抜かれた少年の身体がぐらりと傾き、白い床の上に倒れこむ。

目に映る様々な世界の景色を見上げ、少年は撃たれた胸に手を当てた。

「ごめん、イクス……。 ごめん、ゼン兄ちゃん。 ごめん……。 レヴィ……」

応える声は無かった。しかしそれでも少年が目を閉じるよりも早く、その身体は支えられていた。

「馬鹿野郎、謝ってんじゃねえよ」

「そうそう。好きでやってる事なんだから、謝られる謂れはないわ」

二人は血まみれになりながら、傷だらけになりながら、それでも立ち上がっていた。

徒手空拳。武器は無く、致命的なダメージを負っている二人がそれでも立ち上がった理由を挙げるならば、それは『気合』だったと言っ他にない。

その非科学的、非合理的な人間らしい衝動が、二人の足を限界を超えて動かしていた。

「まだ動くの？」

「馬鹿、舐めんじゃねえぞ。 ロケット噴射くらって生きてた俺だぜ？ これくらいでくたばるわけねーだろが」

「マリー、学習しないわね。 人間の底力は常に現実も空想さえも凌駕するのよ。 これ名言ね」

瞳は死んでいない。 何故、立ち上がるのか。 何故、軽口を叩くのか。

それは二人の大人が少年に突き動かされた瞬間だった。 熱く、愚直に。 理想と願いを口にし、必死で立ち上がる少年の姿を目にし、心が震え立たない程彼らは大人になりきれてはいなかったし、その願いをどうしても叶えてやりたくなってしまうくらいには子供を卒業していた。

子供が一生懸命ならば、大人は支えなければならない。 たとえ愚かだろうとも無意味だろうとも、全力で立ち向かう姿を笑うのなら、それは己の過去さえも色を失くす行為。

マリーには理解出来ないその二人の行動は、しかし意外な状況の変化を促した。 R2は無言で後退し、マリーも踵を返す。

「どっちにせよ君たちに用はもう無いから。 R2、レヴィアंकロウを回収して撤収するよ」

指示通り、レヴィアंकロウを担ぎ上げるR2。 マリーの声に身体を起こし、立ち上がろうとして失敗したウラは顔面から派手に床の上に転倒する。

「待てよ……！ 行かせるわけが、ないだろが——っ！」

痛みを堪え、血まみれの爪で床を掻く。 必死に顔を上げ、レヴィアंकロウを見つめる。

「待つてろ、レヴィ……！ 言う事聞く必要なんか、無いんだ……！ やりたくない事を……！ 無理を強制される必要なんか無い！ 他人が強いた運命に、従うなんて……っ」

「私は大丈夫です、ウラ」

R2に担がれた姿のまま、少女は笑っていた。無言で足を止め、R2を静止するマリィ。その表情はウラたちには見えなかったが、どこか寂しげであった。

「貴方と過ごせた時間は、余りにも短かったけど……。それでも、私はその間だけでも、人間という物を知る事が、出来たと思います」

「……待つてよ」

「それにもう、ウラは一人ではありません。イクスや……ゼン。きつと彼らが貴方を支えてくれる。寂しい夜も、乗り切れない過去も……一緒に越えてくれる。本当は、そこに……私が並んであげたかったけれど……でも、大丈夫です」

「待つて……。 何だよ、それ……」

「ウラ、貴方は私の本当のマスターでした……。 貴方以外は考えられない。 貴方だったからこそ、私は此処に居た。 貴方と共に歩めた事を、私は誇りに思う」

「黙れよ！ 何勝手に諦めて語ってん、だよ……っ！！ 人間になるんだろ！？ 何の為に一緒にやってきたんだよ！？ おいしい……！！」

「さようなら——。 たった一人の、私のウラ」

微笑が遠ざかっていく。 少年は痛みも忘れ、必死に立ち上がる。その度に傷口から血が流れ出し、しかしそれさえも気にせず、震える足で追いかける。

「行かせないって行つてんだろ……！ 何が本物のマスターだ、ふざけんなよ！ 本物探すんだろうが！ これから、一緒に……っ。 お腹空いたでしょ……料理作ってあげるから帰ろうよ。 もうめんどくさいなんて思わないからさあ……！ もっと話したい事沢山あるんだよおっ……！」

R2の足にしがみ付いた少年は必死に少女に訴えかける。 しかし、R2は軽々と少年を振りほどき、その度に少年は床の上をのた打ち回る。

見るにかなない無様な光景だった。 しかしそれでも、レヴィは唇をかみ締め、じっと見つめていた。 作り物の瞳からぼろぼろと涙が零れ落ち、きつく瞼を閉じる。

「待つてよマリー……。 大事なんだよ、ボクには彼女が必要なんだよ……。 一番大事な物を、奪わないでよ……。 返して……！ レヴィを返してよおっ……！」

「もう、いいんです……。っ！ いいんです、ウラ……。っ」

「お前が良くてもボクが良くないんだよ、わかんないやつだな……。 振り払われても何度も立ち上がり、その度に倒れそうになる足に必死に鞭を打つ。 痛々しいその姿を、レヴィアंकローはもう見て

いられなかった。

「服も新しいの買ってやるよ……。壊れたところも直してあげる。ボク、それくらいの事は出来るから……。今、連れ帰るか、ら……」

伸ばした指先は届かず、小さな身体は床の上に音を立てて倒れた。

それが、決着以外の何かであるというのならは何であるだろうか。少年はそれでも、意識を失いかけて尚、その手を伸ばす。ゆつくりと、指先が力なく伸び、大地に伏して。去っていく姿をゼンもイクスもただ見送るしか出来なかった。これ以上無理をさせればウラが死んでしまう事は間違いの無い事実だったから。

重く扉が閉ざされ、少女の姿は見えなくなった。

「レ、ヴィ……」

うわ言のように呟いた少年の一言が、ただただ空しく白い空間に木霊した。

大切な物を守れなかった夜が明けて、一週間が経った。

世界は少しずつ変化を始め、ボクらの知るその全様とは少しずつ齟齬が発生していた。

気づけば街には定期的に地震が発生、時々床が抜ける。地下空間から来るらしいそれらの揺れは破滅的なボクらの未来を象徴しているかのようだった。

自分たちの身に迫っている危機に街の人たちは相変わらず鈍感で、自分は世界と繋がっていないような顔をする。人波の中を縫うように歩く自分も、きつとレヴィに出会うまでは同じ顔をしていた。

薄く、街を覆う靄は人々の目を曇らせ、繋がりを薄めていく。吐く息は白く曇り空に上って、沢山の同じそれと一つになる。

気象管理も行き届かなくなり始めたこの街に、本当の意味での冬が訪れた。コートを翻し、両手に抱えた紙袋を持ち直す。

時間がないことは判っていた。焦っているという自覚はある。

それでも取り繕ってボクは落ち着きを自分に求める。そうしなければ、冷静にならなければ、大切なものは守れないから。

何故あの時引き金を引く事が出来なかったのかと、毎日のように自分に問いかける。その答えが出るよりも早く自分自身に次の行動を急かし、ボクはまだ生きている。

大切なものを失った胸にぽっかりと空いた大穴はどうしたって埋められないから。それを埋めるために、生きている限り出来る全てをボクは行う。自分自身に出来る、最高の戦い方で。

工房の扉を潜り、紙袋から取り出したパンを齧りながら地下への扉を開け放つ。かつては忌まわしい記憶へと続いていた暗い階段も、今は希望へ続いている。

「だーから！ そっちは違うつてさっきから言ってるでしょ！？
資材の移動さえ満足に出来ないわけ、あんたは！？」

「うつせえな！ だったらテメーでやれつつうの！ そもそも『あ
つち』だの『こつち』だの言われても、荷物デカすぎて見えねーん
だよー！」

地下空間に響き渡る大人気ない二人の声に苦笑を浮かべながら広場
へ移動。そこには沢山の資材に囲まれて何やら言い争うイクスと
ゼン兄ちゃんの姿があった。

「朝から元気だね二人とも。朝食買つて来たけど、食べる？」

「あら、おはようウラ。ていうかあんた昨日寝たの？ 一晚中こ
こに居たんじゃないでしょうね」

「多少寝なくても平気だよ。それに残念ながら体調は絶好調なん
だ。不思議と身体が軽くてね。力が満ちてくる」

心配そうなイクスに微笑を返し、木製の古ぼけたテーブルの上に紙
袋を置いた。

あれから一週間。ボクは自分の手で再び過去と向き合う事を決め
た。

あの日、完成させる事を諦めて忘れようとした夢の名残。作りか
けのロケットを見上げ、自分に喝を入れる。

「さあ、今日も頑張ろう」

冷たい銀色のボディに触れ、彼女に想いを馳せる。

レヴィが宇宙に行ってしまったから、一晚と一週間が経過していた。

REV・12

レヴィが居なくなってしまった夜の事をボクは覚えていない。

ただ記憶に残っているのは血の匂いと激しい痛みと苦い記憶。必死になって守ろうとした物はあっけなく指先をすり抜けてしまった。目を覚ましてからもしばらくの間ボクは何も考えられなかった。

激しい喪失感はある自身の存在さえも危うくするほどボクを追い詰め、食事さえ喉を通らなかった。

ボクは三日間眠り通しで、その間ずっとイクスが看病をしてくれていたらしい。でも、『ありがとう』という言葉さえボクは言えな

いまま、ただただ落ち込み続けた。そうして何もしままま丸二日程が過ぎた頃、イクスはボクに今の世界の状況を教えてくれた。

あの夜ボクらが無事にFRESから脱出出来たのは、FRES内に殆ど人が居なくなっていたかららしい。そしてその理由はその後判明する。

街では地震が頻発し始め、それは日を追う事に頻度を増していく。

街中の大地が少しずつ陥没し、イクスは街がいつか崩れて滅ぶだろうとボクに語った。

街の外に出る事を許されているFRESと政府の上層部は、とつくに街を捨てて外に避難していたらしく、政府からの発表は当然な

まま、FRESという会社が蛻の殻になっているという事実も知られないまま、街は今日も平然と稼動を続けていた。

「オズワルドが、FRESは宇宙空間に移動しただろうって言うてたわ。恐らくレヴィも宇宙だろうって」

それは事実上、諦めろと言う意味を持っていた。　街の外に出る方法など、ボクらにはない。

オズワルド率いるOZはFRES残党との戦闘、宇宙空間への追撃を開始するらしい。　そしてボクらに出来る事は何もなくなった。

安宿のベッドの上、ボクは泣いた。　何時間も何時間も泣き続けた。

一生分くらい泣いたんじゃないかと思う程止まらなかった涙。

レヴィはもう、この世界に居なくなってしまった。　その事實は、余りにも辛すぎて。

良かった事しか思い出せず、何故か脳裏を過ぎる笑顔の景色が胸を深く切り刻んで行く。　本当に大切だったはずなのに、無力だったから。　ボクに力がなかったから、守ってあげる事が出来なかった。イクスはボクを慰めなかった。　それが意味のない事だときつと彼女は判っていたのだと思う。　どうしようもなくやりきれない空気だけが残され、ボクらは完全に諦めかけていた。　そんなボくらにとんでもない提案をしたのがゼン兄ちゃんだった。　落ち込みきった空気の部屋に飛び込んできて、彼はボクの胸倉を掴み上げて行った。

「よし。　ちよつくら宇宙まで行くぞ、ウラ」

「……………はっ？」

シリアスな空気もどこへやら。　思わず素っ頓狂な声を上げてしまったのはボクだけではなくイクスもそうだった。

さっさと荷物を纏め始め、ベッドからボクを引っ張り出し、強引に担ぎ上げて歩き出すゼン兄ちゃん。　昔ならまだしも今これは余りにも恥ずかしいと嫌がるボクに、彼は視線を合わせずに行った。

「本当に大事なら、助けに行こう。　心配すんな、お前は十分強い

ぜ？ あれだけ必死になれるくらいあの女が好きなら、命を懸けて全力で——自分に出来る全てでぶつかって見る」

「す、好きな女って……！ そうじゃないよ！ それに、宇宙なんてどうやって行くんだよ！？」

「行けるだろうが。俺と、お前と。二人そろえば出来ない事なんてないぜ、相棒」

その、強くボクの背を押すような無邪気な笑顔が忘れていた記憶を呼び覚ます。

二人だけで此处ではない何処か、世界の向こうへ行こうと語り合ったあの日々。あの時もゼン兄ちゃんをよく同じ事を口にしていただから容易に思い出せたそれに、ボクは思わず目を丸くする。確かに方法は。手段は。最初からあったんだ。

「……………本気でやるつもりなの、ゼン兄ちゃん？」

「俺はいつでも本気だ。殆ど完成しているあのロケットはな、今の俺たちなら直ぐに飛ばせるはずだぜ」

「そんな単純じゃないよ……？ それにもうずっと長い間手入れしなかったから、どうなってるのかもわからないし」

「それでも他に手段ねーじゃねえか！ お前はいつもうだうだ考えすぎなんだよ！ 文句言うなら代案出せコラ」

「う……。確かに言う通りだけどさ……」

「ならまずやる。それから後で駄目なら考えようぜ？ 諦めて足

踏みして、泣いていたって明日は来ないんだ」

片腕で担がれながら、ボクは思わず微笑んでいた。ゼン兄ちゃん
は昔から馬鹿で、本当に滅茶苦茶を言う。でもその言葉を聴いて
いると本当に出来そうな気がしてくるから不思議だ。

レヴィも言っていた。今のボクはもう一人じゃない。だから一
人で考え込んで落ち込んで、泣いていたってしょうがないんだ。

「それは判ったけど、そろそろ下ろしてよ……。人目がかなり気
になって恥ずかしいんだけど」

「気にするな」

「いや、だからそっちが気にしなくてもこっちが気にするんだよ！」

「ちょっとー！男同士で絡んで置いてくんじゃないわよっ！あ
んなたちさっきから何の話してんのよーっ！！」

イクスが遠くから走って追いかけてくる。何故かボクらも笑いな
がら走って逃げた。

それから、ボクらの夢の続きが始まったんだ。

「……………んんっ！？おめえ、まさかイクスカ！？」

「あら、お爺ちゃん？」

そして、色々と驚く事が続発した。

まず、うちの工房のじいさんがイクスの祖父だったという事。じ
いさんにしてみれば死んだと思っていたゼンと一緒に行方不明だっ
た孫娘が現れたのだから、相当な衝撃だっただろう。

その上ボクらはぼろぼろで、包帯塗れの血塗れで。だからじいさんは話を真剣に聞いてくれた。この数日間の出来事、そしてレヴィを失った事。宇宙へ行きたいという事。

掻い摘んで話したはずなのに話は何時間も続いた。工房の二階の部屋、狭いスペースに四人で座って語り合う。全てを聞き終えたじいさんは今まで見たことがないような真剣な表情を浮かべ、ボクの名を呼んだ。

「お前の両親はな。『アース』の科学者だった。ワシの弟子でもある。で、ワシは先々代の『アース』のリーダーを務めとった」

また唐突な話だった。

「『アース』は街を解放する事を求めた組織だが、その本質は街そのものではなく人の歴史や過去、人々の認識の解放だった。お前らは深く意識した事はないかもしれないが、街の地下は積層された街の残骸で構成されておる。崩れたらその上にまた街を——そうして継ぎ足して何百、何千という時間を人間はこの狭い世界で生きてきた。だが、お陰で足場はガタガタ。いつ崩れるか判らん世界の上に危機感のない人間と自分だけ逃げ出すつもりで宇宙開発を進める政府。ワシら『アース』はそうした世界のおかしな流れに——矢報いるために結成された」

アースは政府に対する抗争の他、地下空間の探索も行っていたらしい。何故ならば地下にはかつての世界の歴史が眠っているからだ。当時はまだ政府が宇宙への出入りを深く規制していなかった所為か、アースも宇宙空間へ出る事があったらしい。そんな中、たまたま宇宙へ出ていたボクの両親が発見した物が、アースという組織の運命を変えてしまった。

「『棺』じゃった。中身はなんだかわからなかったが、それはずっと昔から暗闇の中を漂ってたんだろうなあ。だが、それは政府やF R E S、O Zが捜し求めていた代物じゃった。棺の中身もわからないまま、手に入れてしまったアースは突然F R E Sの掃討作戦を受け壊滅した。ウラの両親も、ワシの息子——前リーダーであるイクスの父親も、その時命を落とした。構成員殆どが命を落とした中、イクスはたまたま引退したワシの元に遊びに来ておったから生き延びる事が出来た。だがもう一人、その時生き延びた子供が居た」

それがボクだったらしい。生まれたばかりの赤ん坊だったボクは何故かその掃討作戦を生き延びた。

その後、F R E Sに確保されたらしいボクを奪って命からがら逃げ帰ってきたイクスの母親がじいさんにボクを託し、その人も命を落として現在に至るらしい。

「父さんは棺の中身に世界を救う手立てがあると信じていた。あたしはその中身が知りたくてF R E Sに入社したの。身分を偽って、ね。それも母さんが死んでしまった後だったから、すぐこの工房を出てしまったあたしはウラの事は全然知らなかったわね」

十四年前、十歳の少女だったイクスはその天才的頭脳で見事F R E Sへの入社を果たした。彼女はその瞬間からたった一人アースという組織を受け継ぎ、そしてじいさんとイクスは離れ離れになった。

「ウラの元に棺から出てきたあの娘っ子が現れた時は、来るべき時が来たと思ったもんだ。だからもう、驚かんよ。あれはきつと、本当に世界を変える娘っ子だったんだろうな」

「じいさんがボクに両親の話をしなかったのは……？」

「『アース』の存在を抜きに語れる自信がなくなてな。真実を知ればお前はもしかしたらFRESに復讐しようと思ひ出すかもしれん。その馬鹿孫のようにな。無茶ばかりさせて厳しくしごいた弟子は、本当の息子みたいなもんだった……。だからウラ。ワシにとってお前は、本当の孫みたいなもんだ。騙していると判つていても、本当の事は言えんかった」

「いや、ありがとうじいさん。本当の事を話してくれて。これですっきりしたよ」

じいさんは本当にボクの身を案じてくれたのだろう。実の孫であるイクスを止められなかった事も関係しているのだろうが、彼の思い遣りが本物だったことは間違いない。

ボクがトレジャーなんていうヤクザな仕事をしていてもじいさんは文句一つ言わずに応援してくれた。気づいていなかっただけで大切な人は身近に沢山いたんだ。ボクは一人なんかじゃなかった。本当は誰だってそうなんだ。見ようとしただけで、街行く誰もが本当は大切な人に守られている。それに気づけたという事は、とても素敵な事なのかも知れない。それにしても、イクスがじいさんの孫か。二人とも天才肌の科学者なのに、妙にパワフルだ。大型拳銃ぶっぱなす孫娘のじいさんは、ムツキムキのアスリートみたいな身体つきでも確におかしくはない気がする。

「そうになると、俺ら三人兄弟みたいなものなんだな。じいさんに育てられた俺たちと、本物の孫娘のイクスカ」

「そうみたいね。奇妙な縁だわ」

「うん。ほんと、変な偶然」

ボクら三人がうんうんと頷いていると、じいさんは首を横に振った。

「わかつとらんな、お前らは。　　こういう偶然はな？　運命——と、呼んだりするんだよ」

顔を見合わせ、ボクらは笑った。

何はともあれこれだけ関連性があると色々と説明する手間は省けた。ボクら四人は直ぐに地下に向かい、ロケットを覆っていた布を数年ぶりに解き放った。

そのはずなのにロケットはとても長年放置されていたようには見えない程丹念に整備されていた。あの事故の日からずっと、じいさんが暇を見て整備してくれたらしい。

夢を諦めて落ち込むボクらがいつの日か、再び火を点す日を彼は信じていた。　　どうしてそこまで何かを信じられるのだろつという疑問が脳裏を過ぎり、しかしボクは考えるのを止めた。

たぶんきつと、そういうものなのだと思うから。　　家族や、親友と　　いうものは——。

「まったく、暇なら爺が仕上げてくれりゃ良かったのによ」

「馬鹿言わない。　　てめえは戻ってきてても相変わらずクソ生意気なまんまだな、ゼン坊」

「まあ、天才のあたしが一緒なんだし何とかなるんじゃないかしら。　　これでも元宇宙開発のプロだし」

「うん。　　皆で力を合わせれば大丈夫。　　きつと、完成する。　　そう、信じてる」

皆を、レヴィを、自分を。強く信じているから、きっと成し遂げられる。

ボクはそれから寝る間も惜しんで作業に没頭した。数年間のブランクを埋めるのは一瞬で済み、次々とあの頃の思い出が脳裏を過ぎっていく。

夢中になって作業を進めている間は何もかも忘れ、ただただレヴィの笑顔だけを思い浮かべた。不思議と笑みが零れ、力が沸いて来る。

嘆くより前に、考えるより前に、ボクは行動する事にした。今の自分に出来る事は、もうこれしか思いつかないから。

毎日毎日くたくたになって倒れるまで作業を進め、少しだけ休んで作業を再開する。銃で撃たれた傷口が激しく痛み、時々どうしようもなく手が止まってしまいう時がある。

ゼン兄ちゃんもイクスもあちこち骨が折れていて重傷のはずなのに、我慢してボクに付き合ってくれた。無理をすれば死ぬかもしれないと考えるより早く、ボクの手はもつともつと先へ進みたがる。

傷から滲み出る血がシャツを染めても、ボクは手を休めない。レヴィはもつと辛かったはずだから。もつと痛かったはずだから。

そうして一日、また一日と時が過ぎ、ボクらの間には共通の意思と明日への希望が芽生えていた。一つの目的の為に努力するうちに、不思議な一体感が生まれていた。

最初は言い争っていた大人二人も気づけばチームワークが良くなり、ボクらの作業はどんどんペースアップする。結局完成に漕ぎ着けたのはレヴィが居なくなってから二週間後の夜の事だった。

「……………出来た」

最後のチェックを終え、思わず思い切り床の上に倒れこむ。どっ

と溢れ返った全身の疲労感は尋常ではなく、しかしそれでもどこか清清しかった。

イクスはいつの間にか端末を操作したまま眠ってしまっていた。そのあどけない表情に思わず苦笑していると、ゼン兄ちゃんがその華奢な肩に上着を掛けた。

「優しいんだね」

「ふん、まあな。 ようやく完成したんだ、少しくらい労ってやつてもバチは当たらねえだろ」

倒れこんだままのボクの隣に胡坐をかき、兄ちゃんはシャトルを見上げていた。 長い長い間、ボクらはそれを見上げ続けてきた。

この場所に立たずとも、どんなに時が過ぎても。 停止していた時間が動き出し、同時に子供の頃の記憶が蘇る。

そんな、淡い夢の欠片が。 届かなかった空への手が、今ボクに残された唯一の希望になっている。 皮肉な物だと思う。 とても、それは皮肉な事だと。

「明日、成功するかな」

「やってみなくちゃわからないさ。 だが、俺はお前を信じてるぜ、ウラ」

強く笑う兄ちゃんの横顔。 身体を起こし膝を抱え、ボクは静かに目を伏せる。

「あの時……。 ボクのミスの所為で兄ちゃんが居なくなっただ事、すごく後悔してたんだ。 どうしようもなく、前に進めなくなっただ。 今更それを言っても仕方がないって、兄ちゃんは笑うかもしれない」

いけどさ」

「ああ。まあ確かに、笑い話だな」

「でもボク、今本当に嬉しいんだ。兄ちゃんとまたロケット作って、打ち上げられるなんてさ。だからあの時の事、謝って置こうと思って――」

「――俺を兄ちゃんと呼ぶのはもう止めろ」

言葉を遮るように言うと、彼は真っ直ぐにボクの目を見る。

「もう、お前は立派だよ。精一杯努力して、明日を変えようとしている奴に大人も子供もねえ。それはとても勇敢な行為だ。俺もずっと忘れてた物に、お前に会えて気づく事が出来た。あのままFRESに居たらきつと、こんなスカつとした気分にはなれなかったろうな」

「……………ゼン」

「昔のことはうだうだ気にすんな。俺たちは今、こいつの前に立ってる。ダチ同士、いつまでの昔の事をぐちぐち言うのは水臭いぜ？」

そう言っただけで彼は手を差し伸べた。とても嬉しい事だと思った。思わず涙を流しながらボクは笑ってその手を強く握り締めた。

それからボクらはお互いの知らなかった時間を語り合い、それからロケットに名前をつける事にした。

何度も何度もボクらは意見を出し合い、結局ゼンのセンスのない意見を却下し、ボクが名前をつける事になった。

ボクらの夢を乗せる翼。そして、彼女へと続く幸せを取り戻す為の翼。

ブルーバードと名づけたそれは、ボクらがこの世界に生きた確かな証になった。

「絶対に取り戻そうぜ。絶対に、絶対にな」

「……うん。取り戻すんだ。大切な物を」

強く拳を握り締める。

例え殴りつけても相手を傷つけられない拳でもいい。

それでもボクは、自分に出来る手段で運命に抗う。

蒼穹の空へ向け、ブルーバードは飛ぶ。

ボクらが自分で選んだ戦いの舞台は、世界の向こう側へと進められた。

美しかった星が、何故滅んでしまったのか。その理由をボクらは知らない。

そこにどんな歴史があり、そしてそれを誰が受け継いでいくのか。

過去も未来もわからないボクらは、きっと無知で愚かな生き物なのだろう。

滅びは直ぐにはやってこない。平和はまだ長持ちする。けれどボクらはそれを意識せねばならない。恒久的な、永遠と呼べる世界なんて何処にもないのだから。

ならばせめて。せめて大切な物だけでも。その両手に掴んだまま、世界の終わりを過ごしたい。それはきっとボクに許された最後の願いだから。

過去も未来も進化も再生も、そんな物はどうでもいい。世界なんてどうでもいい。ただ、ボクは――！

「それじゃあ始めるけど……二人とも、本当に一緒に来るの？」

「今更何言ってんだ？」

「そうよ。あたしマリーに負けっぱなしで生きていくなんて絶対嫌よ」

「いや、そうだけさあ……」

ロケットのコックピットは恐ろしく狭かった。元々子供が二人で宇宙に行く為に設計されていた物を強引に三人乗りに改造したのだ。強度的にも設計的にも不安は尽きない。

だがまあ確かに、もうここまで来てしまったのだから仕方が無い。
ぎゅうぎゅう詰めのコックピットの中、一人操縦桿を握り締める。

「それじゃあじいさん、あの……」

『おう。 行つて来い。 ちゃんと、レヴィちゃんを助けて来るんだぞ』

部屋の隅に組み立てた急ごしらえの管制装置からくぐもつたじいさんの声が聞こえてくる。

これまた急ごしらえで手作り感溢れるインカムに手を当て、そつと目を閉じる。

なんというか、もしかしたらこれでじいさんと会う事はなくなるのかも知れないと考えると胸に何ともいえない熱い思いがこみ上げてくる。 ロケットは片道だけしか効果を發揮しないから、戻つてこられる保障は今の所全くないのだ。

だからこそ、本当に一緒に来るのかと二人にも訊ねたわけだが……もう二人がテコでも動かない事はよく判っていた。 でも、まだ、じいさんについては話が別だ。

ボクはずっと家によりつかず、じいさんともまともに話をしなかった。 覚えの無い両親の代わりにボクを育ててくれた彼に、まだな

んのお礼も出来ていない。
それでもどんな言葉をかけたらいいのか判らず言葉に詰まるボクの肩を叩き、イクスが笑った。

「言つてあげなさいよ。 それがきつと、おまじないになるわ」

「……………そうだね」

涙は見せない。 もう、ボクはさんざん泣いたから。

深く息を吸い込み、声しか届かないじいさんに向かってボクは言う。

「——行ってきます」

安全装置を解除し、エンジンを起動する。

同時にじいさんが操作を行い、空への道を塞いでいた地上へと続く真上の鉄板をいくつも移動。出来ない物は爆破して道を作る。

余りにも急ごしらえの発射台だった。操作をミスれば地上に出る前に衝突して木っ端微塵だろう。全てはボクの両手にかかっている。

それでも二人は何も言わずにボクの背を押す。そして、ボクは自分に出来る戦いを始めると誓った。だからもう迷わない。

歯を食いしばり、空に向かって放たれる衝撃に備える。それは今までの人生で体感した事のないような衝撃で、想定していなかったその激しさに思わず息が詰まる。

それでも操縦桿を必死に握り締めた。がたがたと揺れるそれを子供の両手で固定するのはとても難しく、思わず手が滑ってしまいうそになる。

そんな瞬間、背後から延びてきた二つの手がボクの両手を大きく包み込み、支えていた。左右から覗く二人に目配せし、後はもう、考えるのをやめた。

ただただ天空へ。まだ見ぬ世界へ。そしてこの世界の真実目掛け、ボクらは飛翔する。偽りの空を突き破り、宇宙へ——！

「——これが」

全てを吹き飛ばす風と白煙の晴れた向こう、空は果てしなく広がっていた。

漆黒の海に浮かぶ小さな、とても小さな街。ボクらが広いと思っ

ていた世界はとても小さくて、振り返れば呆れてしまうほど当たり前そこにある。

空は本当にハリボテだった。ただ、映像を映し出しているだけの薄い膜だった。突き破ろうと思えばいつでも突き破れてしまうような、そんなちっぽけな壁だった。

境界線なんて本当は在って無いようなものだったんだ。そんな事を漠然と考えながら、当たり前のように叶った夢でも躍らぬ心で上を見上げる。

そこには巨大な要塞があつた。ぐるぐると回転する巨大な機械の筒。暗闇の中浮かび上がるそれを見て、イクスが口を開く。

「——移民衛星フロンティア。やつらはあそこに——レヴィはあそこに居るわ」

外の世界に出るなといっておいて、自分たちは移民の為の施設を建築していた。それがこの世界の政府のやり口だった。

その大きさはボクらが世界だと思っていた物より何倍も大きくて、やりきれない思いが胸に去来する。

「突っ込むよ!!」

どうすれば中に入れるのかわからず、ボクはその巨大な筒目掛けて加速した。

二人が後ろで何か言っていたような気がしたけれど耳に届かない。

ボクは絶叫と共に敵の城に突撃した。

「あー……。イクス、ウラ……。生きてるか？」

「——何故か生きているわ。ここのところずっと自分の強運に驚かされっぱなしよ、あたし」

「き、傷口に操縦桿が当たった……。っ！」

各々の感想を述べる三人はそれぞれあられもない格好で狭すぎるコックピットの中倒れていた。

絡み合うようにして各々茫然としている中、対照的に外壁を突き破られたフロンティア内部は酷い騒動に陥っていた。鼓膜が張り裂けそうな音量で鳴り響く警報と共に二人が突き破ってきた外壁がゆっくりと閉じていく。

応急処置に過ぎなかったが、フロンティアは外部装甲を積層させているため、他の部位から装甲を移動し作業用ロボットに溶接させる事で一応の真空状態を維持する事が出来た。新たに空気が注ぎ込まれる音が部屋中に響いていたが、三人はそれに気づいていない。

「ていうかゼン……。気持ちわかるけど、いつまで胸に顔突っ込んでるつもり？」

「意図的じゃねえからっ！！　ウラ！　お前もうちよつと後ろに下がれないのかよ！？」

「だ、だってイクスのヒールが顔に食い込んで……。！」

三人のどたばた劇はしばらく続いた。コックピットの外部装甲を解放すると、三人はあっけなく外に出る事が出来た。

円柱型の形状をしたフロンティアは回転する事により外側に向かつて擬似的に重力を再現している。三人が突き破ってきた穴が今は

何故か『下』にあり、その事に戸惑いながらも準備を進める。

当然、フロンティアは強固な装甲を誇る建造物である。音速を超えるスピートで吹き飛んできたロケットとは言え、突き破るのは困難だ。それを突破できたのは、たまたま建築途中の進入禁止区域に三人が辿り着いた幸運のお陰であった。

「ここはまだ居住区として一般解放されてないみたいね。しかし、弾頭を強化して突撃用にしたとは言えよくもまあ本当に無事に辿り着けたもんね……」

「これ、帰りもやるの……？　ボクなんか既に憂鬱になってきたんだけど……」

「帰りは死ぬかもな、これ……」

「仕方ないでしょ？　港から入るのはまず無理だし……。港を強行突破するなんて警備レベル的に不可能よ」

「だからって壁から入るのもどうかと思うぜ。まあ、判りやすくて俺は好きだが」

「ボクもややこしいのはもうなんかめんどくさいからいい……。それより早くレヴィを探さなきゃ！」

「はい、ストロップ。少年、どこに行くつもり？」

「だから、レヴィの所に……」

「あんた馬鹿ね。ゼン、荷物持って！」

頷いて装備を回収するゼンを背景にイクスは腕を組んで溜息を漏らす。

「少年、あんたの意気込みは評価するけど、真正面から挑んでもまたR2にやられるだけよ？　こういう戦いにはそれなりのやり方ってもんがあるの」

「え？　じゃあ、どうすればいいの……？」

「とにかく付いてきて。　こつちよ」

ゼンと共に荷物を担ぎイクスの後を追う。　イクスが向かう先には数々の扉があり、それらのロックを容易に解除しては先に進んでいく。

どこに向かっているのか、何をしようとしているのか。　イクスの考えは二人にはさっぱり理解出来なかった。　しかし今は他に頼るべきものがない。　大人しく続くしかなかった。

やがてしばらく移動し、警報の音も遠ざかった頃、三人が開いた扉の向こうに彼女の目的地が広がっていた。　慣れた様子で一歩踏み眼前に広がる光景に二人は目を丸くした。　出し振り返るイクスは二人を軽く手招きする。

「——ようこそ、新世界へ」

そこにあっただのは街だった。　巨大な巨大な、上下左右に果てしなく広がる街。

彼らが知る世界とは別に、空に組み立てられていた作りかけのもう一つの世界。　その存在を二人は知らなかったというのに、その街には多くの人が溢れていた。

余裕の表情でその波に混じっていくイクスに続き慌てて歩き出す二

人。何もかもがものめずらしく、視線はあちこちを往復していた。街並みの様子は確かに地上のそれと大きくは変わらない。しかしどう見ても清潔で、そしてより高性能な文化が栄えている事が見て取れる。

「い、い、イクス！ 天井に街がある！」

「円柱の内側に街があるんだから当然でしょ」

「す、すごい……。ボクらこんなのぜんぜん知らなかった……」

「くううううっ！！ やべえ、テンション上がってきたあっ！！ 探検しようぜ、探検っ！！」

「ガキかあんたたちは……。自分たちが何しに来たのか覚えてる？」

「うおおおっっ！！ マジやべえ！ 本当に俺たち世界の外に来ちまったあああっ！！ みんなっ！ 愛してるぜーっ！！ ひやっほおおっっ！！」

「わあーっ！ わあーっ！！ すごい、どうなってるの！？ 上なのの下がある！ 下なのの上があるよー！！」

「黙れっ！！」

後頭部を拳銃のグリップで殴りつけるイクス。二人は同時に頭から血を流しながら道端に転がっていた。

「自分から目立ってどうするのよ、ったく……。ほら、さっさと

来なさい。 でなきゃ置いていくわよ、馬鹿」

「「ごめんなさい……」」

声を合わせて返事をする二人。 イクスは煙草に火をつけながら歩く。

フロンティアは『世界』がもう長くは持たない事を知った政府がFRES、OZと同時に開発を始めた新世界であり、その開発は既に半世紀に渡って続けられてきた。

その世界に住むことが出来る人間は政府が選出した優秀な人材のみであり、選出されなかった人間たちは全て旧世界と共に滅ぶ事が決定していた。

そして彼らの間に余計な情報が伝わらないように政府は街を閉ざし、空という存在を忘れさせた。 杜撰な世界の管理体制も、OZとFRESが正面衝突しなかったのも、全ては裏で動いていた計画の為だった。

「フロンティアの設計にはあたしも携わっていたわ。 政府が新たに宇宙に樂園を築くつもりなら別にそれでいいと思っていたんだけどね……。 連中は地上の人間を全て見殺しにする気だっけ知ってからは、何だかやる気がなくなっちゃったのよ」

「それでイクスはFRESを抜けちゃったんだ……」

「ここには何度か来た事もあるんだけどね。 やっぱりあたしにはあのごみごみしていて汚くて、間抜け面引っさげて人が歩いている世界の方が好きなのよ」

「つーか、本当に何も知らせてないんだ……。 まあ知ったら知ったでえらい騒動になるだろうけどよ」

「うん……。世界が滅ぶなんて現実、出来ればみんな知りたくないよね……」

「だからって何も知らずに滅びを迎えるのが良いとはあたしは思わないわ。それは優しさじゃない、善意と自己満足を相手に押し付けているだけよ」

いつになく辛辣な、冷たい口調で吐き捨てるイクスの様子に二人は顔を見合わせた。

後頭部をグリップで殴られたのも、もしかしたらイクスがこの街に入ってから苛立っているからなのかもしれない。

しかしそれも致し方の無い事なのかもしれないと考えた。見渡す街に生きる人々から感じる印象は、地上のそれと変わらない。

皆与えられた幸せと現実と世界をただ受け入れているだけ。だからきつと、そこは第二の楽園だった。

「善意と自己満足の押し付け、か……。何も知らずに滅ぶのは、確かに良くねえな」

「うん。最期の瞬間が訪れるとしても、ボクは自分の望む形でそれを迎えたいからね」

「そうね……。だからこそ、止めなくちゃ。それがあたしの善意の押し付けだとしても……」

呟くように零したイクスの言葉。それは街の喧騒に掻き消され、しかしそれでも二人の耳には確かに届いていた。三人が歩き続けた先、辿り着いた広場があった。公園の意味も持ち、人々の憩いの場所となっているそこで、三人は足元を見下ろす。

何百メートルの広範囲に渡って足元にはディスプレイが映し出されていた。そこには今、フロンティアが観測している映像が絶えず輝いている。

それは、蒼い星だった。かつて人々が世界と呼び、そして打ち捨てた物。もう戻れない、二度とは帰れない、確かにあった楽園。

「『地球』——って、呼んでいたそうよ。あたしたちが済む世界……『月』よりも何番も大きくて、美しい自然が広がる星。RE Vはきつと、あの星から来たのよ」

その美しさに二人は目を奪われていた。今も尚ゆつくりと回り続けるその巨大な蒼いスフィアに。本当の意味での世界、そして楽園。帰るべき場所。

「レヴィは、あそこから来たんだね」

蒼い蒼い、とても深く鮮やかな色。そんな輝く不思議な色を持つ少女を連想し、少年は目を閉じる。

「きつと、そうなんだろうね。だってあんなに——。地球の色を切り取ったみたいに、蒼色なんだから——」

失われてしまったものからのメッセージ。

誰もが求めていた帰るべき場所への道標。

だからこそ、人は争ってでもそれを手にしようとする。

かつて、マリー・コンラッドとイクスは親友と呼び合える関係にあった。

イクスは最も優秀な頭脳を持つ科学者であり、マリーは二番手なが

らも卓越した技術を持ち、二人はお互いを刺激し合い成長し、認め合う事の出来る存在だった。

幼い頃からマリーと共にあった二人は同じ年であるという事もあり、常に一緒だった。イクスの一生涯の内、最も多くの時間を共に過ごした相手。それがマリー・コンラッドだった。

二人とも宇宙開発特務室に勤務する事になってからもその間柄は変わらず良好で、フロンティアの建造、そしてゆくゆくは母なる星、地球への移民さえ視野に入れていた。

「どうして地球に近づく事が出来ないのかしら……」

「たぶん、地球の周囲にエネルギーフィールドが展開されてるからだと思う。大昔に私たちのご先祖様がやっただろうね。絶対に地球に戻れないようにって」

「そんなに人間は地球に望まれていないのかしら……。いえ、望んでいなかったのは人類の方かもしれないわね……」

白衣を翻し、壁に背を預けたため息を漏らすイクス。そんなイクスの様子を見つめ、マリーは優しく微笑んでいた。

「……大昔の人は、どうして地球を捨てちゃったのかな。それとも、地球から逃げ出したかったのかな」

「地球から……逃げる？」

「とてもきれいで、とてもまぶしくて。すごく純粋な存在から、目を逸らしたかったのかもしれない。自分たちはそこに相應しくない、って。だから私たちは今、ここにいるのかもしれない」

「あたしは月の暮らしも結構好きよ。でも、続けていられないのならばどうにかしなきゃ。いつこの世界が終わってしまうのかさえ判らないなら、急いで手を打たないとね」

「……………ねえ、イクス」

マグカップを手に取りコーヒーを口にしたイクスにマリーは視線を向けずに問いかける。

「聞いてみたいね……。どうして人間が、地球を捨てちゃったのか」

「……………それを知ったところでどうなるわけでもないんじゃない？」

「うん、そうだね。それでも知りたいよ。あの星の事……………」
「もっともっと、知りたいよ」

暖かい湯気が立ち上るマグカップを両手で握り、寂しげに微笑むマリーの横顔。

身分を偽り、過去を偽り、何もかもを偽って生きてきたイクスにとって、真実を語れるのはマリーだけだった。

いつでも傍に居て、出来る事ならば一生共に歩きたかった友人。

だからこそ最大の敵にして、最大の障害となる。

お互いの手は知り尽くしている。アースという組織の事も、自分の過去も、知るものはマリーしかない。

そしてその腕も、発想も、全てはお見通し。何故ならマリーは常にイクスの背を見て歩いてきたのだから。

二人の道が分かれたれて早くも数年。変わってしまったのはきつとお互い様だろう。今更相手に何かを言える程距離は近くなく、それを割り切れる程遠くも無い。

正しいかどうか、それが善なのか悪なのか。それは考えても答えの出ない問いだろう。それでもイクスは胸を痛める。

ウラやゼンと共に此処まで来て、勿論レヴィアंकロウは救い出したい。それでも、彼女が救いたい物は一つではなかった。

あの日、あの場所で拳銃を突きつけたイクスが引き金を引けなかったその理由を、きつとマリーは見透かしていた。

そう思い、確信に至る程、イクスはマリーを理解している。信念が二人の袂を別った今でも……。

「イクス」

「えっ？ な、何？」

「らしくねえな。緊張してんのか？ 妙にしおらしい顔になってんぞ」

突然ゼンに頬を引っ張られ、思わず顔が赤くなる。

その手を振り払い、腕を組んでそっぽを向く。過去を思い返しているうちに気づけば随分と進んでしまっていた。

「なんでもないわよ……。あんたたちには関係のない事よ」

「それ、イクスが言う台詞とは思えないよね」

「ウラの言う通りだぜ。あんたこそ俺たちには関係ねえだろ。

それでもあんたは一緒に来てくれた。仲間じゃねえか、そんなにツンツンするなよ」

「ツンツンなんてしてないでしょ！」

「あはは。イクスはそれくらいの方が丁度いいよね」

「だな。ほら、さっさと行くぜ！決着、つけるんだろ？」

振り返り微笑みゼンの横顔。思わず笑みが零れ、深く紫煙を吐き出した。

「そうね」

三人が目指す景色の先、聳え立つ塔があった。

物語の終わりを告げる再生と進化の塔。イクスはそれを見上げ、静かに思い出と共に息を付く。

本当に大切な瞬間に、迷ってしまわないように。

「行くわよ！ 作戦はあたしに任せなさい！」

強く言い放ち、走り出す。

物語の終わりが近づいていた。

遙か彼方、地球を望むその場所にレヴィアंकローは礫にされていた。

フロンティアの塔。その最上階に広がる空間の向こうには巨大な地球が回転し、まるで聖堂のようなその場所でR2はレヴィアंकローを見上げていた。

「……………R2、と言いましたか。貴方はマリーをマスターとして認めているのですか？ もう一人の私……。意思もなく、誰かに従って生きるのは楽しいですか？」

無論R2は答えない。レヴィアंकローを模造して生み出されたとは言え、そこにレヴィアंकローのような感情を初めとする無駄な要素は一切存在しない。微動だにせずただ静かにレヴィアंकローを見上げる黒い影。それでもレヴィアंकローは小さく語りかける。

「貴方が生まれてきたのは……。そうして誰かの言い成りになって、両手を血で染める事なのですか？」

レヴィアंकローの言葉を耳にし、R2はゆっくりとした動作で自らの両手を見下ろす。

その白すぎる指先からは絶え間なく鮮血が零れ落ち、白い部屋に赤い血溜まりを作っていく。

振り返るその先には夥しい量の血に染められた死体が転がっていた。

このフロンティアを制御する人間たちを殺戮するように命じられ、政府もFRESという会社さえも破壊し、R2はただマリーの言葉に全て従ってきた。

背後に広がるのは血に染まった悲しい道。それでもR2は何も感じてはいない。主が世界の全てを裏切り、破滅を誘う存在であるとしても、彼女には関係がなかった。

再びバイザー越しに触れ合う二人の視線。レヴィアंकローはそっと目を細め、涙を流した。

「……悲しいのね、貴方は」

R2には理解出来ないその暖かく頬を伝う何か。ただそれをじっと見つめ、記録する。

「無駄なことだよ、レヴィ。その子は感情なんて持っていないし、自分の意思なんて存在しない。お人形にいくら話しかけたって意味なんかないでしょ？」

扉が開き、光の中から現れたマリィが笑う。そのマリィを見下ろし、レヴィはR2を見ると同じく悲しげな色を宿した瞳で言った。

「FRESでも、人類の為でもなく……。それでは貴方がしようとしている事は……？何が望みなのですか？」

「知りたいの」

冷たい瞳が地球を見下ろす。

「ただ、知りたかっただけ」

そして見上げた視線は悲しく笑い、レヴィアंकローを捕らえる。

「貴方ならそれに答えてくれるのでしょうか？だから私は、貴方を

使つて扉を開くの」

両手を広げ、にっこりと微笑むその姿はどこか背徳的で、かつ狂気に満ちている。

「レヴィアंकロウ、貴方は歴史なの。人の声。魂。時の記録。世界の答え。それら全てを凝縮した存在。そして、地球への道を開く鍵になる。先人が星を閉ざしたのは何故？先人が貴方を残したのは何故？ねえ、それを知る事が出来たら……またあの蒼い星で生きてもいいよね」

「可哀想な人……」

レヴィの呟きにマリーの表情が固まった。

「貴方はとても可哀想です、マリー……。何故貴方が、人という生き物全ての責任を背負おうとしているのですか？貴方一人が背負うべきものではなく、それは人類皆で悩み苦しみ考えるべきものでしょう」

「……………」

高く広げていた両手がだらりと落ち、レヴィに背を向けたマリーは首を横に振る。

「誰も、考えないからだよ。苦しみも悲しみも。未来も過去も、皆忘れちゃってるから。だからそれを思い出させなきゃならない。これから人が生きていく為に」

「貴方の理由は、それだけですか……？」

思わず唇をかみ締め、拳を振るわせるマリィ。その唇が何かを紡ぎだそうとした瞬間、異変は起こった。

鳴り響く警報。直ぐに端末に問い合わせると、塔の内部に侵入者が現れた事がわかる。その見知った三つの顔に思わずマリィは声を震わせる。

「どうして、追って来ちゃうの……っ」

目に溜めた涙を拭う事も泣く、マリィは警戒システムを作動させる。ありとあらゆる隔壁を封鎖し、何人たりとも立ち入れない。塔内部のあらゆる警備システムを総動員し、侵入者の排除を行う。

「R2！ レヴィアンクロウからのダウンロードを急いで！」

R2がじつとレヴィィを見つめたままその場で立ち尽くしていた理由。それはレヴィアンクロウと直接接続する事により、そのデータを吸い出している所為であった。

つまりその間、僅かな時間と言えどもR2は戦闘を行う事が出来ない。既に何日も続けられているダウンロードがもう直ぐ終了するという時にやってきた侵入者の間の悪さに上品なマリィでも舌打ちをしたくなる。

そして一生懸命に閉じ続ける隔壁が次々とこじ開けられ、監視カメラが封じられていく事に気づいた時、マリィの指先は止まっていた。

「……………えっ？」

思わず冷や汗が零れ落ちる。もう一度コントロールシステムにアクセスしようとした瞬間、権利者権限によってそれが封じられてい

る事実を知る。

状況を飲み込めないマリイの視線の先、まだ生きている監視カメラに警備のロボットを破壊して突き進むイクスの姿が見えた。

「どう、して……？」

マリイは知っていた。かつてこの塔——フロンティアのコントロールルームの警備プログラムを組んだのは他でもないイクスであったことを。

その天才がくみ上げた警備プログラムに、マリイは自分の持てる力全てを注ぎ込み強化を済ませていた。およそどんな天才でさえ難解なその障壁は、少なくともダウンロードまでの時間を稼ぐには十分すぎるはずだった。

それが目の前で見える見る内に書き換えられていくではないか。ありえない状況に瞳が揺れ、息が詰まる。

「何が……何が起きているの!？」

改変を阻止しようと必死で立ち向かうマリイ。目には見えないところで何者かが戦いを挑んできている。

その相手の持つ力は恐ろしく強固で、凄まじい勢いを持っている。

目には見えない気迫に圧され、もう一度カメラを見る。

そこには確かに稀代の天才イクスの姿があった。隣ではゼンがナイフでロボットを切断している。

おかしい。おかしい。おかしい。相手が天才イクスであればまだ話はわかる。それでもありえないこの状況にある程度の信憑性を持たせる事が出来る。

それでも、相手は違う。イクスではないのなら誰と。誰と戦っているというのか。

「止まらない……！？　止められないっ！？　何で！？　どうしてっ！？」

絶叫しコンソールに両の拳を叩き付けるマリー。

そうしてたった一人だけ、思い当たる可能性が脳裏を過ぎり、自分で思い浮かべたというのに余りにも馬鹿げた仮定に思わず笑みが零れる。

ありえない。　ありえない。　ありえない。　何度でも心の中で囁くだろうその言葉。　しかし現実には確かに、彼女の中で確信される。

「嘘でしょ……？　こんな……こんな天才がいるだなんて——！」

「ゼン！　イクス！　右の隔壁を下ろすから、右側の敵は無視して！　正面を突破するよ！！　隔壁封鎖まであと十秒ッ——！」

猛然と突き進む二人の遙か後方。　管理塔の入り口付近に腰掛けインカムを装備したウラがノートパソコンを操作していた。

とても小さなノートパソコン。　そのたった一台だけで、少年は世界を壊そうとする天才に立ち向かっていた。

その両手は人間技からかけ離れたように動き続け、目は超高速で情報を捉え脳はそれを即座に処理する。

尋常ではない気迫だった。　全身汗だくになり、指が攣りそうな状況で少年は戦い続ける。　その戦い方こそ、少年に許された最後の戦場だったから。

彼は強くはない。　決して強くはない。　機械の身体も大きな武器も、技術も持ち合わせないただの子供だ。

そんな少年にも出来る事は確かにあった。　まるでこの瞬間、この時の為に神に与えられたかのような、たった一つの才能と磨き上げた努力。

ただ一つの願いを叶える為、少年は扉を叩く。懸命に、懸命に。
世界の。自分の。仲間の。未来の。過去の。そして何よ
り、彼女の――。

「――ウラ」

それは種も仕掛けもない、純粹な奇跡。
通じ合った心は確かに届いた。ケーブルなど引かずとも良い。
本当の思いは、離れていても届く。
嬉しそうに笑うレヴィアंकローを見上げ、R2の瞳は淡く輝いた
ように見えた。

REV・13

「……………末恐ろしいわね」

それはイクスの素直な感想だった。
決して容易いはずのないたった三人だけの戦い。いかにゼンと
イクスが優れた戦闘能力を持つ人間だとしても、無理という言葉が
確固たる存在感を示すこの瞬間、不可能を可能に。空想を現実に。
そんな風に変えてしまうのは、たった一人の少年だった。
残る一生の内、あと何度これだけの奇跡を目にする事が出来るだろ
うか。力が無くて。素直になれなくて。夢を捨てきれなくて。
自らを諦めていて。ただただあとは終わっていくだけの人生の
少年が、強い瞳で導く未来への道。
ただただ真っ直ぐに。背後を振り返ることはしない。イクスも
ゼンも理解しているのだ。ウラのサポートは、決して途切れない
し間違わないのだと。

多くの天才が集うF R E Sに居たイクスでさえ冷や汗をかくような天才を超える天才の存在。 神でさえ活目するこの刹那、この世の主人公は間違いなくウラだった。

「ったく、大した奴だよ！ あいつはっ！！」

「嬉しそうね、ゼン」

「ああ、嬉しいさ……！ あいつがあれだけ頑張って、一生懸命に戦ってるんだ！ 負ける気なんかこれっぽっちもしやしねえッ！！」

マリーは警戒システムを作動しているはず。それが自分の手で生み出された物であることをイクスは記憶している。

もしもこれだけの速さでそれを踏破しているとするのならば。 ウ

ラはイクスさえ越える力を持つ事になる。

その才能と実力を一体何処で拾ったのかは判らなかったが、少なくとも自分の作戦は——見立ては間違っていないかったのだとイクスは知る。

十歳にも満たない子供が、ロケットを設計して作ろうとしたという驚くべき事実。そしてその子供が作った精巧な設計図を見て、イクスは驚愕した。

一度失敗して、中断してしまった？ 当たり前だ、成功するはずがない。 子供に設計できるほど、ロケットは容易いものではないのだ。

だというのに。 それは、たった一点の失敗を除けば完璧だった。 何度見直し荒を探しても文句の点けようのない、奇跡の図面だった。

イクスは天才である。 十歳にして既に大人を凌駕する頭脳を持っていた。 イクスはその後にも勉強を怠ることはなく、成長し続けた。

しかしそれでも。成長したイクスがかつて生み出したシステムでさえも。マリーの直接操作でさえも、ウラを阻む事は出来なかった。

背筋に寒気が走るほど驚愕の事実。その片鱗にイクスは全てを賭けた。イクスの設計した防衛システムを解除するには当然イクスがそれに当たるものだろう。しかしそれでもあえてイクスはウラにそれをやらせた。

才能を見抜いたその判断も見事の一言ではあったが、それでもイクスはウラを賞賛したい気持ちでいっぱいだった。

二人がコントロールルームに辿り着くのにそう時間はかからなかった。扉を開いたイクスは拳銃を構え、マリーに駆け寄る。

「マリーイイイイ—— ツッ！！！！」

「イクス…… ツ！！ 君は、」

乾いた音が響き渡った。

思い切り平手でマリーの顔を打ちつけたイクスは様々な感情を込めた瞳でマリーを見つめ、胸倉を掴み上げる

銃に伸ばされるマリーの手をイクスは押さえつけ、抱きしめるようにマリーを拘束する。そのイクスの動作にマリーの瞳は見開かれ、そして大きく口が開かれた。

「あああつつつ！！ あーるつつつ！！！！ ダウンロード中断！！ 戦闘状態に移行つつつ！！」

「もう終わりだ、マリー……。これは時間との勝負だったんだよ」

視線の先、がくがくと全身を震わせながら膝を突き動かなくなるR2の姿があった。

火花を散らすR2の首元。そこに繋がれていたはずの無数のケーブルはゼンの手によって引き抜かれていた。情報を解析しダウンロードを行っていたR2のケーブルを強引に引き抜いた事により、R2は一種のショック状態に陥っていた。まるで動く気配の無いそれを目にし、マリーは必死の抵抗に出る。

「放して！！ 放してイクスツ！！ 放してエエエエエツ！！」

「終わったのよマリー、もう終わったの！ もう止めて！」

暴れ狂うマリーは銃を手に取り、しかしイクスはそれを拒んで必死に抱きしめ続ける。ただ只管に抱擁を繰り返すイクスの行動は、マリーの心に大きな動揺を齎した。

本当はずっと前からこうしなければならなかったのかもしれない。イクスはそんな事を思う。誰かがこうして、マリーを抱きしめなければならなかった。

「今更止めてよっ！！ 判ったような顔しないでよおっ！！ いなく、なったくせに……！ 私を置いていなくなったくせにいいいいいいっ！！」

「マリー……」

「傍で支えてくれるって言ったじゃないっ！！ 一生どこにも行かないって言ったじゃないっ！！ 約束したじゃない！ あたし、イクスの事誰にも話さなかったよ！？ REVの事探りに来たって話してくれた事、誰にも言わなかったよ！？ アースの事もっ！！ イクスが居なくなっただって私、本当は気づいてた！ 気づいてたけど黙ってたっ！！ 友達だったからあっ！！」

一人だった。

マリー・コンラッド。名字を持つという意味。彼女は生まれた時からF R E S勤務の決まっている、由緒ある存在だった。

ただ、そんな誰かに決められた運命を彼女が望んでいたのかどうかは別問題で。マリーはいつでも、他人を求めている。

他人に興味が無い人間は彼女の両親と同じ。天才であれば尚の事プレッシャーも大きくなり、そして周囲との確執は深まっていく。そんな少女がただ一人だけ出会う事の出来た分かり合える友人。同じ天才であり、自分より劣悪な環境から実力で未来を掴もうとするイクス。

憧れた。強烈に。その背中がいつでも希望だった。前をイクスが歩いてくれるから、自分も進む事が出来た。

「イクスが居なくなつて、私がどれだけ悲しかったかわかる！？寂しかったかわかる！？信じてたのに！！信じてたのに！！！！」

「……………あたしは。誰かを犠牲にするやり方が気に入らなかった」

「そんなのずっとそうだったじゃない！沢山犠牲にしてきたじゃない！私もイクスもそうだよ！研究の過程で私たちは数え切れない罪を犯したじゃない！！今更そんな事言われても困るよつ！！イクスがいなくなつたら……………ねえ、それはだって、私を否定するって事じゃないっ！！」

返す言葉も無い。イクスも実際、マリーの事を信じていた。それでも自分の両手を汚す事を恐れ、フロンティア計画から手を引いてしまった。

自分がやらねばならなかった、室長であるイクスがやらねばならな

かった沢山の辛い決断をマリーに押し付け、逃げ出してしまった。
だから、返す言葉は無かった。イクスは涙を流し、抱きしめる腕の力を強める。

「ごめんねマリー……。本当に、ごめん……」

「——ッ!？」

銃声が一発。高らかに響き渡った。

激しく暴れるマリーの指先は引き金にかかっていた。それが意図した物かどうかは無関係に、銃は他人の命を易々と傷つける。

苦痛に表情を歪め、肩膝をつくイクス。腹部を弾丸が貫通した直後、ワイシャツを溢れ出る赤色が染め上げていった。

「……………イクス?」

震える声。拳銃が力なく指先から零れ落ち、マリーはイクスの肩に触れる。

「傍に……居てあげなくちゃならなかったのにね。あんたの事が、大事だったはずなのに……。馬鹿ね、だからこそ、あたしの戦いにあんたを巻き込めなかった……」

「イクス……? ねえ、イクス……!？」

崩れ落ち、傷口を抑えて目を閉じるイクス。マリーの必死の呼びかけを受け、静かに微笑を浮かべる。

「あたしも、あの夜ね……。あんたの事、想ってたよ……。一緒に来てって、どうして素直にいえなかったのかな……。どうし

て無茶、出来なかったのかな……」

血に塗れた手でマリーの頬を撫で、蒼白な顔でしかし無邪気に笑うイクス。

それがもう、全てだった。 マリーは大声で泣き喚き、イクスを抱きしめた。 目の前で傷つき消えそうになっている命が何よりも大事で、そしてそれが悲しいほどマリーの答えだった。

「うあああああつ！ イクス……ッ！ イクスうううう……っ」

「もういいの……。 もう、こんなのは。 あたしが止めてあげるから……」

決着は悲しい泣き声でつけられたように思えた。 しかしその直後、不気味な物音に三人の視線は釘付けになった。

きりきりと、歯車の軋むような音。 崩れ落ち機能停止したはずのR2がゆっくりと立ち上がり、ゼンを認識する。

直後、何の前触れも無く蹴りを繰り出しそれを受けたゼンが派手に吹き飛んでいく。 身近な敵を排除し、次にR2が視界に捕らえたのはイクスだった。

「ど、どうして……？ 命令してないのに！？ R2！！ 止まって！！ 止まりなさいっ！！」

止まらない。 黒いシルエットが揺らぎ、一瞬音速を超えるような速さまで加速し、轟音と風を引き連れマリーに迫る。

「駄目っ！！」

イクスを庇い突き飛ばしたマリーの胸をR2の細い腕が貫いた。

それは衝撃の光景だった。絶対服従であるはずのマスターを貫くR2の貫き手。そしてマリイが、イクスを庇ったと言う事実。

「マリイ……?」

「……………神様はやっぱり、私を許しては……………くれないよ」

悲痛な表情を浮かべるマリイの頬が笑顔を作るよりも早く大量の血を噴出し、鋭く抜かれたR2の腕が鮮血を周囲にぶち撒ける。

マリイの身体はそれでも崩れ落ちなかった。血まみれになり、胸を貫かれて尚、女は自らの下僕に手を伸ばす。

「止まりなさい……………あーる、つー……………うぐっ!？」

その腕が不用意に押し折られ、軽々と投げ飛ばされた時、マリイの身体は動かなくなった。

血の跡を濃く引きずりながらマリイの血で描かれた床の絵の上にR2は立ち、頭を抱える。それは誰の目から見ても明白な、完全な暴走状態だった。

絶望的な状況だった。既に敵は居なくなつたというのに、兵器だけが暴走し状況を悪化させている。使い方を間違えた道具は、誰にも予想の出来ない様子を浮かべて星に叫んでいた。

「アアアアアアアアアアッ!!」

獣のような絶叫に誰もが死を連想する諦めの刹那、閉ざされていた扉が音を立てて開かれた。

小さな、とても小さな影だった。この場に居る誰よりも小さく、幼く、未熟なその人物は。鮮血と殺意と狂気が支配するその空間において尚、冷静な口調で。

「レヴィ——」

透き通るような、優しい声で。 胸に突き刺さるような、激しい感情で。 迷いを振り払い、腕を振り下ろし、命じる。

「——止めるよ」

——その声をずっと待っていたかのように、蒼の少女は全身を拘束していた屈強な封印を解き放ち、ふわりと風に舞うように大地に降り立つ。

静かに目を閉じ、一呼吸。 誰もが息を呑むような美しいその動作の後、蒼の瞳を開き、主の命に応えた。

「はい、マスター」

ボロボロの身体だった。 傷だらけの少女は本来の力を出し切る事は出来ないだろう。

一度戦い、かつてのその戦いでは圧倒的な敗北と悲しい別れを突きつけられた相手に対し、それでもレヴィアंकローが迷うことなく立ち向かう事が出来た理由。

それは他でもない。 自らが愛する人が命じた一声に従い、そして彼が見つめるこの蒼い星を背にしたステージで踊る事が出来るから。 それ以上の幸せはなく。 それ以上の喜びはなく。 それ以上の褒美はなく。 それ以上の意義はなく。 それ以上の全ては求めない。

「——私は貴方を、破壊します」

R2の声にならない声が駆け巡る白いステージの上、少女はふわりと舞い踊る。

再びのぶつかり合い。だがそうなればレヴィアंकロウが圧倒的に不利である事実は周知の事。だが――、

「レヴィ！　また蹴りが来る！　掻い潜れっ！！」

頭で理解するよりも早く、少女は声にしたがっていた。

大気を切り裂くような轟音と共に繰り出されたR2のハイキック。

かつては受ける事も避ける事もままならなかったレヴィアंकロウはその足を屈んでやり過ごしていた。

想うより早く、理解するより早く、ただただ早く。心の底から信じた声と本能に身を任せ、レヴィアंकロウはスベック差を踏破していた。

繰り出された反撃の拳がR2の顔面を直撃し、銀色のバイザーは木っ端微塵に砕け散る。

その向こう、見開かれた真紅の瞳がレヴィアंकロウに確かな憎しみを抱いていた。

「――かかって来なさい」

低く、冷めたレヴィアंकロウの声。直後黒と蒼の影は風と共にぶつかり合った。

高らかに鳴り響く金属音はぶつかり合う度に鮮血を伴い、蒼い星を赤く染めていく。

何故戦うのか？ 何故其処に居るのか？

理由は単純だった。 R2という存在にレヴィアंक로우からダウンロードされたREVファイルはその膨大な情報量により彼女を圧迫していたし、何よりもそのREVファイルという物はこの世の森羅万象、ありとあらゆる歴史と未来を詰め込んだパンドラの箱である。 R2がその全てを受け入れる事など出来るはずもなかった。ゼンにより突如ケーブルを切断されるというアクシデントは原因のごくごく一部に過ぎない。 それよりも確固たる理由があるとしたら、それは作り物のヒトガタが抱くレヴィアंक로우と言う存在への激しい憎しみだろう。

心を持ち、言葉を持ち、理想を持ち、愛を持つロボット。 ダウンロードの為二人の心が繋がれていた数日間、 R2がダウンロードしたのはREVファイルだけではなかったのかも知れない。

故にそこにあるものはやはり憎しみだろう。 憎しみ以外に戦いを促す感情はそう多くはない。 とてもシンプルで、判りやすい理由だった。

自分と同一の存在への憎しみ。 偽者か、本物か。 その答えは明らかでも、その感情は理解出来なくても、 R2はその激情を処理しきれない。

人間の持つ感情——心と言うものは余りにも激しく、熱く、冷たく、眩しく、そして時には暗い。 情報として理解出来ないそのレヴィアंक로우の激しい感情にR2も感化されていたのだ。

幾度と無く擦れ違い、交差する黒と蒼のシルエット。 踊るようなその舞台の上、翻る二人の髪が揺れて瞳が輝く。

蒼い蒼い、とても蒼い星。 命がかつて栄えた星。 忘れられた歴

史と世界の星。 人々が手放し、封印した星。

それはまるで祈りのようだった。 二人の巫女が演じる演舞――。

全ての命と過去に捧げる二つの命の燃える刹那。

勿論二人の間に言葉は無かった。 しかしそれでも、二人は理解していた。 無表情なR2の真紅の瞳の向こうに燃える何かを。 感情を露にし、悲しげに歯を食いしばるレヴィアंकロウの蒼い瞳の向こうに沈む何かを。

だからやはりそう、それは演舞だった。 この小さな、子供たちの我尽の幕を引く舞い。 勝利したところで得る物は無くて、敗北したところで失う物は無い。

それでも尚、譲れない思いを抱えて舞うのであれば、それは人間と何が違うと言うのだろう。

「マリー……」

演舞を背に、ゼンはマリーをそっと抱き起こし、その髪に触れる。

血塗れの姿で、それでも力なく笑うその姿にゼンは歯を食いしばり、首を横に振った。

「辛い時は泣けばよかったんだよ、お前は……っ！ 助けてって叫べば良かったんだよ！！ 何で我慢するんだよ、馬鹿野郎……っ」

「……………私、ね。 ゼン君の事、利用してたんだ…………。 A s h

……………ウラ君がマスターだって判ったら、私は直ぐに君を選んだ…………。

いざと言うとき、交渉材料に出来るように、って」

マリーの戦略は事実功を奏した。 ゼンと行動を共にしていなかったのなら、ウラを捕らえる事は出来なかっただろう。

それは勿論ゼンにも判っていた。 しかしそれにはどうしても引かかる事があった。

「お前は どうして、俺があ の工房の出身だ っ て知 っ ていたんだ……？ その事は、俺の腕……俺の命を救 っ てくれた誰かと、シャッフルしか知らないはずだ」

「……………うん。 人体実験、でね……。 君の腕を、ロボットにしちゃ っ たの、私。 本当は、やりたくな っ たけど……… や っ ちや っ たから。 だから、なのかも。 罪滅ぼし……… したか っ たのかな」

「それは違 っ う」

マリーの頬に零れ落ちて、血を溶かして流れていく熱い涙。 ゼンはマリーを優しく抱きしめ、首を横に振 っ た。

「感謝してたんだ、ず っ と。 新しい腕をくれた事に。 謝らなく っ ていいんだ。 俺が、ありがと っ て言いたか っ たのに。 腕がな っ たらこうして誰かを抱きしめる事も出来な っ た……。 生きる事を諦めていたかもしれない。 俺は、俺を救 っ てくれた誰かがいたからこそ、理想を求め続けられたんだ」

「……………そ っ か」

真 っ 直ぐな男だな、と っ 思 っ た。

初めて会 っ た時、とても粗暴で不躰で、大層驚いたのを覚えている。 それでもいつしかそのルールや規定の現実に囚われない、自由で前向きな姿に勇気付けられていた。

行動を共にした数日間には幸せだ っ た。 仕事の事さえ少しの間だけでも忘れる事が出来た。 イクスを失 っ た寂しささえも。

だからこそ怖くな っ たのかもしれない。 自らの手で失 っ てしまえば、もう二度と見る事が無ければ、恐れる事は無くなるのだろうか。

信じる事を。 助けてと叫ぶ事を。 判つてと願う事を。 誰かを愛する事を。 そうなってしまうのが、恐ろしくて堪らなかった。でも、きつとそれでよかったのだろうと思ひ返す。 馬鹿でも後先考えていなくてもいい。 それでも自由に羽ばたければ、いつか堕ちてもそれは幸福なのだから。

「……やだなあ。 私、女の子っぽい事なあんにもしないままだったよ。 こんな終わり方って、ちよつとあんまりだよね……。 ふふ……何か疲れちゃった。 すごく眠い……」

「マリー……」

「でも、寒くないよ……。 私、さすがだね。 ロボットの腕でも……あつたかい、よ——」

優しく微笑み、最期まで強がってマリーは言葉を失った。それでもまだ微かに残る身体の温もりを抱き寄せ、ゼンは静かに目を閉じ涙を流す。

「馬鹿野郎……。 馬鹿だよ、お前……。っ」

涙を流し続けるゼンの傍ら、一部始終を見ていたイクスは寝転んだまま煙草深く吸い込み、紫煙を吐き出していた。

撃ち抜かれた腹を押さえ、痛みに耐えて必死に身体を起こす。二人の背後ではまだ、この世の終わりの戦いが続いていた。

「……………ゼン。 黙って見ているわけにはいかないわ。 レヴィを、助けなきゃ……………」

「……………判ってる。 ああ、判ってるよッ！！ 俺はあああああ

っ！！」

絶叫と共に立ち上がり、マリーに背を向けるゼン。 涙を豪快に拭い、血に塗れた指先を拳に握り込む。

「立てるか、イクス？」

「……………あー、何とかね。 本当、そろそろ真面目に死ぬんじゃないかしら、あたし」

「そうはさせねェよ」

苛立ちながら呟くゼンの横顔を見上げ、イクスは目を丸くした。

「もう誰も死なせねえ……！ あんたは俺が、殺させねえ……！ 絶対に、だ！」

悲しみを踏み越え、繰り返さぬようにと男は男なりに覚悟を決めていた。 その様子はイクスから見ればまだ幼く、未熟な決意に見える。 しかしそれでも、熱い思いだけは伝わったから。

傷口を抑えながら視線を逸らし、イクスは笑う。 ゼンの背中を強く叩き、それから先に走り出した。

「レヴィ！ 距離を置いて戦うんだ！ まともに殴り合ったらやられる……！」

「R2——ッ！！ 貴方はっ！」

見開かれた真紅の瞳は見る者を吸い込むような魔性の魅力を持つ。 ぎらぎらと輝く獣のようなその眼差しが描く軌跡を追いかけて、ウ

ラは必死に声を張り上げていた。

目で追うだけで精一杯のその戦いの中、渡り合う事は出来てもR2を倒せるだけのチャンスも生まれない焦れた状況が続く。切り札は確かにある。ウラはその可能性を脳裏に描きながらも、実現するタイミングを見つけられずに居た。

「一人で頑張ってるじゃない、少年……」

返事はしなかった。ウラの左右の肩に手を乗せ、二人が前に出る信じていた。立ち上がってくれと。だからこそ、ウラはパソコンから繋げたケーブルを握り締め、冷や汗と共に言葉を紡ぐ。

「少しでいい……。あいつの動きを止められないかな？」

「任せろ」

「信じていいよね」

「ああ。信じてるぜ」

一瞬のやり取りと同時に駆け出す二人。それに反応し、レヴィアンクロウも言葉無く駆け出した。

刹那の攻防――。先行したレヴィアンクロウの放った蹴りはR2の頬を掠め、皮膚を薄く切り裂く。しかしそのR2が回避行動を行った一瞬、ゼンとイクスがその左右に組み付いていた。

機械の両腕で攻撃するのでは動きを止める為だけに全力を尽くすゼンが左腕を押さえ込み、その隙に反対側からイクスが回り込む。

しかしまだ自由なR2の右腕は近づくイクスを蹂躪するに十分な力を持っていた――はずだった。

「——とても残念なお知らせよ、R2」

常人ならば肩が外れてしまうような反動の大型拳銃を、イクスは片腕で使いこなす。

例え折れてしまおうとも、その腕が主の足を引く事はない。放たれたR2の貫き手をイクスは腕を十字に構え、受け流していた。

切り裂かれた右腕のコートの袖とグローブの向こう側、露出したのは金属質のパーツ。銀色に鈍く輝くそれは、人間とは思えぬ力と速さで貫き手を捕らえ、背面に擦じ曲げる。

「自分だけが特別だとは思わない事ね——ッ！」

ほくそ笑むイクスと驚きながら笑うゼン。その二人を振りほどこうとするR2の眼前に、レヴィアンクロウの拳が迫っていた。

「はあっ——！」

美麗なフォームから美しく繰り出された拳がR2の顎部を打ち抜き、その細い身体が揺れて一瞬だけ力が抜け落ちていく。

その瞬間、走っていたのは命令を下すだけだったウラ本人だった。

小脇にノートパソコンを抱え、もう片方の手にはケーブル。一直線に、R2目掛けて突っ込んでいく。

それが起死回生の策と呼べるのかどうか、イクスもゼンもレヴィアンクロウも疑問だった。しかしそれは一瞬の事で、後は考えるのを止めた。

ウラが真剣な表情で走ってくるのが見えた。体力も無く、勇気も無かった少年が、自らの意思で死神に立ち向かっている。それだけでもう、十分だった。

「これで——っ——！」

擦れ違いながらウラがR2の首に突き刺したケーブル。次の瞬間動き出したR2は四人を同時に吹き飛ばし、地べたを転がりながらもウラはパソコンのエンターキーを叩く。

次の瞬間、R2の動きが停止していた。その様子は先ほどゼンにケーブルを引き抜かれた時に酷似している。全く動かなくなったわけではない。ぎしり、ぎしりと、それでも尚動こうとする動力の切れ掛かった人形のようにレヴィアंक로우と向き合う。

流し込んだのは――戦闘用AIだった。かつて少年がOZ社の依頼でFRESから入手し、提出用に外部に保存していた代物。全て破壊されてしまった彼の資産の中、たまたま提出用に持ち歩いていた一枚のディスク。

強制的にインストールされたそれは当然R2には馴染まないプログラムである。なおかつ、全く別の意思であり、それは彼女の動きを大きく鈍らせる。

それはとても、とても大きな隙だった。激しく揺れる瞳がレヴィアंक로우を捉え、レヴィアंक로우もまた拳を握り締め駆け出す。

「行けええええっ！！　レヴィイイイイ――ツツ！！！！」

地球を背に、真っ直ぐに駆け出した蒼い光。R2はそれを迎え撃つ為に、鈍い動きで走り出す。

真正面からぶつかり合えば敗北するのはレヴィアंक로우だ。それでも思い切りぶつかる他にR2を機能停止にする方法はない。

だから、一手。どうしても一手必要だった。仲間たちが見守る中、速度を殺さず僅かに跳躍し、身体を旋廻しながら足を伸ばす。くると舞う、傷だらけのレヴィアंक로우。その足がR2の右肩から袈裟に深々と突き刺さり、上半身を真っ二つに両断した刹那。

恐らくそれは最期の抵抗だったのだろう。R2の放った拳もまた、

レヴィアंकロウの胸を深々と貫いていた。

REV・15

「――レヴィッ!」

飛び散る赤い液体の中、不自然な格好で落ちたレヴィは力なく星を見つめていた。

慌てて駆け寄って抱き寄せると、胸に空いた巨大な穴が痛々しい。

同時にR2も膝を付き、それからもう黒いレヴィアंकロウが動く事はなかった。

「う、う……」

「レヴィ……。 そんな……。 捨て身で……」

「それ以外に手段が思いつかなかったもので……。 でも、貴方が無事で本当に良かった」

レヴィはボクに微笑みかける。 でもボクは笑えなかった。

彼女は前の戦闘から修理もしないまま、ぼろぼろのまま戦っていた。

どんどん傷つき、それでも立ち上がり、ボクの為に……。

確かに理屈は判る。 拮抗した力同士の戦いで、装備と状況的にR2が有利。 なら、レヴィは捨て身でかかるしかなかった。 それは判るけれど。

顔の半分は崩れたまま、前髪に隠れたその傷にそつと触れる。 暖かい真紅、彼女が生きた証に触れ、ボクは目をきつく瞑った。

涙を流したくなかった。 泣き顔を見せたくなかった。 ボクの為

に頑張ってくれた彼女に、してあげられる事はもつと沢山あったはず。

それでもボクは結局、彼女に戦いを強いる事しか出来なかった。ただ、それだけしか出来なかった。幸せをあげられなかった。

「――帰ろう、レヴィ。家に、帰ろう……」

「はい。マスター」

傷だらけのレヴィを背負い、ボクはゆつくりと立ち上がった。

兎に角今は、帰れたかった。沢山の面倒な事がボクらの前には広がっていて、その途方も無い未来に目がくらみそうになる。

これからやらなければならぬことはきつと沢山ある。それでも今は、彼女を救いたい。出来る事ならば、永遠に一緒に居たい。

背中から伝わってくる温もりは人間の物と何も変わらなかった。

ボクらはそれから多くを語らず、歩き出す。

「ウラ……。どこに行くつもり？」

「帰るんだよ……。帰るんだ。レヴィを直さなきゃいけないから。いそがしいんだ、今」

「……………そう。そうね。そう、しなさい」

イクスはそれ以上何も言わなかった。彼女自身動くのが辛かったという理由もあるのだろう。でも、ゼンが傍に居るから大丈夫だと思う。

ボクは今は、レヴィの事を考えて居たかった。部屋を出て、レヴィを背負ったままボクは歩き続けた。

「マスター……。私、判ったんです。人間になるという言葉の意味……。私がここに居た意味」

「え？」

「私は人間になりたかった……。人間と言うものを知りたかった。知らなければならなかった。人間に、『REV』を託すべきかどうか、私は判断しなければならなかったから。ずっと昔からその為だけに、私は存在したんです」

「……………レヴィ」

「REVは……。私を作った人たちの希望なのだと思います。沢山の願いや夢、希望……。或いは、絶望と呼ばれるおよそ全てのものを、私は抱えて生まれてきた。だからその強く激しい願いを誰かに託す為に、私は心を定めねばならなかった。人間を、愛さなければならなかった……。それこそがREVの——地球の封印だった」

「レヴィはレヴィだよ。REVも地球も世界も過去も関係ない。レヴィはレヴィ……。それ以上でも以下でもないよ」

気づけばボクは泣いていた。背中のレヴィはきつとそれに気づかなかったと思う。だから、涙を止める事はしなかった。そう、きっとレヴィはその為に過去から使わされた使者なのだろう。未来の人間、今のボクらを彼女が愛せないようであれば、知識を与える事は出来ない。人間になりたいと言う欲求は、所謂一つの仕組まれた運命だった。

「それでも今、私は心からもう一度……。人間になりたいと言う

願いを、叶えたい」

首から回された腕が優しく強くボクを包み込む。 頬を寄せ、甘えるように囁く彼女は十分人間らしかった。

歩く一歩一歩が重く、こんな事ならばもつと体力をつけておくべきだったと後悔した。 でも、今後悔しているようじゃ遅い。 失ってから気づくのでは、遅すぎるよ。

「もしも私に二度目の命が与えられるのなら……。 いえ、何でもいい。 私はきつと、ウラの下に辿り着きます。 そうしたら…… また、一緒に居てくれますか？」

「当たり前だろ。 お前はまだまだ、人間として未熟なんだから。 物を知らなすぎるんだから。 ほつとけないんだから。 だから

……」

森羅万象を宿すレヴィアंकロウに対して、それでもボクが語りかける言葉。

ボクもきつと、同じ想いだ。 君を失っても、また何度でも…… 求め続けるよ。 生まれ変わっても、何度でも何度でも……

出会いの瞬間から、この涙の色まで。 ボクは全部覚えていよ、君の事を。 忘れたりしない、これからどんなに時が過ぎても…… それでもボクは、忘れたりしない。

掛け替えない時間を。 失いたくない思い出を。 そして——レヴィアंकロウって女の子がこの世界に居たって事を。

「また何度でも、面倒見てやるから……。 だから、居なくなるなよ……。 ちゃんと帰ろうよ……。 つ」

「……………泣かないで、ウラ。 私は貴方を、信じているから」

涙を流す頬に触れる傷だらけの手が痛く、触れ合う度に人は傷つけあうものだを知る。
とめどなく溢れ出す涙が枯れ果てるまで、ボクはきつと前には進めない。

「またきつと……この世界のどこかで。一緒に……」

塔の入り口の扉の前、ボクは足を止めた。

レヴィの腕はだらりとぶら下がり、力なく揺れている。零れ落ちた赤色はボクさえも染め上げてしまいそうで、言葉に出来ない思いが胸に去来する。

「レ、ヴィ……」

振り返ると、彼女は眠っていた。とても充実した、安らかな寝顔だった。明日が来る事を夢見て眠る子供のように……無邪気で、朗らかな。

だからボクは堪らなく悲しくなって、涙を流しながら彼女を抱きしめた。その場に膝を着き、目を閉じる事もしないまま、ぼたぼたと涙だけを零した。

一瞬でも長く彼女を目に焼き付けて居たかった。失いたくなかった。せめて思い出だけでも……心の中に残しておきたくて。

「うああああああ……っ」

縋るように胸に顔を埋め、強く齒軋りした。

何故ボクは子供だったのだろう。何故ボクは力が無かったのだろう。何故ボクは未熟で、彼女を救えなかったのだろう。

何故！ 何故！ 何故！

力さえあれば彼女を救えた。もつと大人だったら、彼女を救えた。神様を恨む。ボクらの出会いを恨む。彼女の笑顔を恨む。

憎しみよりも狂気よりも深く、彼女の存在を愛していた。僅かな時間の中で、どうしてこれほどまで彼女に心を奪われてしまったのだろう。

その理由はわからないまま。ボクは彼女を抱き、声を張り上げて叫んでいた。

「誰かつ！ 神様あつ！！ レヴィを助けてっ！！ 時を止めないでえっ！！！！ 誰でもいい、助けて！！ 彼女を助けてえええええ——っ！！！！！」

その瞬間、大きな扉が開き、光が差し込んだ。

向こう側に居たのは沢山の機動兵器と兵士、そして見覚えのある顔だった。

「もう、誰かに助けを求めるのは止めないか」

OZのロゴを携えた兵力がボクらの脇を通り抜け、次々と突入していく。そんな中、スポットライトを背にしてオズワルドは歩み寄ってくる。

そつとボクの傍に屈み、両肩に手を置いて強い瞳で語る。

「君が救うんだ。他の誰でもない、君が。何年かかってもいい……。君が、レヴィアंक로우を救いたまえ」

「……………っ！！」

「いつか、彼女におはようと言ってあげるんだ。それが今、君に出来る唯一の事だよ」

泣き崩れた。未来へと続く痛みを抱え、それでもボクは夢を追うのだと誓った。

その形は少しだけ変わってしまったけれど……。それでも、ボクは――。

眩い光の中、泣き崩れるボクの頭を撫でてオズワルドは微笑んでくれた。そうしてボクらの長く短かった戦いは、幕を閉じた――

それから事を、少しだけ語ろうと思う。

今回の事件はFRESではなく、マリー・コンラッドが行った独断的な犯行であり、事件の被害者は百人近くにまで昇った。

フロンティアの管理塔は一時機能マヒにまで追い込まれたものの、オズワルドの到着により無事コントロールを掌握。フロンティアが墜落するような最悪の事態にだけはならなかった。

イクスとゼンは救急搬送されて、それからしばらくの間会う事も出来なかった。機能停止したR2は回収され、マリー・コンラッドは死亡が確認された。

この事件の発生により、OZ社はFRESと政府の独断的判断による選民とそれに伴う月での横暴に異議を唱え、地上にも伝えられた滅びの予感とフロンティアへの移住は大きな騒動を巻き起こした。相次ぐ暴動は沢山の人を傷つけ、多くの命を掻き消した。しかしその暴動による怒りや悲しみ、不安や暴力は街に新しい秩序を生み出し、そして人々に本物の危機感を与える事に成功した。

政府は一度解体され、その後新政府の結成が決定した。当然直ぐには行かないが、それまでの間は旧政府の一部とオズワルドが指揮を取り、なんとかやっていくらしい。

FRESとOZ、二つの企業的情勢は悪と正義という二つの言葉によって決定され、FRESは事実上OZに取り込まれる事になった。

この辺はオズワルドが上手くやったと思う一瞬である。

勿論、本物の正義なんてない。オズワルドもきつと沢山の罪を犯している。それでもいいと、罪を犯しても生きていける強さを持つ事は、大人になるという事なのかも知れない。

ボクはOZに就職する事になった。ボクの腕を買ってくれたオズワルドのお陰だ。そうして一つの研究室を与えられ、REVの研究を行える事となった。

実はその後、ボクはじいさんの工房にも戻っていないし、イクスにもゼンにも会っていない。二人が今どこでどうしているのかさっぱり判らないけれど、いつかまた会えると信じている。

揺れ動くこの世界の激動の時代、ボクらが再び邂逅するのは確かに難しい。それでもその気になれば会える二人に会おうと思わなかったのは、自分自身の力を高めたいと思ったからだ。

OZの社員証と白衣を身に纏い、レヴィアंकロウという存在の再生に勤める今のボクは、この夢を叶えるまで彼らに会うつもりはない。

再び会う時は、レヴィとボク、イクスとゼン。四人そろって、出会いたいから。

こうして幼いボクが体験した戦いは、静かに幕を閉じた。

そうしてそれから、六年の時間が過ぎたんだ――。

この世界には、三つの種類の人間がいる。

全部の人間の数を十人だとすると、そのうちの三人くらいはまともな仕事に就いている人間だ。

まともな仕事、なんて言ってもピンキリで、結局本当にきちんと働いているやつは本当にごく僅か……0・1人くらいではないだろうか。

みんなきちんと働いているように見えて、裏では何をしているのかわかったものではない。別に誰かがそうなのではなく、みんなそうなのだ。とりわけ今更騒ぐほどの事じゃない。

最も割合の多い……十人のうち、五人程だろうか？ この五人——まあ要するにこの世界の半分くらい——は、まともではない職業に就いている。

さて、それでは私はどうだろう？ まともな職業？ ああ、確かにそうだ。OZ社というこの世界において最高の市場を誇る企業に就職し、研究室を一つ与えられているのだから。

しかしさて、それと人間的に『まとも』であるかどうかという点についてはそれほど関係がないのではないかと思う今日この頃。勝手に頻繁に休憩しては研究室を抜け出し、私はこの場所を訪れる。勝

地球を望む元フロンティア管理塔、その最上階。六年前のあの日、私が彼女と別れた場所。彼女と共に見た景色。安物の缶コーヒ——でさえ、ここから見下ろす地球があればましに思える。

深く息をつき、ネクタイを緩めた。ここ数日寝ずに作業を進めていたので、この休憩はれっきとした由緒正しい休憩であり、誰かに咎められる事も無いだろう。普段はどうかと言つのは、とりあえず置いておくとして。

「もう六年、か」

過去に想いを馳せ頬を緩ませる。 疲れた吐息は透き通る蒼い星に吸い込まれ、それさえも浄化されそうだ。

そんな風に思うようになってくると、いよいよ時の流れと言う物を実感する。 あ頃は管理塔だったこの場所も今は唯一フロンティアから実際に地球が見下ろせる場所として観光スポットになっている。

この六年でフロンティアは拡大され、巨大な第二の楽園となった。

それと同時に地上の街も地下調査や組みなおしが始まり、滅びの足音はどこかへ遠ざかったように思う。

月面の街にはファウンダーションと言う名前が生まれ、空と大地をと阻んでいた偽者の空は消え去った。 今は誰もが宇宙と地上を行き来する事が出来る時代が訪れたのである。

まあ、それが自分のお陰だとは思わない。 それはおこがましい事だ。 だが、REVという知識が徐々に解析され、人々を豊かにしていると考えたと、それなりに胸にこみ上げる物がある。

鮮やかな蒼に輝く星、地球。 あれから私は何度か地球に降り立った。 地球を覆っていた結界は、REVに認められた人間——すなわち私を拒絶する事は無く。 私が地上に降り立つと同時にその拒絶はだいぶ薄まったように思う。

現状では地球は閉ざされたまま、一般の立ち入りは禁止されているが、人々が地球に帰る日はそう遠くはないように思う。

あれだけの破滅を乗り越え尚、地球と言う星は蘇っていた。 広大な自然と生命を復活させ、まるで人類の帰りを待っているかのよう

に美しく。 そんな風に思うのは、恐らくは人のエゴなのだが。 地球は滅びかけ、人はそれを守るために闘い、そしてレヴィアंकローというメッセンジャーを残した。 それを確かに受け取った私たちはそれを後世に伝えていく義務がある。 この、REVという

蒼い星の悲しみと喜びの記憶を。

「室長！ やっぱりここですか……。 社長がお見えになってますよ！ 早く戻ってください！」

と、考え込んでいると背後から声が聞こえた。 聞こえないふりをしてコーヒーを飲み干し、一息つく。

「室長！ ウラさんっ！！ ほら、聞こえないふりしても無駄ですよ！ 早く来てくださいっ！！」

「……………やれやれ」

首根っ子を捕まれずると引き戻されていく。 空き缶をダスト

シュートに投げ込み、深く息をついた。

そう、あれから六年。 私はもう、二十歳を過ぎていた。

REV・16

REVからは今はもう残されていない想像を絶するような力が発掘される事がある。

その仕事はトレジャーにも良く似ていて、私は毎日のようにREVにアクセスしては過去の技術を発掘した。

今の技術よりも余程進んだかつての地球の技術。 それらを見つめ、私は時々思う。 それだけの力を持っても、人間はあの星を愛し、捨てきれなかったのだと。

月という異なる環境に身を置き、宇宙空間に居住区を作れるような人類が、そうしてまで尚守りたかった物。 それは大いなる存在で

あり、決して蔑ろにはいけない。

だから私は繰り返される毎日の中、それらの記憶に敬意の念を抱く。一つ一つ愛しむように、思い出を解体する。それは確かにヤクザな商売ではあったが、過去とは違う。少しだけ心の温まるような、そんな仕事だった。

しかしそれも連日凄まじいスケジュールで展開されれば流石に疲れるといふもの。時々逃げ出したくなるのだが、オズワルドは流石にわかっている。私が逃げずに必ず戻ってくると踏み、放っておくのだ。

結局今もこうして部下に連れられて部屋に戻ってきてしまった。

オズワルドは私とは違い高級なコーヒーを高級なマグカップで飲んでいた。何が高級なのかはよくわからなかったが、社長なんて物はそんなイメージだ。

「やあ、ウラ君。相変わらず元気そうで何よりだ」

「この様子が元気そうに見えるのならば眼科に行った方が宜しいかと、社長」

「ふふふ、本当に相変わらずだな。何、そう気構える必要はないよ。今日は研究成果の催促ではないからね」

今日は、か。まあそうだろうな。次に来るときは催促すると暗に警告しているんだろうな。本当に嫌になる。

「何はともあれ、君にこれを」

手渡されたのは一枚のデータディスクだった。媒体は古いものだが、最近記録されたらしい日付がつけられている。

怪訝に思っているとオズワルドは六年前のように私の肩を叩き、そ

のまま振り返らずに去ってしまった。当然忙しい身である彼にこんなところでモタモタしている暇はないのだろうが。

「室長、なんですかそれ？　もしかして社長からラブレターですか？」

「引くわ……。後は任せるから、とりあえず内容を確認してくるよ」

「でも、室長と社長ってお似合いかも……」

いや、話を聞けよ。

そんな風に騒ぐ職員連中に背を向け部屋を後にする。与えられた自室に入り……。尤も仕事場で寝ることが多い私には無縁だが……パソコンにディスクを読み込ませる。

息を付き、読み込んでいる間冷蔵庫の中をチェックする。ちょっとしばらく寄り付かなかった所為で大分色々な意味で目を逸らした状態になっていたが、何とか生存していたらしいドリンクを取り出し蓋を開く。

『ウラ、元気にやってるか？』

懐かしい声に思わず振り返る。読み込みが終了し自動的に再生が始まった映像には、懐かしい顔が映し出されていた。

「……ゼン」

そこはあのじいさんの工房だった。六年経ってよりボロくなっていたが、それでもあの頃と変わらない空気がある。ゼンの顔を見るのも声を聞くのも六年ぶりだった。思えばゼンと

再開して共に過ごしたのは二週間ほど。大切な友人なのに共にいる事の方が少ない。

椅子にかけ、頬を緩ませながら画面を眺める。ゼンは六年経っても相変わらずと言った様子で、無邪気な笑顔を向けていた。

『色々あったが、今もこうしてピンピンしてる。そっちもまあ、オズワルドの奴と元気にやってるだろうと俺は勝手に信じてるぜ』

「また勝手だな……」

『お前は今もレヴィを直してやるのに頑張ってるって聞いた。それに……REVを解析しているんだってな。マリーもきつと、それを願ってると思うから……。俺の方から代わりに礼を言わせてくれ。ありがとな、ウラ』

「どういたしまして」

今思うに、マリーとゼンの関係は複雑だったのではないだろうか。二人とも何とも言えない関係だったはず。二十歳になってもそれはよくわからないが、まあ仕方ない。彼がマリーの想いを大事にしているという事実だけ、覚えておくとする。

『でだ。何でまた今になってこうしてメッセージを送ろうと思ったのかと思うと……いやまあ、今更じゃないんだが。俺は何度もお前に会いに行こうと思ったんだが、イクスが我慢しろってうるさくてな……。まあともかく、報告する事があるんだ』

画面に飛び込んできた景色を見て流石に驚いた。ゼンが画面外から抱き上げたのは小さな女の子だったのだ。

『あー。あれから色々あって、今はイクスと二人で暮らしてる。こいつが生まれたのも随分前だが、色々とバタバタしてて報告が遅れてな』

「……………まあ、そんな気はしてたからいいけどね」

素直に祝福するでしょう。それにしてもイクスの子供………ということは、じいさんの曾孫？ 私の姪のようなものなのだろうか？ そのうちプレゼントの一つくらい無駄に高い給金から送ってやるとしよう。

金髪のウェイブした髪はどう見てもイクスにそっくりだ。イクスに似てよかったなあ、と何となく思うが、無邪気に笑っている様子を見るとどうにもゼンっぽい気もする。

ああ、こんな事を考えていると歳を取ったとつくづく思うが仕方ない。子供というのはかわいい物だと思う。

『パパー？ 何でビデオとってるの？』

『パパの親友にちよつとな。で、ウラ。お前に報告しなきゃいけないことはもう一つあるんだ』

そうして私は二度目の驚愕を目にする。思わず椅子を弾き飛ばし立ち上がってしまうほどの衝撃だった。画面からゼンの姿が消え、カメラが動き出す。恐らくゼンが手にしたのであろうそのカメラが映し出したのは、髪を伸ばしたイクスとその傍らに立つ——R2の姿だった。

『ウラ、久しぶりね。あんたに無断でというのもどうかと思ったんだけど……今、あたしたちはR2と暮らしているの。あの後回収して、修理してね』

「馬鹿な……っ！？ 殺戮兵器だぞ！？ それと暮らすなんて……」

『あーるっ！っ！』

しかし、その言葉は言葉にならなかった。あろうことがR2に懐いた様子で駆け寄る少女の姿。そしてR2がその少女を無表情ながらにもそっと抱き上げるのを見て、思わず空いた口が塞がらなくなる。

『ほら、マリー。 R2の事紹介してあげて』

『うん！ あのね、あーるっ！はわたしのメイドさんなの！』

「ま、まりい……？ メイドおっ！？」

思わず頭を抱えた。 どういう状況だ、それは……。 しかし、R2は感情を宿さないその表情で、しかしゆっくりと誰に命じられたわけでもなく少女の頭を撫でる。

驚きのあまり妙な笑いが浮かんできてしまった。 忘れもしないあの六年前、レヴィを破壊したもう一つのREVの遺産が、あの兵器が少女を抱き寄せている。

『イクス、マリーを連れて行ってやってくれないか。 R2にも、話したいことがあるだろうから』

『そうね。 ほらマリー、こっちよ』

画面からイクスとマリーの姿が消え、中央にはメイド服を着たR2

が映し出された。

『R2はあれからイクスが修理して、今は人間の事を勉強している。覚えているか？ レヴィからダウンロードした『レヴィアンクロウ』としての思考データや感情データ、それがこいつを暴走させた事を。だがそれは、R2が心を感じていたということじゃないかってイクスは推測したんだ。それからイクスは新たにAIを組みなおし……後は本人から聞いてくれ』

思わず息を呑む。 R2はレヴィに比べると相変わらずロボットといった様子で、どうにも動作は硬い。表情も何を考えているのかわからなくてのっぺりとしているが、その唇は確かに動いた。

『……………ごめん、なさい』

たった一言だけ呟き、R2は頭を下げる。

『ごめん、なさい』

途切れ途切れの合成音声。今の技術では完全に彼女をレヴィアンクロウにしてあげることは出来ないだろう。

そして彼女は彼女としての人生を歩み始めた。マリーが作り、イクスが直し、そしてイクスの娘が愛を教えたロボットは、私に頭を下げて何度も謝罪の言葉を繰り返していた。

気づけば長い間乾いていた自分の両の瞳から涙がこぼれ、笑みが浮かぶ。ただ、R2という存在を恨んでいたわけではない。憎んでいたわけではないのだと、自分でも始めて気づく。

『R2は俺たちが責任を持って育てる。だからお前は、レヴィを目覚めさせてやれ。そうしたら今度はちゃんと、またこの場所で』

「ああ。 約束の場所で会おう、ゼン——」

映像が途切れると同時に広がる暗闇。 涙を拭う事をせず、椅子に腰掛け深く身体を預ける。

見上げた天井。 ゆっくりと瞼を閉じ、涙が乾くまで私はそうしていた。

それから数カ月後。 レヴィアंकロウの再起動実験が行われた。

初めに耳にしたのは、誰かの声だった。

その声は暖かく、優しく私に語り掛ける。

眠り続ける私に、その人はずっと語りかけていた。 ずっとずっと、何日も何日も。

そうして振り返ると、自らの過去が何も無い事を知る。 生み出されて目覚めるまでの間に見る、僅かな夢の欠片なのかも知れない。 かつてあった地球という星は蒼く美しく、そしてそれを守る為に人類は大地を捨てた。

そして、棺に私を入れ、時の彼方——。 棺に備えられた時を越えるからくりで私を遠い未来の自分たちの子孫に向け、放った。

長い長い時を越え、私は出会う。 遙か彼方、彼らが望んだ未来を生きる人々に。 与えられた役目は判断——そして、力を分け与える事だった。

暗い海の中を漂っているのは恐ろしかった。 誰にも会えないまま、誰にもつながれないまま、いつか壊れて朽ちて行くのではないか？

そう考えるだけで震えが止まらなかった。

しかし、人はめぐり合ってくれた。私という過去に。しかし私の存在は彼らに不幸を齎す。

力を巡り人は争う。それが人の本質と言うのであれば、私は力を彼らに託せない。託せ無いだろうと思っていた。

「ほくら、高い高い」

声が聞こえた。

それは初めて聞いた声とは違う声。それでも優しく、誰かを愛する気持ちに満ちた声であることは変わらなかった。

目を開く事はないまま、外の景色を見る。棺の中の私にとって目は意味を持たず、外部を監視するセンサーによって周囲を捉える。

そこに居たのは夫婦だった。そして父親が抱き上げるのは生まれたびかりの赤ん坊。きらきらとした瞳を浮かべ、無邪気に笑う人の姿。

その子の周りに広がる愛の欠片。誰かを愛することで自分を愛し、そして愛されるという事。人が持つ美しい物を、私はその時初めて知った。

やがて時が流れ、父も母も失われ、その子の命が悪意に吹き消されそうになった時、私は思わず棺を開け放っていた。

生まれて初めて振るう自らの暴力は殺意と悪意に満ちていて、小さな命を吹き消そうとする彼らを私は容赦なく肉片へと変えて行つた。

「……逃げましょう」

気づけば私は赤子を抱えて走っていた。敵をなぎ払い、ただただひたすらに走り回った。

そうして何日も夜が過ぎ、私は赤子を守り通したつもりになってした。しかし赤子を見る見る衰弱していく。私は人間を育てる手

段を知らな過ぎた。

赤ん坊を抱きしめても、守ろうとしても、それを守れない私に人間を選定する権利などあるのだろうか。人を知らず、人を理解せず、人でならない私は——では一体、何を判断すると言うのか。

下した決断は赤子の救済だった。そして私は棺に入り、彼らの下眠りについた。

それからずっと、また眠りについて。長い長い間に、自分が何者なのかさえ忘れてしまったのかも知れない。

自分の主が誰なのか。自分が心の底から守り、救おうと思った人は誰なのか。そして、その時自分が何を願っていたのか。

誰かに幸せを振りまく純粋な存在を守ること、私は人間になれると思っていたのかも知れない。『愛する』事を理解出来ると思っていたのかも知れない。

垣間見る夢——その果てにあるものはいつも暗闇。何もかもいつかは忘れてしまう。だから……。

「おはよう、レヴィアンクロウ」

気づけば目の前に誰かの顔があった。薄っすらと瞳を開き、誰かに抱き起こされる。

身体が上手く動かず、その人を姿を凝視する。高い背と優しく力強い声。私は思わず口にした。

「貴方が……私のマスター、ですか？」

すると彼は答える。

「そうだ。私が君のマスター……名前はウラと言っ」

「う、う……」

どこかで聞いた名前だった。けれどそれは思い出せない。なにやら心にフィルターがかかってしまっているかのように、記憶はもやに包まれていた。

不安になる私の手を握り、ウラと名乗ったマスターは微笑む。そうして指差した先、もう一人『私』が眠っていた。

「レヴィ、聞いてくれ。大事な事だ」

「……はい」

「わたし……ボクの名前はウラ。ハンドルネームはAsh。トレジャーという違法ハッキングで生計を立てている」

「……はい」

「ボクはこれから君を過去に飛ばす。今から三十年前だ。ただ、そこが過去であると言つ記憶は君から奪ってしまうけれど……。見てご覧、レヴィ」

抱きかかえられ見つめる先のもう一人の私。そこから伸びる沢山のコードが、私の身体につながっていた。

「ボクは、君を守れなかった……。力がなくて。壊れてしまったレヴィアंकロウを直しながら、ボクはもう一つレヴィアंकロウを作ったんだ。二人目のレヴィ……。それが君だ。君はボクが知っているレヴィアंकロウの記憶と心、そしてREVのダウンロードデータを持って過去に飛ぶんだ。そして、もう一度ボクに出会って欲しい」

「……………もう一度、会おう……………」

「君に過酷な運命を背負わせてしまって申し訳ないと思う。でも君にしか任せられない。君にしか救えないんだ。だから——命ずるよ、レヴィ」

悲しそうに、懐かしそうに。彼は複雑な感情を湛えた表情で言った。

「『人間になりたければボクを探せ。本当のボクを見つけた時、お前を人間にしてやる』」

「人間、に……………」

「そうだ。君を愛し、永遠に君を守る……………。愛し、愛される思いはきっと、君を人間にしてくれるから。だから……………おやすみ、レヴィアンクロー」

棺が閉じられる。私はまた、長い眠りに付くだろう。マスターがずっとずっと、棺に手を当て傍にいてくれた。だから眠るのは怖くなかった。また会えると信じているから。

今度は、この暗い一人の夜から私が彼を救ってあげる事が出来るだろうか……………。そんな事を、僅かに願う。

そうしてマスターはもう一人の私の元に歩み寄った。彼女は目覚める事が出来たのだろうか？ マスターは……………ウラは、もう一人の私を抱きしめていた。

ああ、そんな結末も悪くない。いつか彼の元に戻れるのであれば。私は彼を、愛してもいいのだろうか。

愛される事で、人間になるという事を知ってもいいのだろうか。意識が途切れる前に、私はもう一度二人を見た。二人は涙を流し

ながら口付けを交わし、そして――。

「あなたが、ウラですか――？」

棺桶の蓋が吹っ飛んだ。いや、爆発的な力で内側からこじ開けられたのだ。

大空を舞う鉄板。ああ、かわいそうに。何度も何度も空中に舞い上がる残骸。それを片手で受け取り、『彼女』はマンイーターに全く怖気ず振り返った。

「もう一度、問います」

そう、『彼女』。

棺の中から飛び出してきたのは、蒼い蒼い女の子だった。

「あなたがウラ――」

蒼い髪と、蒼いドレスが熱い風に靡いて、蒼い瞳には火を点して。莊厳とした。それでいて涼やかで、力強い。とにかく、見る者を魅了するような圧倒的な存在感。

「あなたが、私を『人間』にしてくれるのですか――？」

そう、だからボクには彼女が人間であるようには思えなかった。

人というものは、必ずしもどこか不完全なものだ。

だというのに彼女は余りにも美しすぎた。

それはもう、『生き物』ではなく、

だからきつとそう。それは生きた『人形』だった。

見下ろす瞳は真っ直ぐにボクを見つめている――。

REV

REVの帰るべき場所を知っているか――？

画面に浮かび上がったメッセージは、静かに消えていった。

REV・16（後書き）

くあとがき

読みたい人だけ読んでね！

と、いうわけで……。全十七部もかかってしまいましたが、何とか完結でございます。

まあ、色々言いたいことはあると思いますが……。！ 思いますが石を投げないでーっ！

はい。今回は空想科学祭——SF競作企画に参加する運びになりました、その為に書き下ろしたわけですが、何か企画小説なのに長かったですね。ごめんなさい。

というわけで、裏話コーナー。

SF企画そのものが正式に始動したのは恐らく七月前だったのだと思うのですが（曖昧）その当時から実は参加してみたいなと考えていました。ただ当時レーヴァテインの連載も終わっていなかったの、レーヴァテインが終了して間に合いそうだったら参加しようかなと思っていたのですが、何とかレーヴァテインが完結したので滑り込んで参加したわけです。

元々競作には興味が無いと言うか、てきとうにやってるだけの自分が他人と交わると言うのもなかなかおこがましい話だとは思ったのですが、実際にやってみると他の作者さんの存在はなかなか刺激になって面白いです。それが生かされているかどうかはまた別の問題で。

本当はロボットに乗って戦うようなのを出そうかと思ったのですが、出来る限り短く纏めるという事を主眼にすえてボツに。結局こうし

てREVという作品が生まれてしまいました。

元々は別タイトルで大昔に企画するだけして執筆しなかった小説を短く纏めただけのものなので特に苦勞せず書くことが出来ました。いつかやりたいと思っていたから楽しかったしね。

ただ、真面目に七年前くらいのデータから再現した為、今の自分とは作風が違ったような気がしないでもない。

今回はとにかくわかりやすい話にしようと思いました。参加者さんは結構濃厚なSFを書かれる方もいますが、濃厚さで比べても自分に勝ち目はないというか面白みはないので、もうだったらSFっぽい何かを思い切りやってやろうと思います。開き直りです。事実ちゃんとしたSFは素晴らしいものがいくつもありますので、そちらの方を期待していただけるとありがたいです。ボクも読みましたがええ、レベルが違いますよ。

そんなわけで王道……ちょっと一昔前のマンガかアニメのSFみたいな感じ、80年代的なものを感じ取っていただけたらありがたいですが、大分今風ですねええええええ！！

王道な始まり、王道な設定、王道な終わり方。よく言えば王道です。がありきたりと言い換える事も出来ます。

出来はボクには定かではないので、あとは読者様の方に色々指摘していただいて力に出来ればと思います。

そんなわけで、下の方に投票ボタンがあつたりしますのでコメントつけて送って戴けると喜びます。特に悪いところは作者メッセージでもいいので指摘していただければ次回作への力になるのでお願いしたいところです。

さて、久しぶりに真面目にあとがきを書いたところでそろそろお開きにしたいと思います。残りの企画開催期間、他の参加者さんの作品を読み漁って見るのはいかがでしょうか？

いや、元々俺は他の参加者のついでに見てやってんだよというその
の貴方！ごめんなさい！

というわけで、神宮寺飛鳥でした。 さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9775e/>

REV

2010年10月12日15時32分発行